ご注文は日常です！

≪たいちょう≫

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

この春、木組みの街に引っ越してきたごく普通の青年、天音　奏斗。初めての土地、そこで偶然出会った少女との出会いにより彼の日常は大きく動き出す。

※投稿は不定期になりますが、よろしくお願いします！

目　次

オリキャラ紹介（今後も追加予定）　1
第1章　日常の始まり
第1羽　木組みの家と石畳の街　6
第2羽　ついに見つけた！My house & boardinghouse　12
第3羽　1日の終わり　20
第4羽　ココアと羊羹　23
第5羽　ピッカピカの2年生！　32
第6羽　よく考えてみたらデートじゃね？　41
第7羽　パンへの愛が尋常じゃない　47
第8羽　俺の暗黒龍が（以下省略　55
第9羽　ベストカップ（深い意味はない）　65
第10羽　嵐のように騒がしく　75
第11羽　極秘潜入任務　83
第12羽　お泊まり会　始　92
第13羽　お泊まり会　ココア編　100
第14羽　お泊まり会　チノ編　108
第15羽　お泊まり会　リゼ編　112
第16羽　お泊まり会　シャロ編　115
第17羽　お泊まり会　千夜編　118
第18羽　好き嫌い克服、奏斗の腕前披露！　121
第19羽　今日の運勢、未来の運勢　128
第20羽　将来の夢と懐かしき思い出　134

第２１羽　いつも通りのあの風景は、もう　前編　――143
第２２羽　いつかの約束を　後編　※挿絵あり　――148
第２３羽　後日談　――160
第２４羽　軍人の娘はおっかな可愛い　――163
第２５羽　それは愛なのか、殺意なのか　――171
第２６羽　和服とメイド服、みんなはどっち派ですか？　――184
第２７羽　ひとときの夢をパフェに乗せて　※挿絵あり　――193
第２８羽　水泳の時平泳ぎは大の苦手って人いるよね　――205
第２９羽　蟠りと消えたパズルのピース　――216
第３０羽　「わしも若い頃はチヤホヤされたものじゃ」「それは今もだろ、親父」「黙っとれ」　――228

オリキャラ紹介（今後も追加予定）

天音（あまねかなと） 奏斗

本作の主人公。

奏斗の父親の仕事の都合上というテンプレ感が漂う中、木組みの街に引っ越してきた。今は、高校２年生。

引っ越す前は、桜花市（おうかし）というところの桜花高校に通っていた。

勉強もでき、運動もそこそこ。加えて、料理もできるという事でココア達にも尊敬（嫉妬）されている。

作者からも嫉妬されている。爆発しろ。

――プロフィール――

年齢：１６歳

学年：高校２年生

誕生日：７月２日

身長：１７５ｃｍ

血液型：Ｏ型

好きなもの：苺、プリン

嫌いなもの：嫌いというか苦手な人は奏楽姉ちゃん

趣味：料理

天音（あまねひさと） 久人

天音　奏斗の父親。

本編では、どのような素性かは明かされていないが、仕事は料理関係。そして、能天気な性格。

ただ、そんな人でも真面目な時は凄く真面目だし、ガチギレすると超怖い（奏斗からの情報）。

折々ネタを引っ張ってくるが、大体つまらない。

ちなみに、奏斗父の名前が出るのはこれが初めてだったりする。

チノの父、タカヒロさんとも親しいらしい。（ネタバレ？）

――プロフィール――

年齢：３９歳

職業：料理関係
誕生日：８月９日
身長：１７８ｃｍ
血液型：Ｏ型
好きなもの：お酒
嫌いなもの：甘いもの
趣味：ガンプラ作り

天音（あまね）　奏楽（そら）
天音　奏斗の姉。
大学２年生。奏楽の通う大学は木組みの街からちょっと離れたところにある。
多芸多才で、勉強、運動なんでも来いの万能人。スタイルも抜群という事で、大学でも大人気。
奏斗も尊敬しているが、彼女特有の自由奔放な性格に振り回されている。
奏斗が高校１年生の時から、大学に行くため独り暮らしだったが、現在は奏斗の住む家に２人で暮らしている。
こう見えても、彼氏はいない。
――プロフィール――
年齢：１９歳
学年：大学２年生
誕生日：６月２日
身長：１５８ｃｍ
血液型：Ｏ型
好きなもの：奏斗の作る料理
嫌いなもの：ゴーヤ
趣味：奏斗をいじる

白咲（しろさき）　桜雪（さくな）
奏斗の友人。桜花高校生。

奏斗とは、高校1年生の時に知りあった。
自分も自覚しているほど、奏斗に好意を寄せている女の子。
学校でも、可愛いと噂の女の子で、奏斗が桜花高校に通っていた時は、一時は付き合っているのではないかと噂されていたほどの仲の良さだった。
最近、奏斗が連絡をくれないのでプンスカ状態。

――プロフィール――

年齢：16歳
学年：高校2年生
誕生日：8月4日
身長：156cm
血液型：A型
好きなもの：シュークリーム
嫌いなもの：イカ
趣味：裁縫

真田（まだ）白雄（しらお）
奏斗の友人。桜花高校生。
小学生からの古き友人の1人。
あだ名はマダオ。本人は嫌がっているが、内心嬉しい。
白雄の父親は、大企業の会社の社長を務めている。その恩恵もあってか、御偉いさん方が集まるパーティにも招待される事もある。
見た目はいいのに、すぐに女の子にナンパする性質があるため結構女子からは引かれている。が、人気なのが憎い。
自称、女の子の正義の味方。

――プロフィール――

年齢：16歳
学年：高校2年生
誕生日：1月18日
身長：175cm
血液型：O型

好きなもの：女性の方々
嫌いなもの：女の子を馬鹿にするような輩
趣味：女の子へのナンパ

神崎（かんざき）　悠斗（ゆうと）
奏斗の友人。桜花高校生。
小学生からの古き友人の１人。
サラサラヘアーにメガネを着けていて、一部では永野（真面目バージョン）と呼ばれている。
そんな悠斗だが、家での日課は筋トレ。隠れ細マッチョだ。
服に隠れてはいるが、その内側には引き締まった体と鍛え上げられた筋肉が隠れている。
最近太ってきて、絶賛減量中。
――プロフィール――
年齢：１６歳
学年：高校２年生
誕生日：３月２０日
身長：１８０ｃｍ
血液型：Ｂ型
好きなもの：カロリーメイト
嫌いなもの：高い所
趣味：筋トレ

白井（しらい）　洸夜（こうや）
奏斗の友人。桜花高校生。
小学生からの古き友人の１人。
場を盛り上げることに長けていてクラス内でも有名。本編でもおかしいテンションで重い雰囲気を和ませた。
将来は芸人という事だが、奏斗達もその方が良いと洸夜の夢を応援している。
日課は、部屋の中でボケとツッコミを１人でやる事。相方募集中。

――プロフィール――
年齢：１６歳
学年：高校２年生
誕生日：４月６日
身長：１７２ｃｍ
血液型：Ｏ型
好きなもの：芸人
嫌いなもの：タバコの匂い
趣味：ツッコミ

笹原（ささはら）　桃（もも）
奏斗の友人の１人。クラスメート
奏斗とは、高校１年生の時に知り合った。クラス委員長をやっていて、話す時も敬語。そういう部分で真面目だ、という事で男女問わずに人気がある。
ーーークラス委員長、と言っても昔はそこまで進んでやる性格ではなかった。だが、１年生の時に奏斗に助言をかけられてから性格が一変。どんな物事にも物怖じせず、進んでやるようになった。あれ以来、奏斗を尊敬している。
一応言っておくが、奏斗に好意を寄せている。奏斗、爆発しろ。
――プロフィール――
年齢：１６歳
学年：高校２年生
誕生日：９月１日
身長：１５５ｃｍ
血液型：Ａ型
好きなもの：チョコクッキー
嫌いなもの：やる気を出さない人
趣味：ピアノ

第1章　日常の始まり

第1羽　木組みの家と石畳の街

「う～ん、道迷っちゃったかな？」

俺は　天音（あまねかなと）奏斗親の都合ってやつで今日からここ木組みの家と石畳の街に引っ越してきた。そんでもって俺が住む家を探しているんだけど。絶賛迷い中、ってわけ

奏斗「近くの人に聞いてみるか・・・って、うお!?」

???「きゃあ!?」

曲がり角を曲がった先にいた人とぶつかってしまい、そのぶつかった相手は尻餅をついてしまった。

奏斗「大丈夫ですか!?」

???「あ、うん。ありがとう！」

奏斗「すいません、俺の不注意で・・・ケガとかはないですか？えっと・・・」

???「保登（ほとこ）心愛（ここあ）ココアでいいよ！あと敬語も使わなくていいよ！」ニコッ

明るい子だな・・・誰とでも仲良くなれそうだ。現に今他人の俺に敬語使ってないし。可愛いし。

奏斗「ああ、よろしくココア」

ココア「奏斗君はこっちに何しに来たの？」

奏斗「俺か？俺は親の都合で引っ越してきたんだ。ココアは？」

ココア「私はこの春からこの街の高校に通う為に来たんだ！それで私の通う高校は『ホームステイ先の家の手伝いをしろ』って言う決ま

りがあって、その下宿先を探してるところなの！」
奏斗「探してるってことは、俺と同じだな」
ココア「そうなの？」
奏斗「ああ、俺の家を探してるんだけど、迷っちゃって・・・」
ココア「そうなんだ！私と一緒だね！」

お前もか

あれから数分、ココアについていくような形で歩いていると
ココア「・・・ラビット・・・ハウス？」
奏斗「どうしたココア？」
ココア「ねぇねぇ奏斗君！入ってみようよ！」
奏斗「下宿先探しは!?」
ココア「休憩ってことで・・・だめかな？」
奏斗「わ、わかったよ」
ココア「わーい！ありがとう！」
ココア、上目遣いは反則だ・・・。それにしてもラビットハウス、なんか聞いたことあるな

???「いらっしゃいませ・・・」
へーこんな小さい子が店やってるのか、ぱっと見中学生ぐらいか？
ココア「うっさぎ♪うっさぎ♪」
???「・・・？」

ちょっとココアさん？店員さんが困ってますよー？
ココア「うさぎがいない・・・・」
奏斗「お、おいココア？」
ココア「うさぎがいない！」
奏＆???「・・・・」
ココア「うさぎがいない!!!」
???「なんだこの客・・・・」
すいません店員さん・・・ココアを許してやって・・・

ココア「うさぎ・・・？」
???「これですか？・・・これはティッピーです。一応うさぎです」
ココア「うさぎ!?」
奏斗「へぇー見たことないな」
???「あの、ご注文は・・・・」
ココア「そのうさぎさん！」
???「非売品です」
ココア「うぅ～・・・・」
そりゃあそうなるわな
ココア「せっせめて・・・せめてもふもふさせて!!」
???「コーヒー1杯で1もふもふです」
ココア「じゃあ3杯!!」
???「・・・・！」
???「あっそちらの方は？」
奏斗「あ、オリジナルブレンドで」
???「かしこまりました」

???「お待たせしました」
奏コ「「おぉ・・・」」
ココア「奏斗君のも合わせてコーヒー４杯頼んだから、４回触る権利を手に入れたよー！」
奏斗「冷める前にコーヒー飲（めよ）んでください」
???「あうっ・・・そ、そうだね！」
ココア「この上品な香り・・・これがブルーマウンテンか！」
奏斗「いや、コロンビアだぞ」
???「・・・!?」
ココア「奏斗君、コーヒー詳しいの？」
奏斗「まぁそれなりにはな」
???「で・・・ではこっちは何かわかりますか？」
奏斗「えっとこれがブルーマウンテンで、こっちのがおそらくキリマンジャロ・・・かな？」
???「すごいです・・・全部正解です！」
ココア「奏斗君・・・！香りだけでわかっちゃうなんて！」
奏斗「まぁコーヒーは好きだからそういうことに関しては知ってるんだ」
???「あの・・・」
奏斗「どうしました？」
???「オリジナルブレンドも飲んでいただけないでしょうか？」
奏斗「あ、はいわかりました」
???「・・・・・」
奏斗「うん、とても美味しいですよ！俺の好みの味です」
???「っ！そうですか！・・・・・・・・あの、またうちに来てくれませんか？」
奏斗「うん、喜んで！それはそうとココア、うさぎもふもふしなくていいのか？」
ココア「はっ・・・忘れてた！じゃあさっそく・・・」

???「どうぞ・・・・」
ココア「んふふ～もふもふ気持ちいい～あっいけないよだれが・・・」
「のおおおおおお」
奏コ「「!?」」
奏斗「今声が・・・」
???「気のせいです」
奏斗「えっいや、でも」
???「気のせいです」
奏斗「あ、はい」
ココア「それにしてもこの感触クセになるな～♪」
???「・・・・」プクー
心なしか頬を膨らませてるような・・・可愛い。
「ええい、はやくはなせこの小娘が!!」
やっぱこのうさぎ喋るでしょ!?
ココア「今この子にダンディーな声で拒絶されたんだけど!?」
???「・・・・それは私の腹話術です」
女の子にこんなダンディーな声出せるの!?
奏斗「いや、絶対ｓ「すごーい！」
信じちゃうのかよ・・・ちょっとはおかしいと思わないのかこいつは！

奏斗「あ、そうだ自己紹介をしようかな？」
???「ああ、そういえばしていませんでしたね」
奏斗「俺は天音　奏斗、今日からこっちに引っ越してきたんだ！よろしく！」

ココア「私は保登　心愛よろしくね！」
チノ「私は香風（かふう）　智乃（ちの）ですよろしくお願いします」
奏コ「「香風・・・？」」
チノ「どうされました？」
奏コ「「ここだあああああああ」」
チノ「・・・・!?」

第２羽　ついに見つけた！Ｍｙ　ｈｏｕｓｅ　＆ｂｏａｒｄｉｎｇｈｏｕｓｅ

まさかココアの下宿先がここ、ラビットハウスだったなんてな・・・そうこれはまさに！

奏斗「ぐうｚ「偶然を通り越して運命だよ!!」

奏斗「」

チノ「奏斗さん？どうかしましたか？」

奏斗「なんでもない・・なんでもないよチノちゃん・・・」

ココア「そういえば！」

奏斗「ん、どうした？」

ココア「奏斗君のお家は？」

あ、そういえば

奏斗「チノちゃんこの地図の場所わかるかな？」

チノ「えっと、・・・・ここはラビットハウスの向かい側の家です」

奏斗「そっか向かい側ね～・・・・」

奏斗「って近!?」

ココア「すっごい偶然だね！」

俺の場合は運命じゃないのん？

奏斗「とりあえず俺は家に行ってみるよ。ココアはどうする？」

ココア「あ、チノちゃんに説明してなかった！」

チノ「なんでしょう？」

ココア「あのね。私の高校の方針でね、下宿させてもらうかわりにその家にご奉仕しろって言われてるんだよ！」

奏斗「まぁ働かせてもらうってことだな」

チノ「なるほど。といっても私一人で家事はなんとかなってますし、お店も十分人手が足りているので。ココアさんは何もしなくて結構です」
ココア「いきなりいらない子宣言されちゃった・・・」
ココア「とりあえず挨拶をしたいんだけど。マスターさんは留守？」
チノ「祖父は去年・・・」
奏斗「そうか、今はチノちゃんが1人で店を切り盛りしてるのか・・・」
チノ「いえ、父もいますし。バイトの子がもう1人っ・・・！」
ココア「私を姉だと思ってなんでも言って!!」ギュー
奏チ「「・・・・・・」」
ココア「だから私をお姉ちゃんって呼んで？」
あーこれ絶対言って欲しいやつだな・・・
チノ「じゃあ・・・ココアさん」
ココア「お姉ちゃんって呼んで！」
チノ「・・・ココアさん」
ココア「お姉ちゃんってよん「ストーップ!!」
さすがに止めるわ、何回続くんだよ
チノ「ありがとうございます奏斗さん。ココアさん、さっそく働いてください」
ココア「任せて？」
奏斗「ふぅ～、じゃあ俺は行くね？」
チノ「はい、ありがとうございました。また・・・来てください」
奏斗「うん、わかった。ココアもまたな！」
ココア「うん！じゃあね！」

奏斗「さてと、これが俺の家か・・・普通だな」
ガチャ
まだ荷物は来てないか・・・暇だな
プルルルル
奏斗「っと父さんからか。はい、もしもし？」
父「奏斗か、家にはついたのか？」
奏斗「ああ、まだ荷物は来てないけどな、というかちょっと広すぎやしないかここ」
父「大丈夫だ問題ない。」
奏斗「エル○ャダイネタはやめろ」
父「なんでだエルシ○ダイいいだろ？　　一番いいのを頼む！はっはっはっ」
声が妙に似てるからウザい・・・
奏斗「はいはい・・・それで父さん、なんか用でもあったのか？」
父「ああ、そうだった。お前が通う高校なんだけどな・・・・お前はお嬢様学校で共学化試験の特待生として入ってもらうことになった」
奏斗「へ？」
父「お前しか男はいないからそこんところよろしく」
奏斗「なにがよろしくだよ！何一つよろしくないよ!?」
父「じゃあ、またな。頑張れよ！」（？・、？・、？）？　グッ！
奏斗「ちょ、待ってぇぇぇ！」
プチッ　プープープー
奏斗「おぉぉぉぉぉぉぉまいごぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉっど!!!!!」

ココア　ｓｉｄｅ
チノ「このクローゼットを使ってください。制服持ってきますね」
ココア「わぁ～ありがとう！」
ラビットハウスの制服どんなのなんだろう？楽しみだな～！
ココア「制服！制服！・・・？」

誰もいないはずなのに、誰かに見られてる気が・・・・
そして私は一番奥のクローゼットを開けた・・・

奏斗　side
俺は今ラビットハウスに向かっている。なんでかって?家にいても暇だからだよ!
というのは嘘で、これからお世話になるから挨拶しにきたんだ
奏斗「こんにちは~ってーいないな・・・」
キャーーーーー
っ!今のはココアの声!不審者か!?今のは奥から聞こえたな、早く行かないと!!
右手奥に更衣室が見えたのでそこにとりあえず入ってみると・・・・

ココアと銃を持っている下着姿の女の子がいた。
それを確認したすぐに俺は強烈な痛みとともに意識を失った。

奏斗「・・・・はっ!」
目が覚めるとチノちゃんとココア、あともう1人知らない子がいた

ココア「うわ～ん奏斗君やっと起きたよ～！」ダキッ
奏斗「ちょココア!?」
やばい、女の子の香りと胸が・・・・っといかんいかん
奏斗「ココア、大丈夫だったか？」
ココア「うん、それよりも奏斗君の方が大丈夫なの？」
奏斗「大丈夫だって、それよりその子は？」
チノ「この人はリゼさんです。ラビットハウスのバイトをやっています」
リゼ「その・・・さっきはすまなかった。見られたとはいえ殴ってしまうとは・・・」
奏斗「いや、俺の方こそ悪かった。だからこれでおあいこってことで」
リゼ「ああ、その、助かる」
奏斗「そういえば自己紹介してなかったな。俺は天音　奏斗、奏斗でいいぞ」
リゼ「私は天々座（てでざ）　理世（りぜ）。リゼでいい」
奏斗「よろしく、リゼ。ていうかココアはいつまで抱きついてるんだよ」
ココア「えっあっうん！今離れるから！／／／」
チノ「それよりも、奏斗さんはどうしてここにいるんですか？」
奏斗「ああ、これからお世話になるってことで挨拶しにきたんだ。はい、お土産」
チノ「あ、ありがとうございます」
リゼ「へぇ～これ手作りか？」
奏斗「まぁな」
俺が渡したのは手作りクッキー。こっちに引っ越してくる前に事前に作っていたんだ
ココア「すごーい！お菓子作れるんだ！」
奏斗「お菓子というか料理全般はできるぞ」
チノ「完璧ですね・・・！」
ココア「チノちゃん、食べていい？」

チノ「いいですよ。リゼさんもどうぞ」
リゼ「いいのか？それじゃあ遠慮なく」
パクッ
奏斗「どうだ・・・？」
チリコ「「おいしい（です）・・・！」」
奏斗「よかった・・・口に合わなかったらどうしようかと思った」
チノ「いえ、とても美味しいです！うちに欲しいくらいです！」
リゼ「チノ、それって・・・」
チノ「・・・！／／／い、今のはなんでもありません！え、えっと言葉の綾というかなんというか・・・・／／／」
リゼ「そ、そうか・・・」
奏斗「よければ、また作ろうか？」
ココア「ほんと!?じゃあその時はよろしくね！」
奏斗「わかった」
ていうかさっきチノが言ってたうちに欲しいってのはバイトとして欲しいってことなのかな？んーバイトか・・・・ちょっと考えてみるか
奏斗「ていうかココア、制服着替えてたんだな」
ココア「うん！どうかな？」
奏斗「制服の色がココアらしくてとても似合ってるぞ？」
ココア「あ、ありがとう・・・／／／」
チノ「・・・」プクー
奏斗「ん？どうした？チノちゃん」
チノ「なんでもありません」プイッ
奏斗「あー、チノちゃんも似合ってるぞ？」ナデナデ
チノ「な、なにを!?／／／」
奏斗「あ、ごめん。俺の妹みたいだったからつい」
チノ「妹・・ですか／／／じゃあ奏斗お兄ちゃん？／／／」ウワメズカーイ
奏斗「っ!!チノちゃん！もう一回!!」
チノ「　もう言いません・・・！」

くそっ、録音しとけばよかった～～～!!!
チノ「それよりリゼさん、ココアさんと一緒にコーヒー豆の袋をキッチンまで運んできてください」
リゼ「わかった」
奏斗「リゼ、ココアに先輩として色々と教えてあげろよ？」
リゼ「きょ、教官ということだな！」
奏チ「「嬉しそうだな（ですね）」」
リゼ「この顔のどこがそう見える！」
ココア「よろしくねリゼちゃん！」
リゼ「上司に口を聞く時は言葉の最後にサーをつけろ!!」
ココア「お、落ち着いてサー！」
どこの軍人だよそれ

ココア達は倉庫の方に行っちゃったし俺はどうしようかな。あ、前々から気になってたけど、チノちゃんの上に乗ってるうさぎのこと聞いてみようかな
奏斗「なぁ、チノちゃん」
チノ「はい？なんでしょう」
奏斗「そのうさぎって・・・・喋るよね」
チノ「さすがにあれでは騙せないですよね・・・はい、奏斗さんの言う通りティッピーは喋ります」
やっぱり喋るんだ・・・・
奏斗「でもなんで？」
チノ「おじいちゃんが亡くなった時にティッピーにおじいちゃんの魂が乗り移ったみたいなんですが、どうやってなったのかはわかりませんでした」
奏斗「そうだったんだ・・・」

チノ「これは他の人には内緒ですよ？」
奏斗「わかった、誰にも言わないよ」

第3羽　1日の終わり

奏斗「やっぱり面白いな～これ」
チノちゃんと話した後はラビットハウスにいる理由もなかったので再び挨拶をしてから自分の家に帰った。
帰ってからは暇だったから俺が持ち合わせていたうさぎのバリスタっていう小説を読んで時間をつぶしていた。
ピロロン♪
奏斗「ん、着信・・・ココアからか。なんだろう？」
連絡先の交換は帰る前にみんなとしておいたけど、こんなに早く連絡が来るとは思わなかった。
そんなことを思いながらメールをみると
『今日は一緒に下宿先探してくれてありがとう！Σｄ（ゝ∀・）あの後ラテアートっていうのをやって、そのとき作った画像を一緒に送っておいたよ！よければ感想聞かせて欲しいな！（？・、？・、？）？』
奏斗「へぇ、どんなのだろ・・・？」
画像を見てみると、そこには四つのコーヒーにそれぞれ顔が書いてあった
奏斗「えっと・・・これは俺か？それでこっちがチノで、これとこれがココアとリゼか・・・結構上手いな」
意外にも絵が上手だったからびっくりしてしまった、壁紙にしとくか。それよりも感想を書かなきゃだな
奏斗「えっと、『とても上手でびっくりしたぞ!?（?? ロ??）?!!』っと・・・」
顔文字は気にしたら負けだよ？
ピロロン♪
わー、サラマンダーよりはやーい。

おいおいおい、来るの早くね!?ずっとスタンバってたのか?ってくらい早い
奏斗「え～となになに?」
『感想ありがとう!そう言ってもらえて嬉しいな!それじゃあまた明日ね!』
奏斗「『おう、おやすみ』っと・・・」
ピロロン♪
おう?次は・・・・・・チノちゃんか
『今日はどうもありがとうございました、これからよろしくお願いします!それではおやすみなさい』
奏斗「ははっチノちゃんらしいな。『うん、また明日ね!おやすみ』っと」
さーてそろそろ寝るとしますかね・・・

一方その頃リゼ宅では・・・・

―――――――――――――リゼ宅―――――――――――――

はぁ～チノとココア楽しそうだったなぁ。それに比べて私は・・・
リゼ「はぁ～」
ピロロン♪
メール?ココアからだ、なんだろう?
『明日からもよろしくね♪』
その文と一緒に画像が貼ってあった
これは・・・・ラテアートか?
リゼ「あいつ・・・・こんなの作ってたのか・・・・」
でも、なんだか嬉しいな・・・
リゼ「ふふっ・・・壁紙にしておこう・・・・」

――――――――――――――――――――ラビットハウス――――――――――――――――――――

ココア「はぁ～」

チノ「ココアさん？」

夜空を見ながら今日あったことを思い出していた、今日偶然出会った奏斗君のこと、ラビットハウスのバイトさんのリゼちゃんのこと、チノちゃんのこと。それとあともう1つ・・・・

ココア「シチューおかわりしておけばよかった・・・・」

チノ「そんなことを・・・」

ココア「チノちゃん！」

チノ「？」

ココア「この街とっても素敵だね！」

チノ「そう・・・ですか？」

ココア「うん！私この街に来てよかった！これから沢山楽しいことがありそう！」

チノ「・・・・・ココアさん、よろしくお願いします」

ココア「お姉ちゃんとして頑張るね！」

チノ「やっぱりちょっと待ってください・・・・」

あれー？・・・・やっぱりダメかな？

ココア「えー？今日は一緒の布団で寝ーる♪」

チノ「うっ・・・」

よーし！明日から頑張るぞー！

第４羽　ココアと羊羹

俺　天音　奏斗は現在ココアを探しに街を走り回っている。何故かって？それはだな・・・

時は朝まで遡る――――

～～～～～～～～～～～～

俺は今、街の探索及び朝の散歩に出かけようと思っている。さっき電話で引越し業者から連絡があって、今日の午後２時ぐらいに荷物が届く予定とのこと。ずっと家にいるのもあれだから街に出て、地形を知っておこうと思った。

奏斗「朝食もとったし、いきますかね」

靴を履き玄関を開けると、ラビットハウスからもココアとチノちゃんと父親？らしき人が出てきたが出てきた。

チノ「あっ・・・奏斗さんおはようございます」

ココア「おはよう！奏斗君！」

へぇーこれがチノとココアの制服かぁ、かわいい。

奏斗「おはようチノちゃん、ココア。制服似合ってるぞ。それと・・・チノちゃんのお父さんですか？おはようございます」

タカヒロ「これは丁寧にどうも、私は香風　タカヒロ。君の言っていた通り私はチノの父だよ。私はラビットハウスのバータイムで働いているから気軽に来てくれ。酒は出せないけどなハハッ」

奏斗「どうも、こちらこそよろしくお願いします」

うぉーすっげぇ渋くてかっこいいなこの人

タカヒロ「それじゃあチノ、ココア君いってらっしゃい、気をつけて」

奏斗「いってらっしゃい！」
ココア「いってきまーす！」フリフリ
チノ「いってきます」
奏斗「それではタカヒロさん、俺は散歩に行ってくるので失礼しますね」
タカヒロ「ああ、いってらっしゃい」

しばらく歩いていると公園みたいなところに来た。なんかめっちゃウサギいるじゃん
こっちきたときにも思ったんだが、何故ここの街にはウサギがたくさんいるんだ？そんなことを考えながら、ベンチに座った。
奏斗「おいでーおいでー」
ピョンピョン
モフゥ…
あぁ^～心がぴょんぴょんするんじゃぁ^～
あーまじ癒される。かわいいいいい！これはココアの気持ちが少し分かるな。
???「隣座ってもよろしいでしょうか？」
奏斗「え？あ、はい、どうぞ」
いきなり声をかけられたもんだから、すこしキョドってしまった。
あ、うさぎ逃げちゃった
???「私、小説家なんです」
奏斗「え？そ、そうなんですか？」
な、なんだいきなり・・・？
???「こうやって散歩したりして、ネタを探してるんです」
奏斗「へぇー、ちなみにどんな小説を書いてるんですか？」
???「えーと、うさぎになったバリスタが代表例でしょうか？」

む?うさぎになったバリスタ?もしかすると・・・
奏斗「それじゃああなたはまさか・・」
青山「はい、青山ブルーマウンテンというものです」
うおおおマジかよ、こんなとこで会えるなんて!
うさぎになったバリスタを読んでから小説にハマったんだよなぁ・・・
奏斗「あ、あの!俺天音　奏斗って言います!青山さんのファンです!よければサインを・・・って今は本持ってきてなかったんだった・・・」
青山「ふふふ、なら明後日またここで会いましょう?奏斗さんともいろいろお話ししてみたいですから~」
奏斗「はい!ありがとうございます!・・・っともうこんな時間か、では俺はそろそろ帰りますね」
青山「はい、またお会いしましょう~」フリフリ

来た道を帰っていると電話がかかってきた。
奏斗「ん?リゼ?」
なにかあったのだろうか?とりあえず電話にでよう
奏斗「もしもし、リゼ?」
リゼ『奏斗か?ちょっと頼みたいことがあるんだが・・・・』
奏斗「どうした?」
リゼ『実は・・・・』

リゼ　ｓｉｄｅ

ココア「あっ！おはよう！リゼちゃ～ん！おお！ブレザーかっこいい!!」

リゼ「別に普通だろ？」

ココア「ねぇねぇ！制服交換してみない？」

リゼ「自分の学校行けよ・・・遅刻するぞ？」

ココア「あ！じゃあまたお店でね～」

リゼ「ああ、迷子になるなよ～」

・・・・・なんか心配だ。

数分後――

ココア「あ！リゼちゃんまた会ったね！」

何でまたいるんだ？い、いや偶然だきっと。うん、そうに決まってる・・・・・・・・・・・・・・・まさか迷ってる？

リゼ「お、おい学校への道わかってるのか!?」

ココア「心配しなくても大丈夫だよ～」

さらに数分後――

ココア「すっご～い！また会った～！」

・・・・・偶然だよ、な？

さらにｓ（ｒｙ

ココア「あれあれ～？まただ～！」ニコニコ

うわあああ、もうこれ偶然とかそうレベルじゃないだろ!!!

あれか!?私は異次元に迷い込んだのか!!!!!!

リゼ「うわあああ・・・・・・」

ココア「どうしたの？もしかして・・・迷子？」

リゼ『ということがあってだな・・・・なぁ奏斗！私は異次元に迷い込んでしまったのか!?』
奏斗「安心しろ、ココアが迷ってるだけだ」
リゼ『そ、そうか、それで頼みなんだが。ココアを学校に連れて行ってやってくれないか？連れて行きたいのは山々なんだが、私にも学校があるから・・・』
奏斗「わかった、任せておけ！」
リゼ『ありがとう！奏斗。それじゃあまたな』
奏斗「おう、またな」

～～～～～～～～～
そして今に至るんだが、ああは言ったもののココアの居る場所が全然わからない。とりあえずさっき俺がいた公園に行ってみるか・・・・
奏斗「ココアーどこだー？ココ・・・ん？」
俺が見る先には栗羊羹を持った少女がその栗羊羹でうさぎを釣ろうとしているという摩訶不思議な光景があった・・・・なにやってんの？
???「食べないわねー」
いや食べないだろ！
???「うちの子は食べるのにー」
そんなうさぎいるのかよ！・・・・あっ女の子が釣れた・・・・ってよく見たらココアじゃん!!
奏斗「おーいココア！」
ココア「ん？あっ！奏斗君だ、どうしたの？」
奏斗「どうしたの？じゃなくて、学校は!?」
ココア「あ！忘れてた！遅刻しちゃうー！」
???「あのー」
奏コ「「ん？」」

???「その制服、うちの学校だと思うんだけど・・・・入学式は明日なの」
奏斗「・・・・・あっ（察し）」
ココア「え？」
???「だから、入学式は明日よ？」

ココア「うわぁぁぁぁぁぁ、恥ずかしい～！／／／」
奏斗「まぁ・・・あれだ、こういう事もあるさ！」
???「面白い子♪あなたが迷わないように、学校の下見に行きましょう？」
ココア「めっ女神様～!!」

奏斗「へぇ～それじゃあ千夜はその甘兎庵ってとこで和菓子作ってるんだ？」
千夜「ええ、今ちょうど和菓子持ってきてるから食べる？」
奏斗「え？いいのか？」
千夜「ええ、はいどうぞ」
ココア「それじゃあ頂きまーす！」
ハムッ
奏コ「「おいしい!!」」
千夜「それは私の自信作なの！・・・・・幾千の夜を行く月・・・・」

おいおい、なんか始まったぞー？
千夜「名付けて・・・・千夜月！栗を月に見立てた栗羊羹よ！」キリッ
俺もこういうのやったなぁ・・・くっ俺の右腕が疼く・・・・やめておこう。
ココア「なんかかっこいい・・・！意味わかんないけど！」
千夜「私たち気が合いそう！」
ココア「うん！」
奏斗「よかったな、友達できて」
ココア「よろしくね千夜ちゃん！」
千夜「こちらこそよろしくねココアちゃん！」

千夜「ここが、明日から通う高校よ？」
あれ？中学校って書いてるけど・・・・？
ココア「私の新しい学び舎かぁ！見てるだけでワクワクしてくるよ～」
ココア「ここで青春時代を過ごすのかぁ。友達と泣いて笑って時には喧嘩して――――」
千夜「ねぇ奏斗君。ここが中学校ってこと言っておいたほうがいいかしら？」コソコソ
奏斗「ココアがあそこまで熱心に語ってるんだ・・・・。やめておこう・・・・」コソコソ

ココア「奏斗君！絶対にチノちゃんに言っちゃだめだよ！」
奏斗「わかってるって」
知ってると思うが今日は学校がなかったってことだ
カランカラン
チノ「ただいま・・・・あっ奏斗さんも来てたんですか」
奏斗「おう、おかえりチノちゃん、お邪魔してるぞ」
ココア「おかえりチノちゃん！」
チノ「ココアさん、高校の方はどうでしたか？」
奏斗「・・・・！」
言っちゃおっかなーー
ココア「・・・この街ってかわいい建物が多くて素敵だよね！」
チノ「そうですか・・・高校はどうでしたか？」
奏斗「・・・・・・」
言っちゃおっかなーーーーーー
ココア「ま、まるで童話の中の街みたいだよね！」
チノ「ココアさ・・・・」
ココア「聞かないで！」
チノ「どうしたんでしょうか？」
すまんなココア
奏斗「あのねチノちゃん、ココアは・・・カクカクシカジカ」コソコソ
チノ「・・・・・フフッ。ココアさんらしいですね」コソコソ
奏斗「だろ？」クスクス
チノ「はい」クスクス
ココア「ねぇ何で２人とも笑ってるのー!?」

そのあと俺がチノちゃんに教えたことがバレて怒られたのは言うまでもない

第5羽　ピッカピカの2年生！

あ～今日から学校か・・・男って俺1人だけなんだよな？うわ、どうしよう友達できないよ。
とっもだっちひゃっくにんでっきないよ♪
いやいやダメだろ・・・・。
奏斗「はぁ～、学校行くか・・・」
ピンポーン
ん、誰だろう？
ガチャ
玄関のドアを開けるとココアとチノがいた
ココア「おはよう奏斗君！」
チノ「こんにちは奏斗さん。途中まで一緒にいきませんか？」
奏斗「おはようココア、チノちゃん。いいよ！行こうか」
靴を履き外に出る
タカヒロ「それでは3人ともいってらっしゃい」
奏斗「行ってきます！」
ココア「いってきま～す！」
チノ「行ってきます」

ココア「そういえば、奏斗君ってどこの高校なの？私の高校の制服とは違うみたいだけど・・・」
チノ「あ、それ私も気になります」
奏斗「俺？俺はお嬢様学校のとこだけど・・・」
ココア「えぇ～！あそこって女の子しかいなかったよね!?」
チノ「それに偏差値も高いって言われてる・・・」

奏斗「ああ。俺の高校共学化に向けてやってるみたいで、その特待生として入るんだ」
ココア「奏斗君って頭いいんだ！」
チノ「料理もできて頭もいい・・・前にも言いましたけど完璧すぎます・・・・！」
奏斗「いやいや、料理は俺が1人暮らしするから覚えただけだし・・・」
チノ「それであの出来栄え・・・・奏斗さんはたった今、全世界の女性を敵に回しました！」
奏斗「えぇ!?そこまでか!?」

あのあとココア達と別れ学校に向かっていた
キャーーーーー
今のは路地からか!?こっちか?すると別のところからリゼが出てきた
奏斗「うお!?リゼ?なんでここに?」
リゼ「それはこっちのセリフだ！それよりも・・・」
奏斗「ああ、悲鳴が聞こえたから来てみたけど・・・」
???「ごめんなさい、なんでもしますからぁぁ!!」
奏リ「なんだこれ・・・」
そこには俺と同じ学校の生徒らしき金髪の女の子がうさぎに土下座しているというカオスな光景があった。
奏斗「あ、あの～」
???「・・・・！お願いします！助けてください!!」
奏斗「わ、わかった・・・ほら困ってるだろ?」
ピョンピョン

奏斗「ほら、行ったぞ？立てる？」
そう言って手を差し伸べる
???「あ、ありがとうございます・・・」
リゼ「大丈夫だったか？」
???「は、はい！お見苦しいところをお見せしました・・・・」
奏斗「まずは自己紹介からだな。俺は天音　奏斗、奏斗でいいよ。でこっちが」
リゼ「天々座　理世だ。苗字の方は呼びにくいからリゼでいい」
シャロ「わ、私は桐間　紗路です!!（もしかしてあのリゼ先輩!?）」
奏斗「とりあえず歩きながら話そうか」

リゼ「つまり、うさぎが怖いってことか」
話を聞くところ、どうやらシャロは小さい頃にうさぎに噛まれたことがあったらしく、それ以来トラウマになっててうさぎが怖いそうだ。
シャロ「は、はい・・・」
奏斗「でもそれはしょうがないだろ、気にするなって。これでも俺も怖いものがあるからな！」
リゼ「そんなに胸張って言えることじゃないだろ！」
シャロ「ふふっ・・・ありがとうございます。奏斗先輩、リゼ先輩」
よかった、笑顔になってくれたな

リゼ「というか今気づいたんだが、奏斗のその制服うちのじゃない

か？」
シャロ「あ、そういえばうちの高校今年から共学になるって・・・」
奏斗「ああ、俺は特待生なんだよ」
リゼ「なに!?そうだったのか。クラスは決まってるのか？」
奏斗「いや、まだ知らない。多分学校の人が教えてくれるだろ」
シャロ「ちなみに学年は・・・？」
奏斗「２年だ」
リゼ「そうか、だったら一緒のクラスになるかもしれないな」
奏斗「できれば一緒がいいんだが・・・」
リゼ「え!?」
奏斗「あっいや、友人がいるとこならクラスにも溶けこめるかもってことで・・・」
リゼ「紛らわしいことを言うなー！／／／」
そう言って俺の顔面にストレートをぶち込まれた

と思っていたのか？
さすがに二度目となれば当たるわけ・・・・
奏斗「ぐはぁ！」
まさかの二撃目・・・・不覚・・・・
奏斗「いってぇえええ！」
リゼ「お前変なこと言うからだ！／／／」

あのあとリゼ達と別れて、俺は職員室へ向かっていた
奏斗「失礼しま～す・・・・」
先生「君が今日から編入してくる特待生の天音　奏斗ですか？」

奏斗「あ、はい。そうです」
先生「ではついてきてください」

あれから校長室で長い長～い話を聞いた。ちなみに俺のクラスは2―2だ。そして現在そのクラスの前で先生に呼ばれるまで立ってる。
あーマジ緊張する・・・
先生「では、入ってください」
うわーきちゃったよ！地球のみんなオラに元気を分けてくれー！
奏斗「ど、どうもこんにちは～・・・・・」
キャーー　オトコノコダー　カッコイイー
うわ、本当に女子だけだよ・・・ていうか香水の匂いがキツすぎる・・・・って
奏斗「あっ・・・・」
リゼ「あっ・・・・」
みんな！リゼいたよ！神様ありがとう!!
先生「みんな静かに。それでは天音君、自己紹介を」
奏斗「えー、俺の名前は天音　奏斗です！この学校で唯一の男だけど、気軽に声かけてください！ていうかその方が嬉しいです！みんなとも仲良くなりたいと思ってます！これからよろしくお願いします！」
パチパチパチ　カナトクーン　ヨロシクネー
先生「それで、席は・・・天々座さんの隣が空いてるな。では天音君そこへ」
おっしゃー俺めっちゃついてるじゃん！今、神が俺の味方をしている！

リゼの隣に来たところで
奏斗「よろしくなリゼ！」
リゼ「ああ、こちらこそ！」

ＨＲの時間が終わり、授業も終わって現在昼休み。俺は今、大量の質問と大量の香水の匂いに見舞われている。女の子はよく平然としてられるな・・・・やば、クラクラしてきた。
「ねぇねぇ奏斗君って付き合ってる人いる？」
奏斗「え？いや付き合ってないけど・・・」
するとそれを聞いたみんなは小さくガッツポーズをしていた。なんなんだ？
「校内案内してあげようか？」
と1人の女の子が言った。すると、他の女の子が
「それ、私がやる！」
などと言い始めた・・・・・そうだ！
奏斗「悪い！それリゼに頼んでるんだ！」
リゼ「えっ!?」
奏斗「・・・・！（話に合わせて!!!）」
アイコンタクト（適当）を送ってみたがわかるか？
リゼ「・・・・・！（わかった！）そういうことだ、みんなごめんな！」
さすが軍人の娘！アイコンタクト（適当）で俺の言いたいことがわかったらしい
「他に困ったことがあったらいってね!!」
奏斗「ああ、ごめんな！」

奏斗「ふぅ・・・死ぬかと思った・・・・
リゼ「大丈夫か？」
奏斗「リゼは平気なのか・・・・？」
リゼ「なんのことだ？」
奏斗「香水の匂いだよ!!」
リゼ「いや、なんともないが・・・」
やっぱ慣れてるのかなー？俺も慣れるしかないか・・・

シャロ「あ、奏斗先輩にリゼ先輩じゃないですか！こんなところでどうしたんですか？」
リゼ「おう、シャロ。教室から奏斗と一緒に逃げてきたんだ」
シャロ「あー・・・大体想像はつきます・・・大丈夫でしたか？」
奏斗「まぁ、なんとか・・・」
シャロ「あの、昼食。一緒に食べませんか？」
リゼ「私はお弁当を持ってきてるけど・・・・奏斗は無いのか」
奏斗「なぁシャロここって購買部ってのはあるか？」
シャロ「はい、ありますよ。よければ案内しましょうか？」
奏斗「ああ、頼む」

昼食を食べ終わり、午後の授業を終わらせた俺は・・・・・ん？カットしすぎ？逆に聞くが午後の授業見て楽しい奴がいるか!!!
ふぅ、それで俺はシャロと一緒に帰っていた、リゼはラビットハウ

スでバイトがあるから先に帰った。
シャロ「あの、先輩！」
奏斗「ん？なんだ、シャロ」
シャロ「これ、どうぞ」
渡してきたのはポスターのようなものだった。・・・・フルール・ド・ラパン？うさ耳？
シャロ「私そこでバイトしているので是非来てください！」
奏斗「シャロ、お前まさかこんないかがわ「しくありません！これは店長の趣味なだけで、至って普通のハーブティー専門の喫茶店です！」
奏斗「そうか、それじゃあ暇があったら行かせてもらうね」
シャロ「はい！ありがとうございます！」
奏斗「あ、そうだシャロ」
シャロ「はい？」
奏斗「連絡先、交換しよ？」
シャロ「あ、そういえばしてませんでしたね。いいですよ」
奏斗「よし、登録完了っと・・・・んじゃあシャロ、またな！」
シャロ「はい、また明日！」

チノ　side
私は今奏斗さんの家の前にいます。理由は今度の休日に看板メニューの開発でパン作りをすることになったので、奏斗さんも来てくれたら嬉しいな、と思ったからです・・・・・私は何を言ってるんですか／／／
ピンポーン

「はいはーい」
あ、来ました・・・・
ガチャ
チノ「こんばんはです、すいませんこんな時間に・・・・」
奏斗「こんばんはチノちゃん、全然大丈夫だよ!あ、どうぞ上がって?」
やっぱり、奏斗さんは優しいです。しかし、長い話では無いのでお断りしておきます・・・・本当は入ってみたいですけど。
チノ「あ、いえすぐに終わるので大丈夫です」
奏斗「あ、そうなんだ」
チノ「はい、えっと今度の休日にココアさんがうちの看板メニューの開発でパン作りをすることになったんですけど、よかったら奏斗さんも来ませんか?」
奏斗「パン作りか・・・面白そうだな!もちろん行かせてもらうよ!」
よかった・・・・来てくれるみたいです。
チノ「そうですか!・・・それで持ってくるものなんですけど、自分がパンに入れたい材料、とのことです」
奏斗「了解!それじゃあおやすみ!」
チノ「はい、おやすみなさい・・・」
ふふっ・・・・今度の休日が楽しみになってきました・・・!

第6羽　よく考えてみたらデートじゃね？

今日は一昨日青山さんと約束してた日だ。ついに青山ブルーマウンテンさんのサイン貰えるのか～！楽しみだな。
そうこう言ってるうちに集合場所についた。青山さんは・・・・・まだきてないみたいだ、俺が早すぎたかな？

青山「奏斗さ～ん」フリフリ
そうこうしてるうちに青山さんも来たようだ。
奏斗「こんにちは青山さん、わざわざすいません・・・」
青山「いえ～、私は別に構いませんよ？」
奏斗「それならよかったです」
青山「ここで話すのもなんですから、何処かお店の中にでも」
奏斗「それなら、行ってみたいお店があるんですがいいですか？」
青山「はい～大丈夫ですよ！」

俺が行きたかった場所っていうのは昨日シャロが紹介してくれた、フルール・ド・ラパンという喫茶店だ、場所は事前に調べておいた。シャロにも行くって言ってたしな！
それでその店の前まで来たんだが・・・・・確かに如何わしくはなさそうだな。そんなことを思いつつもお店の中に入る。
シャロ「いらっしゃいませ～！」ニコッ
あ、シャロだ・・・・何これめっちゃキラキラしてるんだけど！

シャロ「あっ・・・・！」
奏斗「・・・・・・よおシャロ！」
シャロ「か、奏斗先輩!!来てくれたんですか？」
奏斗「ああ、ハーブティーがどんなのか気になったからな！」
青山「奏斗さん、ここはメイド喫「違いますからね!?」」

シャロ「ご注文は何にされますか？」
奏斗「ん～そうだなー、俺ハーブティーの事とかよくわからないからな・・・・」
シャロ「なら、ローズマリーなんてどうでしょうか？ローズマリーには記憶力や集中力を高めたり、疲労回復などの効果がありますよ？」
奏斗「なら、それにするよ」
シャロ「かしこまりました！青山さんはどうされますか？」
青山「最近は小説を書いていて目の疲れがひどいので、アイブライトでお願いします」
シャロ「かしこまりました！」

奏斗「いつものシャロと大違いだ・・・・」
青山「喫茶店で働くメイド服のうさ耳少女・・・なんだかいい小説が書けそうです！」
奏斗「へー新作ですか！・・・あ、小説といえば。青山さん、本を持ってきたのでサインお願いできますか？」

青山「はい、喜んで」
そう言い、本を手渡す。その本に青山さんのサインが書かれる。
嬉しすぎる！　なんかファンファーレ流れそう。ド○クエの。
青山「はい、どうぞ」

サイン入りのうさぎのバリスタを持ち物に入れますか？

はい　↑
いいえ

かなとはねんがんのあおやまぶるーまうんてんさんのさいんをてにいれた！

どうみたってドラ○エですねわかります。

シャロ「お待たせしました、ローズマリーとアイブライトです。それと、これもどうぞ」
奏斗「え、これ手作り？」
そこに出されたのはシャロが作ったであろう手作りクッキーだった。

青山「素晴らしいですね～！」
シャロ「それは私からのサービスです」
シャロ、お前ってやつは・・・・・・！
奏斗「ありがとう、シャロ！それじゃあいただきます」
サクッ
青山「とても美味しいです、シャロさん！」
奏斗「うん、ハーブティーとも合うから幾らでも食べれそうだ」
シャロ「お口に合って何よりです！」
シャロはいいお嫁さんになりそうだな、くそっ結婚したやつがうらやましい！」
シャロ「え・・・・／／／／」
青山「あらあら・・・」クスクス
奏斗「どうかしました？」
青山「いえ、なんでもありませんよ～？」
シャロ「・・・・・／／／／」
シャロの顔が赤い・・・・熱でもあるんだろうか？
奏斗「おい、シャロ。顔赤いけど熱でもあるのか？」
シャロ「な、ななななんでもありませんからって、ええ!?／／／／」
シャロが心配なのでシャロのおでこに手を当て、熱を測る。
奏斗「んー熱はなさそうだな、けどあんまり無理はするなよ？」
シャロ「あう・・・／／／／（先輩の顔が近い！）」
青山「ふふっ・・・いい小説が書けそうですね！」

あのあとは料金を払い店を出た。シャロに明日パン作りの件につ

いて誘ったんだけどバイトがあるっていうことでいけないみたいだ。相変わらずシャロは顔が赤いままだったけど。
奏斗「青山さん、今日は本当にありがとうございました！」
青山「はい、今日は楽しかったです。新作のネタも見つけることが出来ましたし奏斗さんには感謝ですね？」
奏斗「お礼を言うなら俺もですよ。新作、楽しみにしてますね！」
青山「はい、楽しみに待っててください！それではまた・・・」フリフリ
奏斗「さようなら！」

そして奏斗が今日あったのが俗に言うデートだと気づいて悶え苦しんだのは別のお話。

シャロ　ｓｉｄｅ
私はベッドに寝っ転がりながら今日のことを思い返していた。
奏斗『シャロはいいお嫁さんになりそうだな・・・』
シャロ「うわぁぁぁぁぁ・・・・・／／／／」ジタバタ
なんだろうこの気持ち。胸がドキドキして・・・リゼ先輩と一緒にいるときもドキドキするけどそれとは何かが違う感じ・・・・。
ああ、もう全然わかんない！今はとりあえず寝よう・・・！

もちろん寝れなかったのは言うまでもない

第7羽　パンへの愛が尋常じゃない

今日は前々から約束していたパン作りだ、ラビットハウスの看板メニューを作るってことだから真剣にやらないとな。
そういえば具材を持ってこいって言ってたな、持ってくるやつは・・・・ココアパウダーとイチゴのジャムでいいかな。

現在朝の7時過ぎ、ちょっと早すぎかもしれない。迷惑じゃなきゃいいんだが
ガチャ
チャランチャラン
タカヒロ「いらっしゃい、奏斗君」
奏斗「どうもです、今日はチノ達は仕事休みですか?・・・オリジナルブレンドで」
ラビットハウスのオリジナルブレンド美味しいんだよね～
タカヒロ「かしこまりました。ああ、今日はチノ達の仕事は休みにして、私がやってるよ」
奏斗「そうだったんですか、昼も夜も大変じゃないですか?」
タカヒロ「いや、チノ達の為ならなんでもないさ。どうぞ、ご注文のオリジナルブレンドです」
そう言って俺が頼んだコーヒーが置かれる。
やっぱりタカヒロさんかっこいいなぁなんて思いながらコーヒーを一口啜る。
うん、やっぱりうまい。
そうこうしているうちにココア達はもう来ていたようだ。
ココア「あ、奏斗君おはよう!もう来てたんだ」
奏斗「おう、ココアおはよう」
ココア「それとタカヒロさんおはようございます!」
タカヒロ「おはようココア君」
チノ「奏斗さん、お父さん。おはようございます」

奏斗「チノもおはよう、あとはリゼと千夜だけか」
タカヒロ「では、私は邪魔してはあれだからこの辺で」
奏斗「はい、コーヒーありがとうございました。お金は置いておきます」
タカヒロ「ああ、ありがとう。それでは楽しんでねみんな」

リゼとチノちゃんは千夜とは初対面だからココアが千夜を紹介する。
ココア「みんな、紹介するね？友達の千夜ちゃんだよ」
千夜「よろしくね」
ココア「それでこっちがチノちゃんとリゼちゃん、奏斗君だよ！」
チノ「よろしくです」
リゼ「よろしくな！」
奏斗「よろしく！」
千夜「あら？そちらのワンちゃん・・・・」
千夜がチノの頭に乗ってるティッピーについて聞く。
チノ「ワンちゃんじゃないです。ティッピーです」
ココア「この子はただの毛玉じゃないよ？」
千夜「あら毛玉ちゃん？」
ココア「もふもふ具合が格別なの！」
ココアがティッピーを撫でる。
千夜「もふもふちゃんね？」
チノ「ティッピーです！」
奏リ「「(誰かアンゴラウサギっていう品種だって説明してやれよ・・・)」」

リゼ「ココアがパン作れるなんて、意外だったな」
ココア「えへへ～」
いや、ココア。それは褒めてないと思うぞ
ココア「それじゃあ、やるよ！みんな、パン作りを舐めちゃいけないよ？少しのミスが完成度を左右する戦いなんだからね？」
リゼ「ココアが珍しく燃えている！このオーラまるで歴戦の戦士のようだ・・・！」
あながち間違いじゃないがなんか違う気がする。
リゼ「今日はお前に教官を任せた！」ビシッ
ココア「サーイエッサー！」ビシッ
千夜「わ、私も仲間に～」
チノ「暑苦しいです・・・」
ココア「各自パンに入れたい材料、提出ー！」
リゼ「イエッサー！」
千夜「サー！」
千夜、無理に合わせなくてもいいんだぞ！
チノ「暑苦しいです・・・」
そしてチノちゃんも相変わらず！
ココア「私は新規開拓のために、焼きそばパンならぬ焼うどんパンを作るよ！」
ほうほう、なかなか美味そうだな。
千夜「私は自家製の小豆と梅と海苔をもってきたわ」
ん？
チノ「私は冷蔵庫にいくらと鮭と納豆と胡麻昆布がありました」
ちょっと待て！
奏斗「俺はココアパウダーといちごジャムだが・・・リゼは？」
リゼ「ああ・・私もいちごジャムとマーマレードを持ってきた・・・
なぁこれってパン作りだよな？」

奏斗「そうだと思うが・・・」

奏リ「(なんか不安になってきた・・・)」

ココアはまぁいいとして、千夜とチノちゃん!なに持ってきてんの!

ココア「最初は、強力粉にドライイーストを混ぜてー」

チノ「ドライイーストってパンをふっくらさせるやつですよね?」

奏斗「確か乾燥した酵母菌だっけか?」

ココア「2人ともよく知ってるね!」

チノ「こうぼきん・・・?」

こうぼきん→攻歩菌

チノ「そ、そんな危険なもの入れるくらいならパサパサパンで我慢します!」

酵母菌を何と間違えた、チノちゃん!

ココア「今からパンの生地をこねるから、よく見ててね?」

上手にこねていく、俺たちもやってみるがなかなかそれと同じことはできなかった。やっぱり経験かなぁとそんなことを思っていると

ココア「奏斗君、そうやるんじゃなくてこうやるんだよ?」

と言い、後ろに来て俺の手にココアの手を添える形でこね方を教えてもらった。これ結構恥ずかしい・・・。

ココア「そうそう!やっぱり奏斗君、料理上手だから飲み込みが早いよ!」

奏斗「そう言ってもらえると嬉しいな、ありがとうココア」

ココア「どういたしまして!」

チノ「パンをこねるのってすごい体力いるんですね・・・」

千夜「腕が・・・もう動かない」

奏斗「女の子がやるとやっぱしきついか・・・」

ココア「千夜ちゃん大丈夫？手伝おうか？」
千夜「大丈夫よ、ココアちゃん」
千夜「(みんなの足を引っ張るわけにはいかないものね・・・)」
奏斗「どれ、ちょっと変わってみ？」
千夜「え？」
奏斗「あんまり無理はしないでね？こういうのは男に頼ればいいから」
リゼ「お、言うな奏斗」
千夜「あ、ありがとう／／／」
チノ「そういうリゼさんは・・・・平気ですよね」
リゼ「なぜそう決め付けた！」
そりゃ物凄い怪力──
奏斗「ひっ・・・」
リゼ「奏斗？今何か言ったか？」
リゼは人の心までも読めてしまうのか！なんという化けm──
ドスッ
奏斗「ほげぶっ・・・」
リゼ「安心しろ手加減はした・・・」
これで手加減だと・・・!?リゼ、恐ろしい子・・・。だがこの俺でもリゼの攻撃に二発までは耐えれるようになった。殴られてるおかげかな？・・・・ナニソレコワイ
奏斗「あ、安心しろ！リゼも困ってたらちゃんと手伝うから！」
リゼ「そ、そうか？／／／ならいいんだが」
なんとか機嫌を直してもらえたか？いや、これは俺の本心だからな？
ココア「そろそろいいかなー？」
ある程度生地はこねたから大丈夫だろう
ココア「このときのパンがもちもちしててすごくかわいい！」
千夜「生地が？」
奏チリ「「すごい愛だ！」」
ココア「一時間生地を寝かせるよ！」

一時間生地を寝かせたあとは自分の好きな形を作る。ちなみに俺は生地を半分分けていて、片方はココアパウダーを練り込んだ生地になっている。形は無難に丸でいくかな

千夜「チノちゃんはどんな形にするの？」

チノ「おじいちゃんです、小さい頃から遊んでもらっていたので」

千夜「おじいちゃん子だったのね～」

チノ「コーヒーを淹れる姿は尊敬してました」

チノ「・・・ではこれからおじいちゃんを焼きます」

さらっと酷いことといったな。

ココア「ねぇねぇ千夜ちゃん」

千夜「なに？」

ココア「じゃじゃ～ん、千夜ちゃんにおもてなしのラテアート！」

千夜「わぁ～、かわいい～」

ココア「今日は会心の出来なんだ～！」

奏斗「へぇ～、ココアのラテアートを実際に見るのはこれが初めてだけど前よりも絵が上手くなってるな」

ココア「でしょでしょ？」

千夜「それじゃあ、味わって頂くわね？」

そう言って飲もうとすると

ココア「ああ～」

千夜「？」

ココア「・・・」ニコニコ

そしてまた飲もうとすると・・・

ココア「ああ～傑作が～」

これは飲みにくい！飲みにくすぎる！

ココア「チノちゃんさっきからオーブンに張り付きっぱなしだね～」
チノ「ジー・・・」
リゼ「そんなに楽しいか？」
奏斗「どれどれ？」
俺もせっかくだから見てみる。
チノ「あっ！おじいちゃんがココアさんと千夜さんに抜かれました。奏斗さんとリゼさんのが出遅れていますもっと頑張ってください」
奏リ「「俺（私）に言うなよ・・・」」
今日はよくリゼと被るな

待つこと数分、チンッとパンが焼けた音がした。
早速パンを食べる、上手くできてるといいんだが
「「「「いただきま～す」」」」
千夜「おいしい！」
チノ「ふっくらです・・・」
リゼ「流石焼きたてだな！」
ココア「これなら看板メニューに出来るね！」
千夜「この梅干しパン！」
ココア「この焼うどんパン！」
チノ「この焦げたおじいちゃん」
奏斗「このココアパン！」
リゼ「奏斗の以外どれも食欲をそそらないぞ・・・」
ココア「じゃーん！ティッピーパンだよ」
奏斗「おお！完成度高いな！」

チノ「もちもちしてます・・・！」
千夜「早速食べてみましょう？」
食べてみたはいいものの・・・・中がジャムということもあって
リゼ「なんか・・・エグいな」
目とか口から流れ出てるジャムが血液みたいでなかなかにグロい・・・。ジャム以外なら大丈夫そうだが。

千夜「今日はどうもありがとう！」
ココア「ううん！こちらこそ！」
千夜「お礼と言ってはなんだけど、今度うちのお店にぜひ来てくれないかしら？」
ココア「うん！絶対に行くね！」
千夜の店か、甘兎庵だったっけか？和菓子どんなのがあるんだろう？
千夜「それじゃあ、また明日ね～！」
ココア「バイバーイ！」

第8羽　俺の暗黒龍が（以下省略

奏斗「確かこの辺りだったと思うんだが・・・」
俺とラビットハウスのメンバーは甘兎庵という店を探している。なぜかというと、前日パン作りの後に千夜がこんなことを言ってきたからだ。
『パン作りでお世話になったお礼にうちの喫茶店に招待するわ』
それで俺たちは次の日に向かうことにした。
ココア「どんなところか楽しみだね～！」
チノ「何て名前の喫茶店ですか？」
奏斗「えっと、確か甘兎庵だったはずだ」
ティッピー「甘兎とな!?」
奏斗「ティッ・・・んん、チノちゃん知ってるの？」
チノ「おじいちゃんの時代に張り合っていたと聞きます」
リゼ「奏斗、今何を言いかけたんだ？」
奏斗「いや、何でもないよ！」
リゼ「そうか、ならいいんだが」
あっぶねぇ・・・ティッピーに話しかけそうになった
ココア「あ、これじゃない？」
リゼ「看板だけやたら渋い・・・面白い店だな」
ココア「オレ、うさぎ、あまい？」
リゼ「甘兎庵（あまうさあん）な？」
奏斗「ついでに言うとおれじゃなくていおりって読むぞ～」
俺とリゼがココアの間違った読み方を訂正する。看板の名前を逆さに読むってことはこの店は昔に建てられたのだろうか、最近はこういうのは無いから、なかなか風情があっていいと思う。
カランカラン
「「「こんにちは～」」」
千夜「あら、みんないらっしゃい！」
ココア「あ～！その服お店の制服だったんだ！初めてあった時もその服だったよね？」

千夜がきている服は縞模様の緑色の着物の上にエプロンをつけているといった感じだ。
千夜「あれはお仕事でお得意様に羊羹を配った帰りだったの」
ココア「あの羊羹美味しくて3本も行けちゃったよ～！」
ココアの学校を探してる時だったっけ。あの羊羹1本でも結構な量だったはず・・・。女の子って甘いの良く食べるよね、でっかいパフェとかペロリと食べちゃうし。
リゼ「3本丸ごと食ったのか!?」
奏斗「俺は2本が限界だったぞ・・・」
チノ「あっ！」
ココア「どうしたのチノちゃん？あっ、うさぎだ～！」
チノちゃんとココアが見た先にいたのは棒状の円形テーブルに乗っている一匹の黒いうさぎだった。頭に冠のようなものを乗せている。
千夜「看板うさぎのあんこよ」
リゼ「置物かとおもったぞ」
リゼと同じく俺も置物だと思っていた。あんこは置物と思わせるほどテーブルの上じっとしたまま動いてないからだ。
千夜「あんこはよっぽどの事がない限り動かないのよね～」
チノちゃんがあんこのところに歩いていった。するとあんこがチノちゃん目掛けて、いや正しくはティッピー目掛けて体当たりしてきた、チノちゃんはそれで尻餅をつく。
リゼ「チノ！」
ココア「チノちゃん大丈夫？」
奏斗「チノちゃん立てる？」
チノ「びっくりしました・・・」
ティッピー「ぎゃあああああああ」
そして2人で手を差し出し、チノちゃんを引き上げる。ティッピーがあんこに追いかけられてめっちゃ悲鳴あげてるんだけど、大丈夫か？
リゼ「縄張り意識が働いたのか？」

千夜「いえ・・・・あれは、一目惚れしちゃったのね・・・・！」
「「「一目惚れ？」」」
千夜「恥ずかしがり屋くんだと思ってたのに・・・・あれは本気ね」
手でハートの形を作り微笑みながら千夜は言う。
ココア「あれ？ティッピーってオスだと思ってた」
チノ「ティッピーはメスですよ？」
ティッピーはメスで、中身がオスってわけか。なんか変な感じだ。
あ、２匹とも外出て行っちゃった、まぁティッピーなら大丈夫だろう。

千夜「私も抹茶でラテアートを作ってみたんだけど、どうかしら？」
ココア「わぁ～！どんなの？」
千夜「ココアちゃんみたいに可愛いのは書けないんだけど、北斎様に憧れていて・・・」
ココア「浮世絵？」
そこには抹茶の上に浮世絵の絵が描かれていて俺の方には「じゃぱにいず」と書いていた。「じゃぱにいず」いらないだろ！絶対に！
千夜「芭蕉様にも憧れていて・・・」

「ココアちゃん　どうして今日は　おさげやきん？　千夜」

ココア「風流だ・・・！」
・・・・季語どこいった!!
千夜「あと、はい。お品書きよ」
俺もお品書きを貰い、メニューを見ると
奏斗「煌めく三宝珠・・・雪原の赤宝石・・海に映る月と星々・・・」
奏リ「何だ・・・この漫画の必殺技みたいなメニューは・・・・！」

あの時の羊羹の名前も千夜月って中二チックな名前だったのはこういうことだったのか・・・。
邪王炎殺黒龍波！・・・・おい！作者仕事しろよ！
そんなことは置いといて。リゼもチノも案の定困惑している。これ、どれがどんな品なのかわかるわけ・・・
ココア「わぁ！抹茶パフェもいいし、クリームあんみつも白玉ぜんざいも捨てがたいなぁ」
奏リ「「わかるのか!?」
ココアの理解力には度肝を抜かれるよ・・・。
ココア「じゃあ私、黄金の鯱スペシャルで！」
リゼ「よくわからないけど、海に映る月と星々で」
チノ「花の都三つ子の宝石」
奏斗「じゃあ俺は雪原の赤宝石で」
千夜「は～い、ちょっと待っててね？」
そう言って、千夜はキッチンの方に向かっていった。
ココア「和服っておしとやかな感じがしていいね～」
ココアがそう言った。リゼはというと何だかニヤついている
チノ「着てみたいんですか？」
リゼ「い、いや！そういう訳じゃ・・・」
奏斗「リゼなら似合うと思うけど・・・」
ココア「私もそう思うよ！」
リゼ「っ！そ、そうか・・・？／／／」
リゼなら似合うと思うけど、きっとリゼが和服を着るとなると・・・
ココア「すっごくカッコイイ！」
リゼ「うん！うん！」
おそらくココアは、博打っていうんだっけか？多分そんなのを想像していて。リゼはというと、さっきの千夜みたいなおしとやかで可愛い和服を想像しているんだと思う。
千夜「お待ちどうさま～」
そうこうしているうちに出来たようだ
千夜「リゼちゃんは海に映る月と星々ね？」

リゼ「白玉栗ぜんざいだったのか！」
名前と違って案外普通だな・・・
千夜「チノちゃんは花の都三つ子の宝石ね？」
チノ「あんみつにお団子が刺さっています！」
千夜「ココアちゃんは黄金の鯱スペシャルね？」
ココア「おぉ～！」
奏斗「鯱がたい焼きって無理がないか？」
千夜「最後に奏斗君が雪原の赤宝石ね？」
奏斗「苺大福だったんだな」
千夜「さぁ、召し上がれ」
ココア「いっただっきまーす！」
奏チリ「「いただきます！」」
ココア「ん～！おいしい♪」
リゼ「おいしいな！」
チノ「このお団子、桜の風味がします！」
奏斗「この苺大福もいけるぞ！」
千夜「あんこは栗羊羹ね」
あんこに栗羊羹を差し出すがあんこは食べる素振りも見せず、ココアが頼んだ和菓子に目が釘付けになっている。もしかすると食べたいのか？
ココア「どうしたの？」
チノ「こっちのを食べたいのでしょうか？」
奏斗「そうだと思う」
ココア「しょうがないな～、ちょっとだけだよ？その代わり、後でもふもふさせてね？」
やめろココア、それはフラグだ！
ココアがスプーンをあんこの方に向けると、あんこはスプーンの方ではなく本体の方に突っ込んでいった。
ココア「本体まっしぐら！」
千夜「あらあら・・・」
千夜があんこを元の位置に戻した頃にはココアの和菓子はほとん

ど無くなっていた。
奏斗「ココア、俺の食べるか？」
ココア「え？」
奏斗「いや、ココアの無くなっちゃったからよければと思って・・・」
ココア「ありがとう！じゃあお言葉に甘えようかな・・・」
奏斗「ほら、あ～ん」
ココア「え!?あ、あ～ん／／／／」パクッ
そして俺はココアにあ～んをする。
奏斗「どうだ？」
ココア「お、おいしい！／／／／（嘘嘘嘘！味なんて全然わからないよぉ！／／／／）」

あ…ありのまま今起こった事を話すぜ！おれはココアにおれの和菓子を渡そうと思ったら　いつのまにかあ～んをしていた
な…なにを言っているのかわからねーと思うが　おれも何故あ～んをしたのかわからなかった…
わざとだとか無意識にだとかそんなチャチなもんじゃあ断じてねえ　もっと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ

今の誰も見てないよね？ねえそうだと言ってよバー○ィ
千リチ「「・・・・・！」」
みんなバッチリ見てるぅぅぅぅぅぅ!!!そりゃそうだ!!なんか千夜に関しては小悪魔的なのが見えるんですけど!?
・・・・・・今の俺の中には羞恥はこれっぽっちも感じない　お

れにあるのは恐怖だけだ
リゼ「か、奏斗！」
奏斗「ひゃい!?」
ああ、審判の時がやってきた・・・お父さん、お母さん・・・俺は先に行ってくるよ。
リゼ「私にも食べさせてくれ！／／／」

奏斗「へ？」
チノ「わ、私も欲しいです！／／／」
あ、ありのまま今起こった（以下省略　まぁ抹殺されないだけマシだと思っておこう・・・。
奏斗「あ、ああ・・・」
そして俺はリゼ、チノちゃんの順に食べさせた。
ココア「じゃあ次は私たちの番だね？」
するとココアが訳のわからないことを言い出した
コクッ
え？俺何されるの？
ココア「食べかけだけど・・・はい、あ～ん」
奏斗「え？あ、あ～ん・・・」パクッ
ココア「ど、どうかな？／／／」
奏斗「おいしいよ？甘くて」
ココア「あ、甘っ・・・そ、そっか、良かった／／／」
嘘、味なんて全くわからない。
チノ「奏斗さん、次は私です！あ、あ～ん／／／」
奏斗「あ～ん」
チノ「どうですか・・・？」
奏斗「うん、おいしいよ！」
チノ「そ、そうですか・・・／／／」

てか男なら誰もが夢見る状況に慣れてしまっている俺がいる。ああ・・・そこの男性客に睨まれてる。あとで路地裏とかでフルボッコにされたらどうしよ・・・

リゼ「次は私だな！よし・・・あ、あ～ん！／／／」

奏斗「あ～ん」

奏斗「ふぅ・・・もうお腹いっぱいだよ」

「「ごちそうさま（です）」」

奏斗「ああ、ごちそうさま・・・」

和菓子に対してだからな？

リゼ「白玉栗ぜんざい美味かったなぁ」

チノ「うちもこのぐらいやらないとだめですね」

千夜「あっ、それならラビットハウスさんとコラボなんてどうかしら？盛り上がると思うの！コーヒーあんみつとか・・・」

コラボか、なかなかいいんじゃないか？

ココア「いいね～！タオルやトールバッグなんてどうかな？」

チノ「私、マグカップが欲しいです！」

（（ん？料理の方じゃなくて・・・？））

ココア「チノちゃん、あんこには触らないの？」

リゼ「チノは、ティッピー以外はの動物は懐かないらしい」

するとチノちゃんはあんこの方へと恐る恐る近づいていった。そ

してゆっくりとあんこに手を伸ばし人指し指であんこに耳をちょんと触ったが、すぐさま手を引っ込めた。
「・・・!!」
奏斗「頑張れ～！チノちゃん」
もう一度手を伸ばし、あんこの背中を撫で、次にあんこを持ち上げぎゅっとしたあと、手が震えながらも頭の上にそっと乗せた。
ココア「すごい！もうこんなに仲良く！」
リゼ「頭に乗せないと気が済まないのか？」
チノちゃんは平然とやってるけど、ああ見えて結構難しいんだよな。
リゼ「じゃあ、そろそろお暇するか」
奏斗「そうだな、そろそろ時間もあれだし」
もう今は夕方、そろそろ帰らないとだな。
千夜「みなさん、また来てくださいね？」
ココア「うん！私の下宿先が千夜ちゃんの家だったら、ここでお手伝いさせてもらえたんだろうな～」
千夜「今からでも来てくれていいのよ？従業員は常時募集中だもの」
リゼ「それいいな！」
チノ「同じ喫茶店ですし、すぐ慣れますね」
奏斗「ココアなら大丈夫だろ」
千夜「じゃあ部屋を空けておくから、早速荷物をまとめてきてね～♪」
ココア「誰か止めてよ～！」

ココア「千夜ちゃん、またね～！」

チノ「ごちそうさまでした」
リゼ「またな！」
奏斗「また来るよ！」
俺たちは千夜に手を振り、店をあとにする。
ココア「昔はあのお店とライバルだったんだよね？」
チノ「今はそんなこと関係ないですけどね」
ココア「私達もお客さんを満足させられるように頑張らなきゃね～！」
リゼ「だな～」
奏斗「俺も応援するよ！」
というかなんか忘れてるような・・・

千夜「あら？」
ティッピー「・・・・・・・」ガクブル
千夜の部屋の隅っこでガクガク震えていましたとさ

第9羽　ベストカップ（深い意味はない）

チノ「おいしいです」
ココア「こうやってみんなで飲むとさらに美味しくなるよね！」
奏斗「そうだな」
現在ラビットハウスはまだ開店していない、そこに何故俺がいるかというとココア達に是非来て欲しいとのこと。
俺は別に構わないのだが邪魔にならないかと聞いたところ、タカヒロさんのお墨付きで構わないということになったので、最近は毎朝こうやってコーヒーを飲んでいる。
ここだけの話だが、俺が毎朝来ることになってココア達は異常なまでに喜んでいたという（タカヒロさん＆ティッピー情報）
そんなに嬉しかったのだろうか？
奏斗「たまには違うコーヒーを飲んでみるのもいいな」
まぁこの店オススメのオリジナルブレンドが一番だけど
ココア「私、チノちゃんの入れてくれたコーヒー飲んでからはまっちゃったよ、なんでかな～？」
まぁチノちゃんはバリスタとしての腕前はなかなかだからな、さすがはおじいちゃんの孫といったところだろうか
チノ「・・・でもココアさんはコーヒーの味の違いわからないじゃないですか。ただのカフェイン中毒ですよ」
奏斗「中毒扱いしちゃったよ」
ココア「ひどいなぁ～チノちゃんは」
苦笑いしながらココアは言う。そこに食器の洗いを終えたリゼがやってきた
リゼ「さぁそろそろ開店だぞ～」
奏斗「もうそんな時間だったか」
ココア「奏斗君、チノちゃん。私がカップ洗いに行くね」
ココアがキッチンにカップを持っていく時に、そのカップをじっと見つめていた
奏斗「ココア？」

ココア「ラビットハウスのカップってシンプルだよね」
まぁ確かに白一色のシンプルなカップだがそれは・・・
チノ「シンプルイズベストです」
机を拭いていたチノちゃんが言う。
ココア「もっといろんなのがあったらきっとみんな楽しいよ」
チノ「そうでしょうか？」
ある喫茶店では、コーヒー以外にもカップなどにもこだわってるっていう店もあるからな。
ココア「この前面白いカップ見つけたんだ！みんなで買いに行かない？」
リゼ「へぇどんな？」
ココア「えっとね、ロウソクの炎が揺れていい匂いがしてね～」
奏斗「それアロマキャンドルだろ！」
ココア「はっ！」
ロウソクある時点で気づけよ！

翌日、学校帰りにカップを買おうということになった。どこで買うかは決めてないので一旦みんなで集合してから探すことになった。
奏斗「なぁ、あの店なんかどうだ？」
リゼ「おっ、いいんじゃないか？」
中々良さそうなお店があったのでとりあえず入ってみることとなった。中に入るとカップ以外にもグラスなどがたくさん置いてあった。
ココア「わぁ！可愛いカップがいっぱい！」
リゼ「あんまはしゃぐな～」
なーんか嫌な予感するな、あのココアのことだきっと何かあるに違いない。
奏リチ「「あっ！」」

リゼが棚を支え、チノが落ちてきたものをとり、俺がココアを支える。そして何より・・・

奏リチ「「予想を裏切らない・・・！」」

ココア「えへへ～ごめんね？あっかわいい！」

赤くなったおでこを摩りながら謝ると落ちてきた写真立てをみる。そこにはカップにうさぎが入ってるというなんとも癒される写真があった

ココア「ティッピーも入ってみたら、注目度アップだよ？」

奏斗「でもそんな大きなカップはないだろ？」

リゼ「私もあるとは思えないな・・・」

チノ「ありました」

奏リ「「あるのかよ！」」

チノの方を見ると手をプルプル震わせながら大きなカップを持っていた。てかそんな重いと使えないだろ！

それで早速ティッピーをカップに入れてみたわけだが・・・

「「「・・・・」」」ジー

奏斗「なんか違う」

チノ「ご飯にしか見えないです」

ティッピー「ムッ・・・！」

ココア「あっ！これなんていいかも・・・・あ」

『あ・・・・・』

見回っているとココアが誰かの手と触れ合う。

チノ「こんなシチュエーション漫画で見たことがあります」

リゼ「よく恋愛に発展するよな」

よくあるテンプレってやつですねわかります。

奏斗「でも女の子同士だからそんなことは・・・って！」

ココア「・・・・」モジモジ
『なんか意識されてる！』
奏斗「まさかの意識してた！」
ん？あのウェーブのかかった金髪にカチューシャ・・・よく見たら
シャロだった。
奏斗「おーいシャロー」
シャロ「えっ？か、奏斗先輩!?」
リゼ「シャロじゃないか」
シャロ「リゼ先輩も・・・・ど、どうしてここに!?」
チノ「知り合いですか？」
奏斗「ああ、俺とリゼが通ってる学校の後輩だよ。ココアと同い年」
ココア「え？リゼちゃん年上だったの？」
奏リ「「今更か！」」
全くココアは、ツッコミしてもキリがないよ。
シャロ「先輩方はどうしてここに？」
リゼ「バイト先で使うカップを買いにきたんだよ」
奏斗「シャロは何か買ったの？」
シャロ「いえ、私は見てるだけで十分なので」
奏斗「見てるだけ？」
シャロ「この白くすべらかなフォルム・・・はぁ～♡」
カップを指でなぞりながら言う。シャロは陶器フェチだったのか。
それを見たココアは
ココア「それは変わった趣味ですな～」
奏リ「「え？お前が言う？」」
毎日もふもふしまくってる人に言われると説得力がないよ！
チノ「奏斗さんとリゼさんはシャロさんと学年が違うのに、どう
やって知り合ったんです？」
シャロ「それは・・・暴漢に襲われそうになった時に先輩方が・・・」
ちょっとー？シャロさーん？言ってることが全然違うんですけ
どー？
ココア「へー！かっこいいな～」

奏リ「「ん？」」

～～～～～～
シャロ「はぅ・・・」
暴漢(仮)「ハハッハハッハハッハハッハハッハハッハハッノ　ヽノ　ヽッノ　ヽ／　＼ッ／　＼／　＼ッ」
奏リ「「失せろ！」」
暴漢（仮）「・・・!?」
奏リ「「この俺（私）が断罪してくれる！」」

そんなことといってない!!!なんか俺の性格めっちゃ変わってるんですけど!!てかなんかちゃっかり銃持ってるんですけど!!銃刀法違反だよ！これ！
奏斗「違う違う、本当はだな━」
シャロ「奏斗先輩！言っちゃダメです！」

～～～～～～
シャロ「何かしら・・・？」
ピョンピョン
シャロ「きゃあああああ!!うさぎいいいいいい!!ごめんなさい！なんでもしますからぁ!!!」
奏リ「なんだこれ・・・」
シャロ「・・・・・はっ！お願いします！助けてください！」
奏斗「わ、わかった・・・ほら困ってるだろ？」
ピョンピョン
奏斗「ほらいったぞ？」

リゼ「大丈夫か？」

奏斗「ってことなんだ」
コチ「「・・・・」」ジー
シャロ「う、うさぎが怖くてわっ悪い!?」
奏斗「別に悪いってわけじゃないぞ？」
シャロ「え？」
嫌いなものは仕方ないしな
奏斗「人は嫌いなものは1つ2つあるんだ、前にも言ったけど俺にも嫌いなものはある。だから悪いことじゃないさ」ニコッ
シャロ「奏斗先輩・・・／／／／」
奏斗「でも克服はしないとだな？」
シャロ「うっ・・・はい・・・・」
リゼ「なぁ奏斗、お前の嫌いなものってなんなんだ・・・？」
ココア「あっそれ気になる！」
シャロ「私も気になります」
奏斗「ん？俺の嫌いなものは『大切な人を傷つける人』だな」
チノ「ふふっ・・・奏斗さんらしいです」
ココア「だね！」
奏斗「言っとくけどチノちゃん達も大切な人の中に入るからね？」
「「「「なっ・・・・／／／／」」」」
リゼ「なぁ、あれってわざとで言ってるのか？／／／／」コソコソ
ココア「奏斗君はそんなことしないよ！／／／／」コソコソ
チノ「じゃあなんなんでしょうか？／／／／」コソコソ
シャロ「おそらく無自覚でしょうね・・・・これはかなりの強敵ね」
コソコソ
「「「「はぁ～・・・・」」」」

え？なんで溜息つくの？なんか俺悪いことした？

その後も溜息の理由がわからないまま、カップを選んでいるとシャロがチノちゃんとココアにカップのいいところを説明していた。
シャロ「このティーカップなんてどう？香りがよく広がるの」
チノ「カップにも色々あるんですね」
シャロ「こっちは取っ手の触り心地が工夫されているのよ」
ココア「わぁ！気持ちいい！なるほどね～」
それを見ていた俺とリゼは、3人が楽しくしている光景を見ながら話していた。
リゼ「シャロってこういうの詳しいんだな」
奏斗「ちょっと意外だったな」
シャロ「上品な紅茶を飲むにはティーカップにもこだわるのよ！」
奏斗「楽しそうだな」
リゼ「そうだなぁ」
チノ「うちもコーヒーカップには丈夫で良いものを使ってます」
ココア「私のお茶碗は実家から持ってきたこだわりの一品だよ」
お前らは何張り合ってるんだよ
リゼ「でも、うちコーヒーの店だからカップもコーヒー用じゃないとなー」
シャロ「えっそうなんですか!?・・・・リゼ先輩のバイト先行ってみたかったのに・・・」
めっちゃ残念そうにしてる。どんだけ行きたかったんだ
ココア「あれ？もしかしてコーヒー苦手？」
シャロ「・・・」コクッ
ココア「砂糖とミルクいっぱい入れればおいしいよ？」
シャロ「にっ苦いのが嫌いなわけじゃないのよ！」

チノ「では何が？」
シャロ「カフェインを摂りすぎると異常なテンションになるみたいなの」
「「「コーヒー酔い!?」」」
カフェインで酔う人なんて初めて聞いたぞ。
リゼ「飲めなくても良いから遊びに来なよ」
シャロ「はっはい！」

ココア「あのカップおしゃれだよ！」
奏斗「どれどれ？って高っ！」
なんだこれ５０，０００円もするぞ？
シャロ「アンティーク物ならそれくらいはしますよ？」
奏斗「そうなのか、ってリゼどうした？」
リゼ「これ、昔的にして撃ち抜いたやつじゃん」
「「「!?」」」
リゼ、お前はどんな生活してるんだ。もしかすると豪邸に住んでてそこのお嬢様とかじゃないだろうな!?

ココア「チノちゃん、お揃いのマグカップ買おうよ！」
チノ「私物を買いに来たんじゃないですよ？」
みんなそろそろどれを買うか決まってきたな、俺も早く決めないとだな。
するとシャロが横から出てきた。
シャロ「カップどれにするかまだ迷ってるんですか？」

奏斗「ああ、こういうのには疎いから・・・」
シャロ「ならこのカップなんて色違いで可愛くないですか？２つセットですし片方いりませんか？」
奏斗「お、これいいな。じゃあこれにするよ、ありがとうシャロ。シャロ？」
シャロ「（これよく見たら恋人用だった！／／／）」
奏斗「おーい？」
シャロ「ひゃい!?」
顔を覗き込むようにシャロを呼ぶ。
奏斗「お会計行こっかなって、俺がお金出すよ」
シャロ「そ、そんなの奏斗先輩に悪いです！」
奏斗「気にしないで、俺が好きでやってることだから」
シャロ「そうですか・・・それではお言葉に甘えて」
奏斗「了ー解！」

会計が済んだのでカップが入ってる袋をシャロに渡す。
奏斗「ほいシャロ」
シャロ「ありがとうございます！」
喜んでもらえて何より。すると会計を終えたココアが
ココア「シャロちゃんて高いカップ詳しくてお嬢様って感じだね」
シャロ「お嬢様!?」
リゼ「シャロにとってそのカップは小物同然なんだろうな」
アンティーク物撃ち抜いた人に言われたくない！
シャロ「末代まで家宝にしますけど!?」
髪を上げ、まるでお嬢様のような雰囲気を出すシャロ。
リゼ「カップを持つ仕草に気品あるよな」
シャロ「（普通に持ってるだけなのに！）」
チノ「髪もカールしてて風格があります！」
シャロ「（クセ毛なんだけど・・・）」

俺もちょっと聞いてみるか
奏斗「お嬢様とかだったらキャビアとか食べるのか？」
シャロ「そういうのはリゼ先輩に聞いた方が・・・」
リゼ「んー私がよく食べるのは・・・ジャンクフード？あとレーションのサンプルとか」
リゼは本当に軍人だなって思う。レーションなんて食べたこともない
リゼ「それでも即席で食べられるものっていいよな」
シャロ「ですよね！卵かけごはんとか美味しいですよね」
そんな中後ろでいらんことを教えてるやつがいる
ココア「きっと卵ってキャビアのことだよ」
チノ「・・・」コクコク
ココアなにを教えてるんだよ

その後は結局ラビットハウスのカップはそのままでいいということになりその日はお開きとなった。

第１０羽　嵐のように騒がしく

カップ選びから帰った後の夜、俺は早速シャロに勧めてもらったカップを使ってコーヒーを飲んでいた。

奏斗「いつかお返ししなきゃな～」

などと独り言のように呟いていると、俺の携帯に電話がきた。知らない人だ、誰からだろう？

奏斗「はい、もしもし？」

???「やっほー！かーくん、元気してた？」

この聞き覚えのある声は、まさか・・・

奏斗「奏楽姉ちゃん!?」

天音（あまね）　奏楽（そら）、俺の姉で現在大学生だ。勉強もなんでもできるから俺の憧れでもある。

しかし、少しばかり厄介な部分というかそういうのがある。

奏斗「どうしたの奏楽姉ちゃん？」

奏楽「ああ、そうだった。私、明日からそっち行くから」

奏斗「へ？」

奏楽「家はあんたのところで住まわせてもらうから」

奏斗「へ？」

俺は今、言わずともわかるだろうが頭の中が混乱している。いきなりそっち行くだの、お前の家住むだの言われても困る。こういうところが苦手なんだよなぁ・・・

奏斗「それって親とかには・・・」

奏楽「言いました！」

奏斗「ですよね～」

こういう時に限ってなぜ奏楽姉ちゃんはちゃんとするんだよ！

奏楽「ま、そういうわけだから。明日の朝５時くらいに、駅の前までね！」

奏斗「はぁ・・・わかったよ」

明日から厄介そうなのがくるぞ・・・はぁ・・・

というわけで、早起きして自転車で行った。駅に着いたのだがまだいない。早く来てくれ～せっかくの休日がぁぁああ！
その時後ろから声がかかった
奏楽「かーくん！」
朗らかな笑顔をしながら手を振ってくる奏楽姉ちゃん。厄介とはいっても普通に美人なんだよな。
奏斗「おはよう、奏楽姉ちゃん」
奏楽「お迎えご苦労！じゃあいこっか」
すると奏楽姉ちゃんは俺の自転車の後ろに座った。何してるんですか
奏斗「あの、これはどういう・・・」
奏楽「これで行くに決まってるじゃん！」ポンポン
自転車の座るところをポンポンと叩きながらなんとも素晴らしい笑顔で言った
奏斗「いや、でも・・・」
奏楽「かーくんは、長旅で疲れた女の子を歩かせる気・・・？」シュン
次はしゅんとした表情で泣きそうな目で言ってきた
奏斗「うっ・・・わかったよ」
奏楽「やったー！じゃあ出発しんこ～！」
やはり姉に勝てないのは間違っている。

奏斗「ここだよ」
奏楽「へぇ～ここがかーくんの家かぁ。お邪魔しまーす、わぁ広い！」
自転車から降りて、家の中に入ると奏楽姉ちゃんはとても驚いた様子だった。
奏楽「1人だと結構広いでしょ？」
奏斗「ん、まぁね」
この家、二階もあるから使ってない部屋がたくさんあるんだが・・・
奏楽「ふっふー、安心しなさい！今日からお姉ちゃんが一緒に住むから！」
いやいやいやいや、安心できねぇわ！むしろ不安でいっぱいだわ！
奏斗「それはさておき、朝ご飯食べる？」
奏楽「話遮られたー！・・・・ご飯は食べる」
奏斗「りょーかい」

奏楽姉ちゃんの使う部屋や、家の部屋を紹介し終わったのでラビットハウスにでも行こうかなと思っていると
奏楽「かーくん、今日は暇だよね？」
不意に奏楽姉ちゃんが尋ねてきた
奏斗「え？暇じゃないけど」
奏楽「嘘つけー！」
俺には今ラビットハウスに行くという予定があるのだ！
奏楽「暇だよね？」
奏斗「いｙ「暇だよね？」はい、暇でございます」
奏楽「よろしい！それじゃいこっか！」
やっぱりどの家庭でも兄姉には逆らえないのかな

奏斗「じゃあ、まずはここかな」
奏楽「ラビットハウス？」
ここの人達にはいつもお世話になってるから、紹介しておこうと思い最初に来た
奏斗「こんにちは～」
チノ「あっ奏斗さんこんにちは・・・？」
俺と挨拶を交わすチノであったがだんだんと不思議そうな顔をしていった
ココア「奏斗くん、いらっしゃい・・？」
リゼ「おう奏斗、いらっしゃい・・・？」
お前らもかよ、なにかおかしいか？
奏斗「みんなどうしたんだ？」
そう聞いてみるが、ココア達は奥でコソコソと何かを話し合っているみたいだった
奏楽「あの子達可愛いわね、かーくんの知り合い？」
奏斗「ああ、こっちに引っ越すときに知り合ったんだよ」
ココア「あ、あの！」
奏斗・楽「「・・・？」」
ココアは真剣な顔で俺に尋ねてきた、後ろのチノちゃん達も何やら鬼気迫った顔をしている。
ココア「その隣にいる人って・・・」
奏斗「え？ああ、この人は・・・」
するとココア達はぎゅっと目を瞑った
奏斗「お、おーい？」
奏楽（なるほどねぇ・・・）ニヤニヤ
奏斗「ニヤニヤしてないでどうにかしてくれこの状況！」

奏楽「わかったわ、お姉ちゃんに任せなさい！」
大丈夫だ、奏楽姉ちゃんはこういうときにはちゃんとやってくれる！

奏楽「私はかーくんの彼女でーす！」

と思っていた時期が俺にもありました
奏チリコ「「「え!?」」」
ちょっとー!?何言ってくれてんのー!?みんな勘違いしちゃう!!
奏斗「みんな違うんだ！この人は・・・」
リゼ「いや、何も言わなくていいさ・・・」
なんか急にシビアな展開になってきた!!
チノ「あわわわ・・・」
チノちゃんはなんか壊れてる！
ココア「・・・・」
ココアは身動き一つ取らない。どうなってるんだこりゃ
奏斗「あのなみんな、なんか勘違いしてるかもしれないけどこの人は俺の姉だ」
リコチ「「「えっ」」」
奏斗「ほら、奏楽姉ちゃん。謝る！」
奏楽「うっ・・・ご、ごめんなさい。さっきのは嘘です・・・」
リコチ「「「・・・・」」」ホッ
嘘だとわかったココア達は何やら安心した様子だった
奏斗「ったく奏楽姉ちゃん、冗談はほどほどにしてくれよ？」
奏楽「ごめんなしゃい・・・」
これじゃあどっちが年上なのかわからなくなるな・・・

奏斗「じゃあ改めて紹介するよ、この人は俺の姉の天音　奏楽っていうんだ」
奏楽「みんなさっきはごめんね？お礼と言っちゃあなんだけどちょっと耳かして？」
奏楽姉ちゃんは俺に聞こえないように3人に話した。気になるなー。あ、みんななんか顔赤くなってる。
ココア「うん！頑張るね奏楽さん！」
チノ「ココアさん、声が大きいですよ！」
リゼ「・・・／／／」
奏斗「なぁ何話してたんだ？」
奏楽「それは、乙女のヒ・ミ・ツ♪」

ラビットハウスですっかり話し込んでしまった俺たち、外に出るともう夕方になっていた。結局奏楽姉ちゃんに街案内できなかったな・・・
奏斗「なぁ奏楽姉ちゃん、案内のことだけど・・・」
奏楽「いいのよ別に、それよりも面白い子達と会ったし！」
面白い子達っていうのはココア達のことだろうな
奏斗「また今度案内するよ」
奏楽「うん！その時はあの子達とも一緒にね！」
奏斗「わかったよ」

奏楽　ｓｉｄｅ
奏楽「私はかーくんの彼女でーす！」
奏チコリ「「「え?!」」」
かーくんは兎も角、やっぱり驚いたわね。やっぱりこの子達、かーくんのこと好きなのねぇ。
奏斗「みんな違うんだ！この人は・・・」
なんとか教えようとするかーくんであったが・・・
リゼ「いや、何も言わなくていいさ・・・」
チノ「あわわわ・・・」
ココア「・・・・」
全員放心状態
そんな反応を楽しんでいた私であったが
奏斗「あのなみんな、なんか勘違いしてるかもしれないけどこの人は俺の姉だ」
かーくんネタばらし早すぎる!!ていうかあの反応見てもおかしいと思わないの!!本当にかーくん鈍感だなぁ
奏斗「ほら、奏楽姉ちゃん。謝る！」
奏楽「うっ・・・ご、ごめんなさい。さっきのは嘘です」
そして私は謝ることとなったのだった

その後、かーくんがこの子達。ココアちゃん、チノちゃん、リゼちゃんのことを紹介してくれて次に私の紹介をしてくれた。
奏楽「みんなさっきはごめんね？お礼と言っちゃあなんだけどちょっと耳貸して？」
ここはかーくんのお姉ちゃんとしてアドバイスをしなきゃだね！
奏楽「みんなかーくんのこと好きでしょ？それでさっきびっくりしちゃったんだよね？」
コリチ「「・・・／／／」」コクッ
奏楽「そんな可愛いあなた達にアドバイス！」
チノ「アドバイス・・・？」
奏楽「うん、かーくんはね結構鈍感だから積極的にアタックしていった方がいいと思う！」
リゼ「なるほど・・・」
奏楽「それとかーくんはコーヒーとかよく飲むけど、ああ見えて甘いものが好きなんだ！だから甘い食べ物あげたらきっと喜ぶよ！」
ココア「そういえば、甘兎庵に行った時も甘いもの食べてるときとかすっごく幸せそうな顔をしてたよ！」
奏楽「アドバイスこれぐらいかなぁ？」
チノ「はい！ありがとうございます奏楽さん！」
奏楽「うん！頑張ってね！」
ココア「うん！頑張るね奏楽さん！
チノ「ココアさん、声が大きいですよ！」
リゼ「・・・／／／（積極的にアタック・・・）」

まだまだ彼女達の戦いは始まったばかりなのだ・・・！

第11羽　極秘潜入任務

千夜　ｓｉｄｅ

今日もいつも通りお店の前で掃除をしていると、シャロちゃんが家から出てきた。

シャロ「行ってきます」

千夜「それは何？」

ふと、シャロちゃんの持っているものが気になったので聞いてみる。

シャロ「私が働いてるお店のチラシよ」

千夜「私も一枚くださいな」

シャロ「別に・・・いいけど」

そう言って、封筒の中からチラシ一枚渡してくれたものを見る。

こっ・・・これは!!

奏斗　ｓｉｄｅ

今日もいつも通りラビットハウスに行こうとすると、千夜が猛烈な勢いでこっちに走ってきていた。

奏斗「な、なんだ・・・？」

千夜「あ、奏斗君！ちょうどよかったわ、あなたも一緒に来て！」

奏斗「ちょ、千夜!?」

そうやって千夜は俺の手を取り、ラビットハウスの中へ入っていっ

た
バーン
千夜「シャロちゃんが大変なの～!!」
ココア「何事!?」
千夜「シャロちゃんがこんなチラシを持ってきて・・・・!」
チラシ?それって・・・
千夜の持ってるチラシをよく見て見みると、あのとき俺がシャロにもらったチラシと同じだった
千夜「きっと如何わしいお店で働いているのよ!」
ココア「なんと!?」
千夜「怖くて本人に聞けない!!」
奏斗「なぁリゼ、シャロが働いてる店って・・・」
俺はその光景を横目に、隣にいるリゼに聞いてみる。
リゼ「ああ、フルール・ド・ラパンって広告で釣ってるけど、ただの喫茶店なんだよな」
ようするに、千夜の勘違いってことか

千夜「どうやってシャロちゃんを止めたらいいの・・・?
ココア「仕事が終わったら、みんなで行ってみない?」
チノ「潜入ですね」
チノちゃんそんなこと言ったら・・・
リゼ「潜入!!」
あーほらもう反応しちゃった
リゼ「お前ら!ゴーストになる覚悟はあるのか!!」
まるで教官のように語るリゼ
ココア「ちょっとあるよー!」
リゼ「潜入を甘く見るなぁ!」
コ千「「サー!」」

リゼ「よし、私についてこい！」
コ千「「イエッサー！」」
一方俺とチノちゃんというと
チノ「どこに潜入に行くんです？」
奏斗「シャロの働いてる店だろうね・・・」
それにしても
チ奏「「暑苦しい人たちだ（です）・・・」」

俺たちは今、フルール・ド・ラパンの窓の下で隠れている。ていうかみんな制服で来てるけど大丈夫か？
ココア「千夜ちゃんとシャロちゃんって幼馴染だったんだね」
千夜「そうなの、だから放って置けなくて・・・」
千夜はとても友達思いなんだな・・・シャロもいい友達を持ったな
リゼ「いいか？慎重に覗くんだぞ」
これじゃあまるで本当に潜入してるみたいじゃないか
「「「「せーのっ」」」」
窓から覗いて見ると、そこには満面の笑顔で接客をしているシャロの姿が。まぁ俺はもうしってるんだけど
シャロ「いらっしゃいませー！・・・・ってなんでいるのよー!!!」
見つかるの早すぎるわ!!!!

見つかってしまったので、おとなしく店内に入る俺たち。

シャロ「ここはハーブティーがメインの喫茶店よ、ハーブは体に良い色んな効能があるの」
千夜（心も体も癒すってそういうこと！）
シャロ「大体、こんなチラシで勘違いしたの誰」
ココア「私たちシャロちゃんに会いに来ただけだよ？」
チノ「いかがわしいってどういう意味です？」
俺に聞いてくるチノちゃん
奏斗「チノちゃんはまだ知らなくていいよ！」
リゼ「まぁこんなことだろうと思った」
そして残った1人に目を向ける。
千夜「・・・その制服素敵！」
シャロ（こいつか！）
シャロの手を掴む千夜。誤魔化すの下手すぎだろ。シャロも気づいてるみたいだし。
ココア「でもシャロちゃん可愛い！ウサミミ似あーう」
シャロ「てっ店長の趣味よ・・・ジロジロ見ないで」
そこに1人ジッとシャロを見つめる人がいた
奏斗「どうしたリゼ？」
リゼ「いや、ロップイヤーもいいかもと思った・・・・って何を言わせるんだ!!／／／」
奏斗「いやいや、俺はまだ何も言ってないぞ!?っあぶね！」
リゼ、照れ隠しに殴ってくるのやめてくれ。俺もうそろそろ死んじゃうかも
シャロ「そういえば、あんたたちなんで制服なの？」
千夜「ハッ・・・つい急いじゃって・・・」
それだけ心配してたってことだろうな
「店員さーん注文おねがーい」
「こっちも頼むわー」
すると客から注文をお願いされる
コ千「「少々お待ち下さ～い」」
シャロ「紛らわしいことやめてよ!!」

ココアと千夜を引き止め、席に座ることになった。

ココア「せっかくだからお茶してってもいいかな？」
シャロ「しょうがないわね」
リゼ「ハーブティーの種類ってよくわからないな」
ココア「やっぱダンディ・ライオンだよね！」
チノ「飲んだことあるんですか？」
へぇー意外だな。でもあのココアのことだからきっとなんかあるな
ココア「うん！ライオンみたいに強くなれるよ！」
奏リ（（たんぽぽって意味わかってないな・・・））
シャロ「迷うならそれぞれにあったハーブティーを私が選んであげる」
そう言ってシャロはそれぞれにあったものを選んでいく
シャロ「ココアはリンデンフラワーね、リラックス効果があるわ」
ココア「へー」
シャロ「千夜はローズマリー、肩こりに効くのよ」
シャロ「チノちゃんは甘い香りで飲みやすいカモミールはどう？」
チノ「子供じゃないです」
シャロ「リゼ先輩は最近眠れないって言ってましたから、ラベンダーがオススメです！」
リゼ「ほぉー」
チノ「あっティッピーには難聴と老眼防止の効能があるものをお願いします」
リゼ「ティッピーそんな老けてんの!?」
まぁ外はあれでも中身がね・・・
奏斗「あ、俺はいつもので」
シャロ「かしこまりました、少々お待ちくださいね」
そうしてシャロはお店の奥の方に向かっていった。それといつも

のというのは千夜と同じローズマリーだ。
チノ「奏斗さん、『いつもの』というのは？」
少々怒った感じで聞いてくるチノちゃん
ココア「奏斗君、『いつもの』っていうくらいだからいつも行ってるの？」
ココアも頬を少し膨らませながら聞いてくる
奏斗「え？ん、まぁ週に２回程度かな」
すると４人全員頬を膨らませていた。なんなんだ・・・？

そうこうしているうちにシャロが全員のハーブティーを持ってくる
ココア「お湯を入れたら赤く染まった！きれーい！」
チノ「こっちはレモンを入れたら色が青からピンクになりました」
千夜「面白いわねー！」
シャロ「あの、ハーブを使ったクッキーはいかがでしょう？私が焼いたんですが・・・」
リゼ「シャロが作ったのか！どれ・・・」
クッキーを一口齧るリゼ
リゼ「おいしい！」
シャロ「よかった・・・！」
奏斗「俺も一つ貰うか」
前に食べたクッキーとはまた違っていてとてもおいしかった。
毎度のこと思うけど、シャロは料理が上手いからいいお嫁さんになると思う」
シャロ「えっ／／／」
奏斗「シャロ？」
シャロの方を見ると顔を赤くさせて固まったままで、そんでもってココアたちの方を見るとまた頬を膨らませていた。俺なんもしてないよね？

え？したって？それでも俺は悪くねぇ！

暫くするとココアが変なことを言い出した。
ココア「・・・このクッキー甘くない」
奏斗「そんなことないだろ？」
シャロ「ふふ・・・ギムネマ・シルベスターを飲んだわね？」
ココア「名前がかっこよかったから・・・」
奏斗「・・・ギムネマって砂糖を壊すものって意味じゃなかったか？」
シャロ「その通りです、それを飲むと一時的に甘みを感じなくなるのよ！」
ココア「そ、そんな効能が・・・！」
ハーブティーてこういった効能もあるんだな。
そこに千夜が
千夜「シャロちゃんはダイエットでよく飲んでいたのよね」
シャロ「いっ言うなバカー！」
ポカポカと千夜を殴るシャロ。本当に仲がいいなこの２人。

千夜「たくさん飲んじゃった」
ココア「お腹に花が咲きそうだよー」
ハーブティーを全部飲み終わったので、シャロがカップを下げにくる
チノ「なにかお手伝いできることがあったら言ってください」
シャロ「ありがとう、チノちゃんって年下なのにしっかりしてるの

ね。妹に欲しいくらい」
シャロはチノちゃんの頭を撫で、チノちゃんは気持ちよさそうにする。
それを見たココアは椅子から勢いよく立ち上がり、目に涙を浮かべながらシャロに言う
ココア「チノちゃんは私の妹だよ！」
シャロ「何言ってるの？」
そこまで必死になって言うか？
シャロ「２人はリラックスできましたか？」
リゼ「確かにリラックスしたけど」
奏斗「まぁ疲れがとれた感じはするな」
千夜「そういえば肩が楽になったような」
ココア「元気になった感じがするよ！」
リゼ「さすがにプラシーボ効果だろ」
チノ「ココアさんが寝てます」
奏リ「「ハーブティー効きすぎ！」」
ついさっきまで喋ってなかったか？いやぁハーブティーは凄いなぁ

数日後
ココア「みんなハーブティー作ろー！」
ココアはあの後シャロにハーブティーを自分で作れるかどうか聞いたところ、作れるということがわかったので早速作ろうとしたのだが
ココア「これでできるかな？」
チノ「ココアさん・・・・」
呆れた感じで言うチノちゃん
奏斗「それ雑草だぞ？」

ココア「え」

第12羽　お泊まり会　始

ココア「今日は雨でお客さんこないね～」
奏斗「そうだなぁ」
窓から見える雨の様子を見ながら呟くココアに相槌を打つ。梅雨の時期になってきて最近は雨が降ることが多くなった。
雨の日に外で出歩く人はそうそういないし、客が来ないのは仕方がないだろう。
ココア「こんな天気なのに遊びに来てくれてありがとね？」
と申し訳なさそうに言ってくるココア
奏楽「全然平気よ？ね、かーくん？」
言い忘れていたが、今ラビットハウスにはシャロ、千夜、奏楽姉ちゃんも一緒に遊びに来ている。
奏斗「ああ、家も近いし気にするようなことじゃないだろ」
シャロ「私たちはちょうどバイトの予定が空白になっただけだし」
千夜「でも私たちが来た時には晴れてたのに・・・」
シャロ「きっと誰かの日頃の行いのせいね」
ココア「シャロちゃんが来るなんて珍しいことがあったからかなー」
シャロ「えっ!?」
そこにリゼが俺たちの所にコーヒーを運んできてくれた。
リゼ「お待たせー」
奏斗「おう、ありがとな」
リゼ「どういたしまして。それとシャロ、コーヒー苦手なのに大丈夫か？」
そう、以前シャロが言っていたと思うがシャロはカフェインを摂ると酔ってしまう。
シャロ「少しなら平気です。それに・・・」
リゼ「それに？」
シャロ「いえっ！なんでもありません」
きっとシャロは心の中ではリゼが入れてくれたコーヒーだからな

んとか思ってるんだろうな。それにしてもシャロのカフェイン酔い、どうにかできないかなぁ
奏楽「かーくん？どうかした？」
奏斗「ん、いやなんでもないよ」
シャロ大丈夫かなぁ・・・

だが３分後・・・

シャロ「みんなー！今日は私と遊んでくれてありがとー！いえ～～～い♪」
このハイテンションである。
奏楽「なにこれ・・・！」
奏斗「姉ちゃんは知らなかったな、シャロはカフェインを摂りすぎると酔っ払っちゃうんだよ」
奏楽「そんな子がいるの!?」
いるんですよ、ここに。
ココア「時間が空いたらいつでも来てねー」
シャロ「いいの？行く行くー！」
奏楽「すごい変わりよう・・・びっくりしちゃった！」
奏斗「ああ、ここまでとは思わなかった」
シャロ「チノちゃんふわふわ～♪」
奏リ楽（（（ココア（ちゃん）が２人になったみたいだ・・・！））））
そんなことを思っていると
シャロ「奏斗せんぱ～い♪」
奏斗「うおっ!?」
なんとシャロが俺目掛けて抱きついて来たのだ。
奏斗「お、おいシャロ？」

シャロ「・・・・・」
奏斗「・・・・あの～、シャロさ～ん？」
さっきからみんなからの視線が痛いんだが・・・
シャロ「なでなでして!!」
奏斗「えっ」
シャロ「なでなで!!」
ズイッと頭を向けてくる。恥ずかしいけどやるしかないか・・・
奏斗「よしよし」
俺はシャロに頭を撫でてあげた。シャロは気持ちよさそうに目を瞑っていた。

てかそれ以前に
コリチ千「「「ジー・・・・・・」」」
この人たちからの視線が痛すぎて仕方がない。

ココア「雨、激しくなってきたね」
チノ「風も強そうです」
奏斗「おいシャロ、そろそろお終いだ・・・って寝てるし」
俺が頭を撫でていたときにいつの間にか寝てしまっていたようだ
奏斗「どうする？」
リゼ「迎えを呼ぶから家まで送っていってやるよ」
千夜「・・・・いえっ私が連れて帰るわ！」
と千夜はそう言ってシャロをおぶる。身体中がプルプル震えてるんだけど、大丈夫かこれ
リゼ「お、おい・・・」

1分も経たないうちに、千夜は体力が尽きて外で倒れていた。わかってたよ、うん。
ココア「千夜ちゃーん!!!」
すぐさま2人を回収して、ラビットハウスの中へ戻った。
奏楽「2人とも大丈夫？」
千夜「ごめんなさい」
シャロ「いつの間にびしょ濡れに・・・」
チノ「えっと・・・今日は泊まっていってください」
奏斗「じゃあ俺たちはここで」
チノ「奏斗さんたちもです！」
奏斗「え、でも近いから大ｚ「泊まっていってください」はい・・・」
奏楽「あらあら・・・」フフフ
強制的に泊まらせられた俺たちであった。

チノ「2人は先にお風呂どうぞ」
千夜「お言葉に甘えちゃうわね」
シャロ「？」
シャロはまだ状況が飲み込めてないようだ。
リゼ「私まで泊まってよかったのか？」
ココア「リゼちゃん、お泊まり緊張してるの？」
リゼ「いや・・・親父の部下に誘われたワイルドなキャンプしか経験した事ないから・・・こんなの初めてで・・・」
ココア「ワイルド？」
俺は敢えてつっこまないぞ！絶対にな！

あの後俺たちはチノちゃんの部屋に案内してもらった。中はいかにもチノちゃんらしい部屋で、ぬいぐるみが置いてあるのだがなかにもボトルシップなども飾ってあった。
ココア「！」
ココアはチノちゃんの制服手に取り、部屋を出ていった。
奏楽「一体どうしたんだろ？」
するとすぐにココアは部屋に戻って来た、そしてしばらくしてある違和感に気づいた。
ココア「じゃーん！チノちゃんの制服着てみたよ！」
そうココアはチノの制服を着ていたのだ
リチ「「全然違和感ない・・・」」
奏斗「そのまま学校にいっても違和感ないから心配だ・・・」
ココア「ホント!?ちょっと行ってくる！」
チノ「待ってください！外は大雨です！」
奏リ「「そういう問題じゃない!!」」

一方シャロたちの方はお湯に浸かっていた。
千夜「リゼちゃんたちとお泊り出来てよかったわね」
シャロ「別によくないし・・・」
千夜「ホントはみんなと会いたかったのよね」
シャロ「会いたくないし」
千夜「シャロちゃんはホントは楽しくないのね」
シャロ「楽しくなくないし・・・って、ん？」

千夜「奏斗君とも・・・」
シャロ「わあああああ／／／何言ってるの千夜！」
千夜（面白い・・・♪）

それから数分後、千夜とシャロはチノに借りたパジャマに着がえる。
シャロ「チノちゃんにパジャマ借りたのはいいけど、ちょっとかわいすぎない？いつもはジャージなのに・・・」
千夜「本物のお嬢様みたいでいいと思うわよ？」
脱衣所から出て、チノの部屋へと向かう。すると
千夜「奏斗君？」
チノの部屋の前で立っている奏斗の姿があった
奏斗「ああ、千夜とシャロか、お風呂から上がったのか。・・・・ん」
すると奏斗はシャロたちを見て何かを考えるような表情になった。
シャロ「な、何か変ですか・・・？」
奏斗「いや、シャロたちがそれ着てると結構似合うな～って」
シャロ「ふぇ!?／／／」
千夜「あら、ありがとう」
奏斗「シャロに関してはどこかのお嬢様みたいで可愛いと思う」
千夜「よかったじゃないシャロちゃん、可愛いだって」
シャロ「あわわわ・・・／／／」
千夜は相変わらず微笑んでるが、シャロはリンゴみたいに顔が真っ赤っかだ。
奏斗「どうしたシャロ？のぼせたか？」
シャロ「な、なんでもないです！／／／」
千夜「そういえば、奏斗君はここで何をしていたの？」
奏斗「ああ、そうだった。おーいココア、そろそろいいか？」

「どうぞー！」
千シ「「？」」
不思議そうに首を傾げる２人を横目に奏斗は扉を開ける。
奏斗「おぉー」
千夜「あらあら♪」
奏楽「可愛いでしょ！」
ココア「うんうん！」
それぞれの反応を見せる奏斗たち。そう、あの後ココアがじゃんけんで勝ったらリゼもチノの制服を着るということになって結果、ココアが勝ちこうしてリゼは制服を着ることになった。
リゼ「か、奏斗！まだ私は何も言ってないぞ！シャ、シャロ！これはちがっ・・・じゃんけんで負けて・・・／／／」
カーテンで身を隠しながらいうリゼ。それをシャロは
シャロ「はぁ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜♪」
キラキラと目を輝かせて見ていた。
ココア「じゃあチノちゃん、お風呂行こ？」
リゼ「おい！」
リゼの呼びかけを無視して、ココア達は浴室へ向かう。
奏斗「なんというか、リゼ。どんまい！」
リゼ「慰めはいらない！ていうか着替えてるから出て行け!!／／／」
奏斗「はいはい・・・」

しばらくして、ココアとチノちゃんが風呂から上がってきた。
ココア「リゼちゃーん、お風呂空いたよ〜」

リゼ「ああ・・・・なんか2人ともココアの匂いがするぞ？」
奏斗「・・・・あっほんとだ」
ココア「あはは、私の匂いってなに～？」
奏リ「「飲む方のだよ!!」」

その後リゼがお風呂に行き、俺は最後にシャワーだけ借りた。浴槽に入ったら男として終わってしまうし何より、こ〇されてしまうような気がしたんだよね、誰にとは言わないが。

第13羽　お泊まり会　ココア編

俺が風呂から上がり、チノの部屋に戻ってからみんなで一つのテーブルを囲んで雑談をしていた。ちなみに、俺の両隣にはココア、シャロ、それとココアの隣にチノちゃんがいて。向かいに、真ん中に奏楽姉ちゃん、その両隣が千夜、リゼといった感じで座っている。

「なんかいつもより一気に賑やかになったね」

「そうですね」

ココアがチノちゃんに向けて言う。

思えばラビットハウスではココアとチノちゃんだけだから、そこに5人も入ってしまえば賑やかになるのも当然か。と、そこに千夜が

「ところで、こんな機会だからみんなの心に秘めている事を聞きたいんだけど・・・」

それを聞いたシャロ、チノちゃん、ココア、リゼがハッとするような顔になった。

こういう時は決まって恋愛話や怪談話と決まっている。修学旅行とかでも可愛い子ランキングとかつけたりするよな。

「ちなみに何を話すんだ?その話によっちゃ俺はここにいることはできないと思う」

なんたって、女の子の恋愛話を聞くなんてありえないからな

「それはもちろん・・・・」

千夜は恋をしたような瞳で・・・

「とびっきりの怪談を教えて♪」

「紛らわしいわ!!」

恋したような瞳で言うから、恋愛話かと思って部屋から出るとこだった。

「では、最初は私からいきますね。リゼさんとココアさんはここで働

いていますけど、落ち着いて聞いてください」
　トップバッターはチノちゃんのようだ。怪談で話されるのはここ、ラビットハウスでのことらしい。
「この喫茶店は夜になると・・・」
　ゴクリ
　全員が息を飲む
「目撃情報がたくさんあるんです、父も私も目撃しました」
「そ、それは・・・？」
「暗闇に光る眼、ふわふわで小さな・・・・白い物体!!」

((((((これ絶対ティッピーだ!!))))))
　チノちゃんが怖い顔をして一生懸命怖がらせようとしてるけど、ここで本当の事を言ってしまえばチノちゃんの夢を壊してしまう・・・！
「では次はリゼさんの番です」
「次は私か、そうだなぁ・・・小さい頃うちの使用人から聞いた話なんだけど」
「「「「使用人!?」」」」
　リゼってやっぱりでっかい屋敷に住んでるお嬢様なんじゃ・・・。
「仕事を終えて帰ろうとすると、ゆっくりと茂みの中から何かがはって近づいてきたんだ。使用人はあまりの恐怖に逃げ出した・・・」
「犯人は一体誰だったんだろう・・・？」
　奏楽姉ちゃんが俺に聞いてくるが、そんなことわかるわけ・・・
「ん？犯人はホフク前進の練習をしていた私だ」
「バラしちゃあかんでしょ!!!」
　てかリゼはなんでホフク前進なんかやってるんだよ！
「次は私ね・・・。切り裂きラビットっていう実話なんだけど・・・」
　ゴロゴロピシャーーーーン

「「きゃぁ～～～～～～っ！」
雷が落ち、部屋の明かりが消えてしまった。こりゃブレーカーが落ちたかな。ちょっとタカヒロさんに聞きにいって、電気をつけてくるか。
そして俺は立とうとするのだが・・・
「奏斗君行っちゃダメっ！」
「しぇんぱ～～いぃ」
暗くてよく見えないけど、ココアとシャロが泣き出しそうな顔になってるのは想像できる、っていうかもう声でわかるんだけど。俺の腕を引っ張りながら引き留めようとする。
「いやいや、ちょっとの間だから・・・」
「お願い・・・」
「行かないでください・・・」
「でもなぁ・・・」
俺の腕にガッチリとしがみついてくる、腕に何かが当たっているのは気づかなかったことにしよう、うんそうしよう。
そのときチノちゃんが「落ち着いてください、こんな時のために・・・」と声がしたかと思うと、パッと明かりがついた。
「よりによって懐中電灯じゃなくて、ロウソクかよ・・・！」
とリゼの怯えたような声がした。明かりがないよりはマシだろうが、なんか雰囲気出てきたな・・・
「「盛り上がって来ちゃった・・・♪」」
千夜と奏楽姉ちゃんだけは、手を合わせあって目を輝かせていた。この時俺は思った、出会わせてはいけないものを会わせてしまったと・・・！

数分後――

「・・・という訳なの、さあ今日はもう寝ましょ♪」
「そうだな・・・。おーいココア、シャロ寝るぞー」

「ぜ、絶対取り憑かれる・・・・」
「ガクガクブルブル・・・・」
ココアとシャロはガクガクと震えていた。さてと俺はそろそろお暇しますかね
「それじゃあ俺は・・・・」
「？奏斗君もここで寝るのよ？」
「はい？」
「えっ！奏斗君ここで寝ないの～！」
「ちょっと待て、女の子だらけの部屋でどうしろと・・・」
俺はここで寝れる勇気はない！そこに奏楽姉ちゃんと千夜が
「かーくん？怖くて眠れないか弱い女の子を見捨てるつもり・・・？」
「女の子を泣かせた奏斗君の立場やいかに・・・？」
「うっ・・・」
やっぱこいつら会わせちゃ駄目だよ絶対に!!
「うぅ～～～～」
ココアは目を潤ませながらこちらを見てくる・・・・・はぁ。
「わかったよ・・・寝ればいいんだろ寝れば!!」
「よろしい！」フフフ
「やったぁ～～～～！」
このコンビをこれからはドＳコンビと名付けよう・・・

ココア　ｓｉｄｅ

みんながいるから眠れるかと思ったけど、全然眠れなかったよ・・・。なんだかトイレ行きたくなっちゃった。怖いけど、頑張って行こう・・・！

そう思い、みんなを起こさないように静かに部屋を出て、ロウソクに火をつける。

「うぅ、暗いなぁ・・・」

先の見えない暗い廊下を歩いていく

ゴロゴロピシャーーーーン

「きゃ～～！」

雷が鳴ったときに、恐怖のあまりに腰が抜けてしまった。そのときにロウソクの火も消えてしまった。

しばらくして廊下の向こうから足音が聞こえてきた

「お、お化け・・・？」

足音はだんだんと近づいてくる！

ギュッと目を瞑ったその瞬間――

奏斗　ｓｉｄｅ

目が覚めたら、急に喉が渇いたので水を飲みに行ったその帰りのことだった。

「ココア・・・？」
「えっ・・・？」
　暗い廊下の途中で座っていたココアの姿があった
「怖かったよぉ～!!」
「お、おいココア？」
　俺を見た瞬間思い切り抱きついた。倒れそうになるがグッとこらえて受け止める。
「うわ～ん！」
　あぁこれはなかなか離れてくれそうにないな。というかなんでココアがこんなところに？
　ふと足元を見ると、火の消えたロウソクがあった。なるほど、雷が鳴ったときにびっくりして火が消え、真っ暗になって、さらに千夜の怪談で怖くて動けなくなってしまったってわけか。
「大丈夫だったか？」
「うん・・・でもさっきの雷で腰が抜けちゃって・・・」
「そっか・・・ほらトイレ行くんだろ？」
　そうやって手を差し出す
「・・・いいの？」
「当たり前だろ？」
「奏斗君、ありがと・・・／／／」

「お待たせ～」
「お、それじゃあ行くか」

そうやって部屋に戻ろうとすると
「ココア？」
俺の服の裾をちょこんと掴んできた
「あの、ね？その・・・／／／」
何かを言いたげだったが、下を向いて黙り込んでしまう
「どうした？」
「その・・・ね？」

「みなさん、朝ですよ」
チノちゃんの声と共にカーテンが開かれ、日差しが入りこむ。それと同時に次々とみんなが起きる
「おはようチノちゃん」
「おはようございます」
「ん・・・もう朝か」
「シャロちゃん寝言で今日は特売なのーって・・・」
「そそそんなこと言ってても、ここで言うなー!!」
朝から騒がしい人たちだなぁさて、俺もそろそろ起きるか・・・って
「ん？」
「どうかしました？・・・・えっ!?」
妙に体の右半分重いなぁと思い右を見ると、ココアが俺の腕に抱きついている姿があった。
そういえば、昨日の夜ココアが怖いから一緒に寝ようって言ってたっけ。あれ？みんなからの視線が痛いのですが・・・・なんでだろ

うなー？

そのあとみんなに問い詰めという名の拷問を受けたのは言うまでもない。

そして奏楽姉ちゃんと千夜のそのとき見せたあの顔は絶対に忘れられないものとなった・・・。

第１４羽　お泊まり会　チノ編

どうも、香風　智乃です。今現在、私の家にココアさんや、リゼさん。ソラさん、シャロさんに千夜さんそれと今はお風呂に行っていていませんが奏斗さんがいます。

こんなに大勢の人が家に泊まるのは初めてなので少し緊張しています。それに・・・・。やっぱりなんでもありません

「チーノちゃーん！もふもふ～」

「コ、ココアさん離れてください!!」

「え～」

本当にココアさんは仕方のない人です

「ははは。ココア、あんまりやり過ぎるとチノちゃんに嫌われちゃうぞ？」

そう言って、笑いながらココアさんを注意するのは奏斗さんでした

「嫌われるのいや～！」

「あっ、奏斗さん。今終わったところですか？」

「ああ、シャワーだけだけど」

「えー、かーくんお風呂に入らなかったの？ニヤニヤ」

「入るわけないだろ!!」

「もし入ってたらぶっ○すところだったが」

とリゼさんが殺意を込めてとんでもないことを言いました

「ちょ、まじ本気っぽいからやめて!!」

「ハハハハハハハ」

最初の方に緊張していたと言っていましたが、やっぱりみなさんといるのは楽しいです。

あの後はみなさんと雑談をしたり、怪談話をして遅くなったのでそろそろ寝ようということになりました。奏斗さんも私たちと同じ部屋で寝ることになりました。少し嬉しいです

それに私の怪談でみなさんが怖がっていたのでよかったです。

(※怖がっていません)

「えへへーみんなといると楽しいね、そわそわして寝れるかなー」

「早く寝ないと明日起きれませんよ」

奏斗さんはきっと別の理由で寝れないと思いますが

「それじゃ電気消すぞ～」

奏斗さんがそう言うと、さっきまで明るかった部屋が一瞬のうちにして真っ暗になってしまいました。

そしてしばらくしないうちに眠気が襲ってきたので、目を瞑りました。

「ん・・・」

途中で目が覚めると、トイレに行きたくなったのでみなさんが起きないように静かに部屋を出ました

あっ、明かりを持ってくるのを忘れてしまいました。

部屋に一旦戻ろうとドアノブに手をかけようとすると

ミシ　ミシ

暗闇の向こうから足音のようなものが聞こえてきました
『切り裂きラビットが・・・・・・』
千夜さんの怪談を思い出す
まさか・・・・すると体の震えが止まらなくなって、尻餅をついてしまいました
足音はだんだんこっちに向かってくるのがわかります、どうしよう・・・・！
「チノちゃん？」
ああ、ここで私の人生は終わるんだ・・・・！
「チノちゃーん」
奏斗さんに言いたいことがあったのに・・・・・・・・・・え？恐る恐る顔をあげるとそこには奏斗さんがいました
「チノちゃん、大丈夫か？」
「・・・・・へ、平気です」
「・・・・・ホントに？」
「・・・・・平気です」
「・・・・・ホントのホントに？」
「・・・・・トイレに行くのでついてきてもらえますか」
「りょーかい！」
にひひ、と笑う奏斗さん。まったく・・・・奏斗さんには勝てませんね・・・・でも優しくしてくれるのは嬉しいです・・・・

「お待たせしました」
「おう、それじゃいこっか」
「はい、そのありがとうございました奏斗さ・・・・・・・奏斗お兄ちゃん／／／」

「」
やっぱり恥ずかしいです・・・！
「ねぇもう一回言って!!」
「言いません！フフッ」
奏斗お兄ちゃん、まるでココアさんみたいですね

「あああああああ、録音しとけば良かったあああああああ」
と暗闇の中で叫ぶ声が近所にまで聞こえ、のちに怪談として語られたとさ

第15羽　お泊まり会　リゼ編

天ヶ座　理座だ。私は今ココア、もといチノの家に泊まっている。
最初は、迷惑もかけるし私はあまり気が進まなかったんだが、今ではみんなと一緒にいるととても楽しい気分で泊まってよかったな、と思う。
じゃんけんでチノの制服着せられたり、怪談話やら色々あって今は寝ていたところなんだが・・・。
「全く寝れない・・・」
そこで私は眠れないついでに喉が乾いてきたので水道のあるキッチンへ向かう。もちろんロウソクも忘れずにな。
みんなを起こさないように静かに歩いていって、ドアを開ける。
「く、暗いな」
開けた先は暗闇。持っているロウソクでは自分の周りしか照らせない。
転ばないように壁伝いにキッチンへ進んでいくと。
ポタ・・・ポタ・・・
何か音が。でも、誰もいない・・・筈だよな？
軍事訓練を受けてるとはいえリゼはまだ高校生の女の子。お化けなど怖い話にはめっぽう弱い。
千夜が切り裂きラビットを話していた時にもみんなには見られてはいないがかなり怯えていた。
「なんだ、誰もいないじゃないか」
音の正体は水道の水が落ちる音だった。怖がっていたのがバカみたいだ。安心したように私は一息つき、コップに水を注いでその水を飲む。
コップを置き、ふと窓の外を見るとまだ雨音は止まず以前よりも強くなっていた。
しばらく止みそうにないなと心の中で思いながら、部屋に戻ろうとする――。
ゴロゴロゴロ、ピカ！ドーン!!

「きゃあ！」
突如大きな雷が鳴り、その場にしゃがむ。雷が光ってすぐだった。近くに落ちたんだろうか。
しばらく経って立ち上がろうとするも、足に力が入らない。
そしていつの間にかロウソクの火も消えていた。それは私へさらに恐怖感を与えた。
「た、助けて・・・」
来るはずもない。みんなは既に寝ている。誰かが来るなんてそんな事――。
「おい、リゼ。大丈夫か？」
「え？」
声がした方を見るとそこには心配そうな顔でこちらを見ると奏斗の姿だった。
「さっきすっごい雷なったもんな。怖がって当然だ。立てるか？」
頭を横に振る。すると奏斗は私に背を向けてしゃがむ。
「な、何をしてるんだ？」
「何ってそりゃ・・・おんぶだよ」
おんぶ、彼はそう言った。おんぶ、おんぶ・・・・。
「ええっ!?」
「ほら、いいから早く」
「わ、わかった」
そう言って私は奏斗の背中に掴まる。
その背中はとても大きく、安心する背中で。
男の人だからというのもある、でもこれは奏斗だからとても安心して、頼もしくもあった。
軍の訓練なんて何も受けてない普通の人だけれど、なぜか奏斗の背中は頼もしかった。
そして私の胸に何やらモヤモヤしたものができた。これが何なのかはまだわからないけど、とても心地いいものだということだけは確かだった

今夜はよく眠れそうだな――。

第16羽　お泊まり会　シャロ編

桐間　紗路よ。どういう流れか私と千夜はラビットハウスにお泊まりする事になったみたい。
なぜかラビットハウスに着いた後の記憶がないのよね。
それはともかく、今はみんなで寝ているところなんだけど・・・。数十分も寝れないでいる。そして、それと同時にトイレにも行きたくなってしまった。
家の中はブレーカーが落ちて暗くなってるから、行こうにも行けない状態に。それと合わさって千夜が話していた切り裂きラビットのことが頭から離れずにいる。
「・・・!そうだ」
ここには奏斗先輩というとても心強い人がいる事に気付く。
寝ているところに悪いけど、一緒について来てもらことにした。
「先輩、先輩。起きて下さい」
先輩だけに聞こえる声で呼びかける。
「ん・・・あ、シャロ。どうかしたか?」
「あ、えと。その・・・」
奏斗先輩の前になるとどうしてもこうやって緊張してしまう。
言おうかどうか迷っていると先輩の方から声が掛かる。
「トイレ・・・か?」
「え、あ、そう・・・です。ついて来てくれませんか?」
「もちろんいいよ。さ、いこ」
そう言って笑顔で手を差し伸べる先輩。
眠くて迷惑だというのに、こうやって快く受けてくれる。それが奏斗先輩の良いところだ。
胸が暖かくなる現象に襲われながらも私はそのたくましい手を手に取り一緒に部屋を出る。

廊下はとても暗かった、そして雷も鳴っていて私1人じゃどうしよ

うもなかった。けど奏斗先輩がしっかりと私の手を握ってくれてとても安心した。そうしてトイレの前まで着く。
「先輩、あの・・・」
「大丈夫、待ってるから」
私の言うことが分かってたかのように相変わらずの笑顔で言う先輩。それに合わせて私は自然と笑顔になる。
「ふふ、先輩には敵いませんね」
「――――だけどな」
「・・・？」
先輩は苦笑いをしながら聞こえない声で何か言う。何て言ったのだろう？

トイレも済ませ、一緒に部屋に戻って行く途中でふと気になったことを先輩に聞いてみた。
「先輩、さっき言ったことって・・・」
「あ、聞こえてた？」
「・・・聞こえてましたよ」
といった嘘をつく。
すると明らかに焦ったような素振りを見せる先輩。そんな先輩を見ていたずらをしてみたくなった。
「言ってみましょうか？」
「ストップ！シャロ！お座り！」
「何で私は犬なんですか・・・」
「あ、すまん。それよりも・・・」
「・・・さっき言ったことは嘘ですよ」
それを聞いた先輩は目を丸くして私を見る。
「シャロ、お前図ったな！」
「先輩は顔に出やすいので分かりやすいんですよ。とてもいじり甲斐がありましたよ？」

「シャロ、お前サラッと凄いこと言ったよね！ねぇ！」
そんな先輩とのやりとりをしながら部屋に戻る。
もちろん手を繋ぎながら――――。

翌日、先輩が昨夜なんて言ったのか問い詰め（拷問）をすると。
「えっと。『むしろシャロに敵わないんだけどな』って言ったんだよ」
「それは何故ですか？」
「え、そりゃシャロは真面目だし――――」
そんな奏斗先輩の私へのベタ褒めを聞いて、私が真っ赤になって倒れたのはまた別のお話。

第17羽　お泊まり会　千夜編

宇治松　千夜よ。今日は天候が悪くて帰ろうにも帰れなくなって、ココアちゃんの自宅でお泊まりさせてもらうことになったの。
そんなこんなで今はみんなと眠ってるところなんだけれど。
（なかなか眠れないわ・・・）
このまま寝ているのもあれなので、気分転換がてら夜の街の散歩に行こうと思い、部屋から出ようとドアノブに手を掛けようとする。
「お、千夜。お前も眠れないのか？」
そこにいたのは奏斗君だった。
「え、奏斗君？どうしてあなたが・・・」
「いやー、俺も眠れなくてさ。ちょっと気分転換がてら散歩をしに行こうと思って」
「あなたも？」
「あなたも・・・ってことは千夜もか？」
２人とも驚いた様子で互いに見つめあって、暫くしてみんなが起きないよう配慮してクスクスと笑いあった。
「それじゃ行くか」
「ええ」

春の季節でも夜の街は意外に肌寒く、上着を着て外に出る。
外の景色はほとんど真っ暗で街灯の光が柔らかと道を照らしている。

「こうして2人でいるのってあんまりないわよね」
「ん、そうだなぁ」
「・・・・・」
「・・・・・」
（（会話が続かない・・・・！））
今、2人で並んで歩いているわけだが、やはり周りがしんと静まっているとなぜか会話が続かない。
それにその話し相手が奏斗君なら尚更話しにくい。
そして、根本的なことはこうやって男の子と2人っきりで話したことなんてなかったから、どういった話をすればいいのか分からないということだろう。
それでも頑張って話しかけれるのはやはり千夜だからだろう。
だからちょっと聞いてみたかった。
「・・・奏斗君はみんなのことどう思ってるの？」
「そうだな・・・」
しばらく悩んだ末に奏斗答えた。
「みんな素敵な子だと思うよ、それぞれ個性があって」
そう言って笑顔で私を見る。
「もちろん千夜もな」
「私も？」
「もちろん、千夜って可愛いしお店もしっかりやってて・・・いいお嫁さんになると思うぞ？」
「あら、どうもありがとう。あなたもいいお婿さんになると思うわよ？」
「お世辞でも嬉しいよ」
（そんなことはないんだけどなぁ・・・）

暫く歩いたところでベンチがあったのでそこで休憩をすることに

なった。
「自動販売機でなんかあったかい飲み物でも買いにいってくるよ」
「ええ、お願い・・・」

（奏斗君っていつも気がきくし、優しいわよね・・・）
そんな奏斗君はもう既に４人の女の子に好かれている。
困ったときに助けてくれるし、どんな人にも優しい器の広い持ち主で。
奏斗君といるととても落ち着けて、１人で家にいると奏斗君のことを必ず思い浮かべてしまう。
「私、どうしちゃったんだろう・・・」
「おーい、千夜ー」
「きゃっ!?」
不意に横から聞こえる奏斗君の声。今の聞かれなかっただろうか・・・？
「び、びっくりしたわ・・・」
「わ、悪い。あ、これホットココアで大丈夫だったか？」
「あ、ありがとう・・・」
手渡される際に触れた奏斗君の手はこのホットココアみたいにとても暖かくて、とても安心した。
今しばらくはこのモヤモヤした気持ちを胸にしまってこの時間を楽しもう。

第１８羽　好き嫌い克服、奏斗の腕前披露！

学校の昼休みにて、いつものようにシャロ、リゼと一緒にお弁当を食べていた。
そんな中こんな話題が出てきた。
「奏斗先輩とリゼ先輩は何か嫌いな食べ物とかってありますか？」
「嫌いな食べ物か・・・特にないな。奏斗はどうだ？」
そう言って俺にも話題を振るリゼ。
意外だなー、軍人の娘とはいえ何かしら嫌いなものがあると踏んでいたのだが・・・。
あっ食べ物ではないけどお化けとか苦手なんだっけ――
シュバッ
俺の目と鼻の先で物凄い速度で通り過ぎていくリゼの渾身のストレート。シャロもいきなりの出来事に驚いて思わずお弁当を落としそうになっている。
「何か言ったか・・・？」
「い、いやなんでも。それで嫌いなものだっけ・・・」
「全く・・・」
肩を竦めながらため息をつくリゼ。
ていうか最近リゼさんの読心術の練度が上がってきてません・・・？
読心術を極めたリゼほどこの世に恐ろしいものはない。
「俺も特にないかな」
「奏斗先輩もですか・・・」
キーンコーンカーンコーン
昼休み終了の合図のチャイムが鳴る。
「あ、もう終わりか。それじゃあなシャロ」
「またな、シャロ」
「はいまた後で～！」
そう言ってそれぞれの教室に戻る俺たちであった。

午後の授業も終わって、リゼと一緒に下校していた。
シャロも誘おうと思ったのだが何か用事があったのか先に帰っていたようだった。シャロの教室へ訪問した時に周りからキャーキャー聞こえたのは幻聴だろう。俺、嫌われてるのかな。
「おい奏斗あれ見てみろよ」
「ん？」
グイグイと俺の袖を引っ張られリゼの方に顔を向ける、よく見るとある方向へと指を指している。その方向へ視線を傾けると。
シャロとチノちゃんがぴょんぴょんと飛び跳ねているというなんともおかしな場面に遭遇した。
「何してるんだ・・・」
「これは新しい訓練か！」
「な訳無いだろ」
こんな訓練あってたまるか。
目をキラキラさせながら聞いてくるリゼにツッコミを入れつつ、シャロ達の元へ向かい目当ての物を取ってあげる。
「はい、どうぞ」
「奏斗先輩、リゼ先輩も」
「あ、奏斗さん、リゼさん奇遇です」
「こんなとこでなにしてたんだ？」
「サバイバルの訓練か？」
「・・・ただの買い物ですよ？」
どんだけ訓練したいんだリゼは。

「これがなかなか取れなくて・・・(背が短くて良かった!!)」
そう言ってシャロが見せてきたものを見る。
「すっぽん汁です」
「すっぽん汁だな」
「すっぽん汁か」
チノ、リゼ、俺の順でそれぞれ答える。
その中で俺とリゼだけがつっこまずにはいられなかった。
((すっぽん汁とはなかなかシブいな!!))

「チノちゃん!セロリパン作ったよ!」
しばらく時間が経って、帰宅後のラビットハウスにて。
ココアはチノちゃんにセロリパンを作ったらしいが、これは一体どういうことだろうか。
するとチノちゃんも。
「トマトジュースを買ってきました!」
「ココア、これはどういうことだ?」
「えっと、今日の朝に――」
「なるほど、ココアとチノちゃんは嫌いなものがあるのか」
ココアがトマト苦手で、チノちゃんがパセリが苦手らしい。
そしてチノちゃんは背が小さいことでコンプレックスになっていたのだそう。
思春期になったらそういうこともあるだろうな。
「というわけでチノちゃん!一緒に克服しよう!」
「はい!」

パクッ
ゴクッ
「「うっ！」」
グデーン
そこはトマトジュースとセロリパンによって倒れていくココア達が居た。
「ありゃりゃ・・・」
「奏斗！これはどういうことだ！」
そこにこの現場を目撃したリゼが。
「いや、これは・・・「テロリストにでも襲撃されたのか!?」
「物騒な世の中だなおい！」
「くっ・・・私が仇を・・・」
「勝手に人殺すな！」
ツッコミしてもしきれないよ・・・。もうそろそろ終わりにしてほしいんですが。
バタン
ん？また誰か――
「久しぶりの登場～！天音　奏楽です♪」
「あんたかぁぁぁぁぁぁ！」
「あっ、かーくん居たんだ。・・・・はっ、これはどういう「もういいわ！」

そう時間も掛からずにリゼと奏楽姉ちゃんに経緯を話した。決してテロリストが襲撃したわけではない。

「──ということなんだ」
「なるほど・・・チノは大きくなりたいのか？」
「はい、なんでも食べないと大きくなれませんから」
「んー・・・・あっそうだ。声を大きくしたら存在も大きく見えるかもしれないぞ？」
「リゼちゃんそれナイスアイディア！」
「ほーなるほどね」
　リゼの案に納得する俺たち。でもそんなことで背が伸びるなら苦労はしないよなぁ・・・。
「ほら言ってみろ、いらっしゃいませー！」
「い、いらっしゃいませー「声が小さい！」
「む・・・いらっしゃい「違う！」いらっしゃ「もっと声を張り上げて！」
「・・・・・」
（（チノちゃんがイライラしてるのが分かる・・・））
　そこには奏楽姉ちゃんがフォローしにいく。
「チノちゃん、こんな風にやるのよ。リゼちゃんも一緒に！」
「あ、はい！」
　カランカラン
「「らっしゃいませぇぇぇぇ!!」」
「「リゼちゃん（奏楽姉ちゃん！）それ八百屋さんっぽい!!」」

「もうここは素直に苦手なものを食べないといけないと俺は思うんだ」
「「うっ・・・」」
「そうねぇ～でもそうするとさっきみたいになっちゃうし・・・」

そう、奏楽姉ちゃんの言う通り。
だから俺は――――
「そこでこんな物を作ってみた」
「なっ！奏斗いつの間に！」
それはトマト煮込みハンバーグ、ハンバーグには細かく刻んだセロリを混ぜてある。
「リゼと奏楽姉ちゃんのも作ってるから、おあ○○よ！」
「わぁありがとう！」
「今のセリフ、絶対ゆき○らだろ！」
リゼのツッコミをかわしつつトマト煮込みハンバーグをみんなの元へ運ぶ。
「う、トマト・・・」
「セロリ・・・」
「大丈夫だよ、食べてみなって」
「わ、分かりました・・・」
「奏斗君が言うなら・・・」
「「「頂きまーす」」」
パクッ
「あれ？おいしい・・・！」
「本当です・・・！」
「そう？それは良かった！」
久々に俺の料理スキルが活かされる時がくるとは。
「これなら食べれるだろ？」
「さすがかーくん！」
「奏斗ってやっぱすごいんだなぁ・・・」
「いやいや、大したことじゃないよ」
ココアとチノちゃんが苦手を克服できたらいいなって思って作っただけだからな。
それにみんながこうやって美味しそうに食べてくれるのはとても嬉しい。
「あの、奏斗さん・・・」

「ん？なにチノちゃん」
　チノちゃんが俯きがちに俺の名前を呼ぶ。
「・・・今度料理を教えてくれませんか？」
「うん、もちろんいいよ！」
「あ、ありがとうございます！」
　とても嬉しそうな顔でお礼を言うチノちゃん。まだ中学生なのに頑張り屋さんだな。
「これでチノがココアの身長抜かしたら面白いよなー」
　ポツリとリゼがそんなことを言う。
　それに乗じて奏楽姉ちゃんも。
「そしたら今度はココアちゃんがもふもふされる側だね！」
「それでもいいかも～」
「あ、私が抱きついたりとかしないので大丈夫です」
　その言葉を聞いて固まるココア。
「チノちゃんは大きくなっちゃダメ～！」
　チロリロリン
　ここで誰かの携帯の着信音が鳴る。
「ん？今のココアのじゃないか」
「あ、ほんとだ。千夜ちゃんからだよ・・・・・・えっ！」
「どうした？」
　リゼがココアにどうだったのか聞くと、ココアはどこからか取り出したトマトジュースをチノちゃんに差し出して。
「栄養とっていっぱい寝なきゃダメ！」
「「いやどっちだよ（ですか）！」」
「かーくんはこれ以上大きくなったらダメ！」
「いやあんたは本当になんなんだよ」

第１９羽　今日の運勢、未来の運勢

早朝のラビットハウスにて、今日もいつもの面子で仲良く話していた時のこと。
チノちゃんがコーヒーカップを手に持ち、客と何やら話をしているのに疑問を覚えたココアは、リゼに何をしているのか聞いたところ―

「あぁ、コーヒー占いだよ」
「コーヒー占い？」
「ああ、チノの占いはよく当たるんだよ」
チノちゃんの意外な特技に、俺とココアは思わず感嘆の声が出る。
とは言え、自分自身、占いはあんまり信じないタチなので、あんまり興味は湧かなかった。
「お天気占いがよく当たる私と張り合うとは、なかなかやるね～」
「いつから勝負になったんだよ」
「いたっ」
フンスと胸を反らしながらドヤ顔するココアの頭に、ツッコミとして軽く手刀をいれつつ、リゼにも何か占いができるかどうか聞いてみると。
「　ん、私か？特にないが・・・あっそうだ」
そう言って手を銃のように人指し指だけを伸ばした形にし、それをこめかみに向ける。
「運勢とかはわからないけど、運試しといったらこれだよな！」
「笑顔でサラッと言ってるけど、それめっちゃ危ないやつ！」
さすが、軍人の娘といったところだろう。
そうこうしているうちに、チノちゃんは占いを終えてこっちに戻って来ていたようだった。
戻って来たチノちゃんにココアはすかさずコーヒー占いにやり方について問う。
「ねぇチノちゃん、コーヒー占いってどうやるの？」
「やり方自体は簡単ですよ」

そして、コーヒーの入ったカップを持ってきて説明する。
手順としては
①コーヒーを飲みほす
②カップを逆さにして、ソーサーに被せる
③カップの底にできたコーヒーの模様を見て、運勢を占う
といった具合だ。
「これをコーヒー占いこと、カフェ・ド・マンシーと言います。おじいちゃんのカフェ・ド・マンシーは当たりすぎて怖いと有名でした」
「チノちゃんのおじいちゃん凄いなぁ、チノちゃんもそんな凄いおじいちゃんの孫に生まれてよかったね」
俺が『凄い』のところだけ強調して言うと、ティッピーの頬が赤く染まったのを俺は見逃さなかった。
おじいちゃんのやつ、照れてるな。
「はい、ですが私はカプチーノしか当たらないんです」
カプチーノしか当たらないことで自信なさげに言うチノちゃん。それだけでも十分に凄いことなのだが。
そして思ったことをそのまま口に出す。
「チノちゃん、俺は十分凄いと思うよ?もっと自信持って」
「は、はい・・・ありがとうございます」
そう言ってトレイで顔を隠すチノちゃん。
「私もカフェ・ド・マンサー?やってみたいな!」
「カフェ・ド・マンシーな、なにそのネクロマンサー的な感じ」
なんか黒魔術でも使いそうな名前だな。
「まぁまぁ、とりあえずやってみようよ!」
「ティッピーもやりたいみたいです」
「じゃあティッピーも占ってあげるね〜!」
「え、ティッピーも占うのか?」
俺とリゼは、もう何度目かと忘れるくらいの、完璧なるシンクロをした。
俺たちが疑問を持ったのは、ティッピーを占う、というよりも『ウサギってコーヒー飲めるの?』という意味でだが。

そんなことも気にせずにココアは占いを進めていく。
「えっと、チノちゃんは・・・空からウサギさんが降ってくる模様が浮かんできたよ！」
「そうは見えませんが・・・本当に降ってきたら素敵ですね」
もし降ってきたとしたら、天気予報とかに晴れ時々ウサギなんて出るんだろうか。
いや、無いな。
「リゼちゃんは・・・コインが沢山見える！金運がアップするのかなぁ？」
「おお・・・欲しかったものが買えるかな？」
「ティッピーは・・・セクシーな格好でみんなの視線を釘付けだよ！」
「ティッピーがセクシーな格好・・・」
『うっふーん（おじいちゃんボイス）』
ティッピーがあられもない姿でこう言ってるのが脳内に浮かぶ。
――これは、あんまり想像してはいけない。
ああ、鳥肌が。
「奏斗君は、この先大変な事が起きるかも！」
「・・・大変な事ってなんだよ」
「具体的な事が無いから余計怖いな・・・」
リゼはそう言うが、占いなんて当たるわけ無いだろうから、何も心配することはないだろう。
「あれ？ティッピーどうしたの？」
「ティッピーも占いたいそうです」
「え？ティッピーも占うのか？」
「おぉ！どっちが当たるか勝負だね！」
本日2回目。ココアはこれがおかしいってそろそろ気づけ。

「ココアの明日の運勢は・・・」

なんかどっかのテレビ番組の、最後の方でやってるやつみたいだな。
「雨模様、というより水玉模様。正直外出しないのが吉じゃ」
「・・・だって、奏斗君」
「いや、あたかも俺の運勢みたいにするな。お前の運勢だから」
「では、リゼの運勢も・・・おぉ、将来リゼは器量のある良き嫁になるじゃろう」
「私が？まさか・・・」
ほぉ、これは中々――
「昨日は夕食後にティラミス１つじゃ足りずキッチンに侵入した、実は甘えたがり、褒めると調子に乗りおる、適当に流すのが無難――」
「この毛玉め！ただの性格診断じゃないかぁ！」
「ギャァァァ！」
「当たってるんだ・・・」
「南無・・・」
そう言うココアを横目に、おじいちゃんに黙祷をする。

その後、なんとか復活を成し遂げたティッピー。そのまま俺の運勢も占う。
「はぁ・・・はぁ・・・それで奏斗の運勢じゃが・・・！これは」
張り詰めたような顔で、俺を見る。そして。
「奏斗、お前にはこの先大きな苦難が待ち構えている。それが何なのかは分からぬが、決していい意味でないものだと言うことは断言できる。おぬしは大切な何かを失うやもしれん」
「は、はぁ・・・」
何だかシリアスになってきたところ悪いが、そう言われても、何だか実感が湧かない。
俺はどこぞのラノベの主人公じゃあるまいし、第一、そんな事は来

るはずもない。
「まぁ善処しときますよ」
「・・・十分に注意しておくのじゃ、奏斗」
おじいちゃんの占いはよく当たるってだけで、絶対に当たるとは限らないから多分大丈夫だろう。
それに、俺は占いなんて信じないんじゃなかったのか。きっと大丈夫。
大丈夫なはず、なのに。何だろうか。この胸騒ぎは。この先、本当に何かが起きる気がする。
そんな俺の心情を理解したのかは知らないが、ココアが俺をフォローしてくれた。その後に続くようにチノちゃん達も。
「大丈夫だよ、奏斗君！」
「そんなことは絶対に起きませんから」
「ココアとチノの言う通りだ。・・・この毛玉の言うことなんか信じるな」
「なっ、それはどう言う意味じゃ！」
「ははは・・・ありがとう」
みんなのやりとりを見ていたら不安なんか吹っ飛んでいってしまった。

その後は、なんの差し支えもなく帰宅することができた。やっぱ大丈夫だったのだろうと思いつつ家に入ろうとすると、ちょうど向こうからココアが走ってきていた。
「おう、ココア。お帰り」
「ただいま奏斗君、占いは当たった!?」

「い、いや何もなかったけど」
　というか当たってもらっても困るんですけどね。
「そっか、よかった！あ、そうだ。ちょっとみんなにも聞いてみようよ！」
「分かったから、そんなに手を引っ張るなって！」
　俺の手を引っ張って、ラビットハウスの中へ入る。
「2人とも、今日は私の占い当たった!?」
「あ、ココアかお帰り。今日は何もなかったぞ？」
「そっかー、私あんこが上から落下してきたり、スカートが捲れちゃったり、シャロちゃんにお金投げられたり、色々あって大変だったよー」
「「・・・・・・・・」」
「ココアさんは人の不幸の身代わりになる才能があるんですか？」
「今後占いやめたほうがいいぞ絶対に」
「代わりに俺の不幸も身代わりになってちょ」
「なんで!?ていうか奏斗君はなんてこと言うの!?」
　今日もいい1日である。

第２０羽　将来の夢と懐かしき思い出

最近テストの日が近づいてきたということで、テスト勉強に勤しむ生徒たちが増えてきた。
俺の学校でも、テスト範囲が発表されて、その範囲の広さに焦っている生徒も多い。
俺も、今日は早めに自宅に帰って勉強をしていると、最近買い換えたスマホに着信がくる。
ーーーどうやらココアからのようだ。内容は図書館で勉強会を開くとのこと。すでに他のメンバーは既に集まってるらしいので、後は俺だけになったようだ。
１人で勉強するのもいいが、みんなでやったほうが教えあったあり出来るので一石二鳥だ、と思い承諾した。
すぐに外出用の服に着替え、図書館へ向かった。

自転車でそんなにかからない距離を走って、図書館に着き、中に入っていく。
余り図書館には入らない方だが、こうして中に入ってみると図書館の中ではかなり大きいと分かる。
中はガラスが多く配置されていて、外からの日の光がたくさん入ってきていて、勉強場所には最適な場所だなと思う
あまりの広さと景色に驚嘆しながらも、ココア達を探す。
「さてと、ココア達はどこに・・・」
「おーいこっちこっち！」
と、ココアの大きな声が聞こえる。
『図書館では静かにしろって習わなかったのか』と心の中で呟いて、顔を少しばかり顰めながら声が聞こえた方向に顔を向け、歩いていく。
来ているメンバーは、千夜とチノちゃん、ココアとシャロのようだ。

「みんなお待たせ」
「もう、奏斗君ったら遅刻だよ！」
「いや、いきなり誘ってきたのそっちだろ。・・・そういえば、リゼは来てないのか？」
「ああ、うん。今日は都合が合わなかったみたいで・・・・」
「ああ、そうだよな」
そんな簡単に都合が合うわけもないか、と納得したところで持ってきた教材を机に出す。
「チノちゃんも勉強しにきたのか？」
「いえ、私は小さい頃に読んだ本をもう一度読みたくなったんですが、タイトルが思い出せないんです」
「そうか、じゃあ勉強ついでに探すか・・・」
恐らく童話とかそこらへんの部類にあるだろうから、勉強が終わった後にでも探してみるとしよう。
「い、いえそこまでしてもらわなくても。それに、奏斗さんにはテスト勉強もありますしーーー」
奏斗さんに迷惑なので、自分で探しますとチノちゃんは言う。
それでも困ってる人がいると助けてくなってしまうのが俺だ。だからチノちゃんの頭に手を置いて、安心させるように。
「別に迷惑だなんて思ってないぞ？俺はチノちゃんが困ってるのを見るのは嫌なんだ」
「うぅ・・・／／／」
「チノちゃん？」
顔を俯かせて、顔を真っ赤にさせる。
まさか、熱があるんじゃーーー
熱を測るために、自分の前髪と、チノちゃんの前髪を手であげて、自分のおでこをチノちゃんのおでこにつける。
「ん、熱はないみたいだな」
「～～～／／／」
顔が近くなったことで、さらに顔を赤くさせるチノ。それはまるで茹でだこのように真っ赤だ。

「・・・？」
「あれも無自覚なんだよね、シャロちゃん・・・？」
「そうよ、本当に恐ろしいわ・・・
「あら～大胆ね～」
　そこには、チノの反応に困惑する朴念仁1人。その朴念仁に恐怖する女子2人。よく分かってない女子1人。
　その光景を暖かい目で見守る外野の人たち大勢がいた。

「じゃあココアちゃん、今日はよろしくね？」
「え？千夜が教えてあげるんじゃないの？」
　千夜の発言を怪訝に思ったのか、シャロは素っ頓狂な声で聞き返す。
「違うわ、私が教えてもらうの」
「嘘でしょ!?」
　千夜の返答に驚くシャロ。
「私、数学と物理が得意なんだ～！」
「ああ、それなら納得。ココアって異常なくらい得意だもんな」
「そこまでなんですかっ!?」
　ラビットハウスに来た初日に見せたあの暗算。今でもはっきりと覚えてる。
　あの時は衝撃だった、まさかココアがあそこまでやるとは誰も思わない。
「それなら、ココアがチノちゃんに教えてあげればいいんじゃないの？」
「確かに、どうしてだ？」
「総合順位が平均だし・・・」

「そんなに足を引っ張る科目あるの？」
「うん、これ・・・」
そういって見せられたものはーーー
国語　１８点
英語　１２点
歴史　２３点
「文系が絶望的だな・・・」
「本はいっぱい読むんだけどね・・・」
「ココアさんは教え方がアレなので、頼りになりません」
「あれ」
中学生ながらにして、中々に辛辣な言葉を言うなぁチノちゃん。
「そうなの？分かりやすいのに」
「千夜さんはきっと波長が合うんです」
「私たち仲良しだもんねー！
「ねー！」
「全く、仲のいいことで」
「はい、全くです」
意外に息が合った俺とシャロだった。
「あ、そういえばチノちゃんもテスト近いって言ってたよね？」
「それなら、シャロちゃんに教えてもらったら？」
「確かに、その方が良いかもな」
「何せ、シャロちゃんは特待生で学費が免除されてるくらい優秀なの！」
そう、シャロは俺と同じく特待生ということでうちの学校では結構有名だった。
シャロが特待生だと知ったのは、転校してから約一週間後だったが。
「すごーい！奏斗君は知ってたの？」
「同じ学校なんだから当たり前だろ？」
「び、美人で頭がいいなんて！」
「非の打ち所がないです！」

「そ、そんな・・・」
「おまけにお嬢様だなんてー完璧すぎるわーまぶしー」
「なんで棒読みなんだよ」

結局シャロはチノちゃんの勉強を教えることになって、俺はココアと千夜の勉強を教えることになった。
「この問題はさっきの答えをここに当てはめて・・・」
「すごく分かりやすいです！」
「うれしい！チノちゃんみたいな妹がいたら毎日だって教えるのに」
「私もシャロさんみたいな姉が欲しかったです」
向こうは向こうできちんとやれてるみたいだな。シャロがいてくれてよかった。
ーーーこっちは国語を教えてるんだが・・・・
うん。察してください。
「ーーーそれで、ここの意味がこうなるから・・・ってココア？」
さっきからやけにおとなしい。しばらくこの静寂が続いて・・・
「私いらない子だぁぁ！」
そう言って、ココアは机にうつ伏せになった。
「図書館では静かにしろ・・・っとそろそろ休憩するか」
「そうだね、私そろそろ疲れてきたところだったんだよ～」
「立ち直り早いな！」
みんながペンを置いて、一息つく。少し時間が経って、千夜がチノちゃんにある事を聞いた。
「チノちゃんは将来、私たちの学校と奏斗君たちの学校、どっちに行きたい？」
「チノちゃんはセーラー服が似合うよ！」
「ブレザーの方が絶対可愛いわよ」
「私は袴姿がいいと思うの」

「「いつの時代？」」
「袴は兎も角、そろそろ決めないといけませんよね・・・悩みます」
「将来の事を決めるのは難しいわよね」
「まぁ、まだ時間はたっぷりあるんだし、じっくり考えればいいよ」
「そうですね・・・」
「将来かぁ・・・私はパン屋さんか、弁護士になりたいな」
パン屋さんはまだいいとして、弁護士は中々難しいのではないだろうか？
「立派な夢ね、ココアちゃん！」
「えへへ～千夜ちゃんの夢は？」
「私は自分の力で、甘兎をもっと繁盛させるのが夢♪」
「へぇ～頑張れよ千夜」
「私はとりあえず今の貧乏生活からの脱却が先ね・・・」
「シャロ、何か言ったか？」
「い、いえなんでもありません!!」
今貧乏がどうとか・・・後で聞いてみるか。
「私も・・・家の仕事を継いで、立派なバリスタになりたいです」
「チノちゃんならなれるよ、きっと」
「バリスタもかっこいいねー！・・・よし、決めた」
ココアは椅子から立ち上がって
「私。街の国際バリスタ弁護士になるよ！」
「とりあえずココアは街の国際から離れような？」
「奏斗先輩は何か将来の夢ってありますか？」
そう聞かれて、俺は将来の夢について考える。
ーーーふと、あの日の出来事を思い出す。

『……約束だから……ね？』
『ああ、約束だ』

まだ一年前のことなのに、随分と懐かしく感じる。あの場所で、よく話をしてたっけ。
「そうだな、俺はみんなを幸せに出来る人になりたいかな・・・」
「うん！奏斗君ならきっとなれるよ！」
「はは、ありがとう。よし、じゃあ勉強の続きやるか！」
「「おー（はい）！」」
そこでただ1人シャロだけは、奏斗の顔が、普段はあまり見ない、切なそうな顔になっていたのを見逃さなかった。

「みんな、お疲れ様」
「もうクタクタだよ～」
勉強は夕方まで続けられ、長時間やったことでみんなの顔にも疲れが見えはじめていた。
「さてと、チノちゃんの探してる本でも探しますか」
「あ、私とチノちゃんも行くよ！」

「分かった、じゃあ行くか」
　席を立ち、ココア達と一緒に行こうとすると、シャロから声がかかる。
「あ、先輩。後で少し話があるんですが・・・」
「ん？ああ、分かった」
　話とはなんだろうか。そんなことを思いつつも、俺はチノちゃんの本を探しに行った。

「ん～なかなか見つからないな」
「これは本が多くて、探すのが大変そうですね・・・」
「まぁ、なんとかなるだろ・・・ココアどうかしたか」
　チノちゃんと話しをしていると、ココアが顎に手を添えて、何やら考え事をしているようだった。
「お～い、ココア？コ～コア～、コ「本のタイトル分かったかも!!」
「「ほ、本当か（ですか）？」」
　そう言ってチノちゃんの手をとって、もう少し先のところまで走って行く。
　脚立に乗り、その目当ての本を手に取りチノちゃんに渡す。
「あったよ！」
「やったな、ココア」
「ちょっとは頼れるお姉ちゃんになったかな？・・・？」
「ココアさん・・・」
　感動シーンになりそうな雰囲気だが、本のタイトルは。
「はいどうぞ。よかったね！チノちゃん」
「えっと、何々？罪と罰・・・」
「ココアさん・・・」
「えへへ～」
「これ、違います」
「えっ」

結局チノちゃんのお目当ての本は図書館を管理人に頼んで見つけることができた。
帰りに、シャロとの話があったので、すぐにシャロの元へ向かう。
「シャロ、話って？」
「先輩・・・何か隠してることありませんか？」
「・・・いや、何もないけど」
「それじゃあ・・・・何であんな顔をしてたんですか？」
「・・・・・」
心配そうな顔で俺のことを見つめるシャロ。
うまく誤魔化したつもりだったんだが、さすがはシャロ。気づいてたのだろう。
ここは素直に話すしかないな。
「・・・分かった、話すよ。でもこれは他の人には内緒だからな？」
「はい、絶対に言いません」
それは一年前の話ーーー。

第21羽　いつも通りのあの風景は、もう　前編

それは一年前の話ーーー。

冬。と聞くと、どこか寂しい雰囲気にさせるものがある。人によっては、寒い季節とか、1年の終わり、等。

感じることは多種多様だ。

けど、俺にとって冬はーーー。

ーーーそれは突然の出来事だった。

「明日から冬休みだけど、生活のリズムを崩さないように。良い冬休みを送ってください！では解散！」

担任の先生がそう言うと、クラス内は一気に騒がしくなる。俺も荷物を持って、家に帰ろうとすると。

「奏斗ー、サイ○寄って帰らないかー？」

後ろから声をかけられる、その相手は小学校からの友人である真田（まだ）　白雄（しらお）。通称マダオ。

本人はこのあだ名を嫌がっているが、クラス全員に、そのあだ名でいじられている。

「まじ？俺も行っていいか？」

「僕も行かせてくれませんか？」

「もちろんいいぜ！」

その話に食いついてきたのは、同じく小学校からの友人、神崎（かんざき）　悠斗（ゆうと）と、白井（しらい）　洸夜（こうや）だ。

「それで、奏斗はどうする？」

「いいよ、それじゃあ行くか。マダオ」
「おし、行くか……ってマダオ言うな！」

▼△▼△▼△▼△

サイゼの中にて、俺たちは注文が来るのを待ちながら、冬休みの予定等を話し合っていた。
「奏斗は冬休みの予定はどうなんだ？」
「っ……いや特には」
「ん？そうか……じゃあ悠斗と洸夜は？」
「ああ、俺たちはーーー」

3人の会話を横目に、俺は朝のことを思い出す。
それはいつも通り、朝食を食べていた時のことだ。
それは突然。そう突然に、それは告げられた。
『俺たち、引っ越す事になった』
『は……？』
『いやぁ、悪いなー。父さんの仕事の都合上引っ越さなくちゃいけないんだ！』
『…そうか、じゃあ仕方ないな』
『ああ、悪いな。引っ越すのは今日からだと……一週間後だな。友達とかにちゃんとお別れ言っとけよ、引っ越し屋さんは明日の朝から来るから』
『引っ越すとこは何処なんだ？』
『ん？あー、木組みの街っていったら分かるか？』
『け、結構遠いな』
『まぁな、まぁそういうわけだから』

この事を話したら、みんなはどう思うんだろう。「あいつ」は……どう思うんだろう。

「……い……」
そう考えると、言わない方がいいのでは?と考えてしまう。
「おーい…か……」
やっぱり、この事は内緒に……
「奏斗!!」
「うおお!?」
耳をつんざくような大きな声が聞こえたと同時に、意識は覚醒する。
見ると、周りの客も、いきなりの大声で此方を見ている。俺と、白雄は謝罪の意を込めて、ペコリと頭を下げたのちに再び向き直る。
「奏斗、どうしたんだよ?」
「い、いや。何もないぞ?」
必死でさっき考えていたことを誤魔化す…が。
「お前、嘘つくの下手すぎなんだよ…いいから話してみろって」
「そうだよ奏斗、昔からの中でしょ?」
「胸の内を曝け出したまえー」
白雄、悠斗、洸夜の順にそう言われて、俺の中にあった不安は無くなった。そうして、3人にゆっくりと今日あった事を話した。
……ていうか、曝け出したまえって何だよ。

▼△▼△▼△▼△
一通り話し終わると、みんなは神妙な顔つきで俺を見ていた。
白雄の目にキラリと光るものがあったのは気のせいだ。
「お前、そういうの早く言えよな」
「わ、悪い…」
「ったくこれだから奏斗は…」
「うぐっ…面目無いです」
「秘密にしておこうなど、そんな浅はかな考えは捨て置き…」
「「洸夜のキャラおかしいよねさっきから!」」
一気にシリアスな雰囲気から、いつもの雰囲気に戻った。いや、洸

夜はそう仕向けたんだろう。
そしてちょうどそこに、注文の品が運ばれてくる。
「お待たせしましたー、マルゲリータピザです」
「あ、どうも」
「ピザが先に到着か。まぁいいや、今日は食いまくろうぜ！」
「「ああ（うん）（はい）！」」
残り1週間、時間でいうと148時間しかないが、俺はこの限られた時間を精一杯楽しむとしよう。

▼△▼△▼△▼△
白雄たちとも別れ、今はもう7時になるところだ。辺りは薄暗く、街灯と部屋の中の灯りが点々としている。それにつれて、寒さも一層険しくなる。
「さっむ……」
1人ポツリと呟く。その時に出た白い息が、まるで今の俺の心情を表すかのように、寂しく出てきた。
「うん、寒いねー」
「……ん？」
突然、女の子の声が俺の独り言に返事をしてくる。俺は驚きながら、その声の先を見る。
見た瞬間に、その女の子の正体がわかった。薄暗くてもわかる、その髪は桜のようにも、雪のようにも見える、白が若干混じった桜色の髪。
そして、その髪の色とはうらはらに、澄んだ空色の目をしている。
「桜雪…」
「こんばんは、奏斗君」
彼女の名前は、白咲（しろさき）桜雪（さな）。高校1年の春に知り合った女の子だ。
その時に知り合って以来、毎日のように、俺に話しかけてくるようになった。最初は互いに苗字呼びだったのだが、だんだんと仲が深まっていって、今では名前呼びになっている。

あと時々、一緒に遊びに行っている。え？……付き合ってはいないし、好きだとも思ったことはない。あ、異性としてだよ？友達としては好きだよ？
「帰るところ？」
「そうだよ」
「ちょっと寄り道しない？」
「どこに？」
「いつもの場所だけど…ダメかな？」
俺の近くまで来て話しているので、必然的に上目遣いになる桜雪。無意識にやってるという事は分かっているのだが、こういう時はどうしてもドキッとする。
「…ああ、いいよ」
「やった！」
そう言って小さくガッツポーズをする桜雪を横目に、俺は先に歩いていく、「いつも通り」に。
それを追うように小走りについてくる桜雪、「いつも通り」に。
そんな、「いつも通り」の光景は1週間後にはもう無いんだ、と考えると……悲しい気持ちになる。
そんな気持ちを片隅に、あの場所へと向かうのだった。

第２２羽　いつかの約束を　後編　※挿絵あり

目的の場所まで歩いてくのに、それほど時間はかからなかった。
そこは、何の変哲も無い、一見普通の場所のように他人には見えるだろう。
だがここは、俺たち（奏斗と桜雪）にとって、とても思い出のある場所だ。
それは河川敷の近くの道に植えてある、今は枯れている桜の木の道。
俺たちは今年の春、ここで出会った。
最近ここに来ることなんてなかったな、なんて心の中で呟きながら辺りを見渡す。

「……もう、1年経つんだね」
桜雪は独り言のような……どこか寂しそうな声でそう言った。
「今思えば、あの時出会ったのってそこまで運命的な出会いってわけでもないよな」
「むぅ、そんな風に言うのは好感度だだ下がりだよ？」
少し頬をぷくっとさせながら怒る桜雪。
「ごめん、まぁでもあの日に桜雪に会えて良かったかな、俺は」
「うん、私も奏斗君に会えて良かった」
なんか、カップルが言うセリフみたいで恥ずかしいのだが、今は我慢する。
ふと、桜雪はこちらを向いて笑顔で言った。
「これから先いろんなことがあると思うけど、これからもよろしく、奏斗君！」
「あ、えっと……」
その発言に対し俺は、はいとは言えなかった。
言葉に詰まっていると、桜雪から声がかかる。
「どうかしたの？」
「あ、いや、その…な」
「……？」

小首を傾げる桜雪に、俺は言った。
「その、今日言おうと思ってたことなんだけどさ……あー」
「なになに？早く言ってみてよ！」
……そんな子犬が興味を持ってるみたいな顔されると、なかなか辛い。
「俺、1週間後……引っ越すんだ」
「へぇ、引っ越すんだ……って、えぇ!?」
両手を口に当てて驚きを隠せない桜雪に続けて言う。
「今日、父さんから聞いたんだ。俺だってびっくりしたさ、けど仕事の都合で…木組みの街って言ったら分かるか？そこに引っ越すことになったんだ」
「……マダオ君たちには言ったの？」
「ああ、今日伝えたよ」
「……そっか」
「……うん」

それから2人は、近くにあるベンチに座り、沈黙の状態を保ったまま、遠くの景色を眺めていた。それからしばらくしないうちに雪が降った。今の俺たちの心情を表すように。寂しく。
「そういえば、今日は雪が降るって天気予報で言ってたな」
「……そうだね」
話しかけようとしても、桜雪はただ相槌をうつだけで、それだけだった。
「……桜雪「今日は、もう帰るね……」
「あ、ああ、わかった。気をつけて帰れよ？」
桜雪は一言、うん。と力無く頷いた後、トボトボと帰路についた。
俺はそんな、哀愁漂う背中を、ただ見つめることしかできなかった。

ーーー雪はやはり、冷たかった。

▼△▼△▼△▼△

日が経って、今はあっという間に引っ越しの前日の朝。

俺はどこか、遣る瀬無さを残したまま、ほとんど家具が片付けられた部屋の中で朝を迎えた。この重い体は、朝特有の気怠さか、或いはあの日の喪失感が続いているのか。

「桜雪……」

再び女の子の名前を口に出す。そしてため息をつき、再び眠りにつこうとする。

プルルルル

「電話……？」

いやいや立ち上がり、電話に出る。

「もしもし……？」

『もしもし奏斗、白雄だ。今日予定あるか？』

その声は、白雄のものだった。

「あるけど……今日はそんな気分じゃないんだ」

『……まぁとりあえず来いって。○○駅の近くのスタ○で１０時待ち合わせな』

「わかったよ……」

自宅から、歩きで５分歩いて、待ち合わせの場所に着く。店の中に入ると、手を上げる白雄と、もう１人女の子がいる。なんか見覚えがあるな、と思いつつも、店員に同席をする事を伝え、白雄達の元へ向かう。

「おう奏斗、きたか」

「おはようございます、奏斗君」

「…なんでクラス委員長の笹原がいるんだよ」
「何故って、別に良いじゃないですか」
彼女は笹原（ささはら）桃（もも）。高校から知り合って、同じクラスメイトで、俺のクラスの委員長をやっている。
誰に対しても敬語で、そういう真面目な部分で男女ともに人気がある。
一応容姿を言っておくと、肌は白く髪の色、髪の色はともに黒で、腰まで伸びたロングヘア。前髪を分けたところにヘアピンをしている。
まさに、ＴＨＥ　優等生と言ったところか。
笹原の隣の席に座り、マダオと向かい合うように座る。
「それで、今日は何の用なんだ？」
「ああ、今日はちょっと付き合ってもらうぞ」
「…おい、俺はそんな趣味は」
「違うからね!?」
芸能人顔負けの盛大なツッコミが炸裂した横で、笹原は首を傾げ、どう言う意味か考えている様子だった。
そうだよね、純情なお方はそっち系は知らないんだよね。いや、知らなくていいけど。
「あ、奏斗君。寝癖ついてます」
「え？あ、本当だ」
いきなり寝癖がついてる事を指摘され、視線はマダオから笹原へと移る。
そして笹原は、ちょこんと指で俺の飛び跳ねている寝癖を触り、ふふっと優雅に笑う。端っこでマダオが目を見開き、恐ろしい形相をしているのを俺は見た。思わず二度見をしたぐらいだ。
口の動きからすると、俺の名前を呼んでいる。いやだなぁ、怖いなぁ。
「くそっなんで奏斗だけ…まぁいい。とりあえず店を出て、目的の場所に向かうぞ」
「目的の場所って？あ～怖かった」
「それは、後のお楽しみだ」

「お、おう」
「それじゃ行くぞー」

会計も済ませ、そんなに時間がかからない距離を歩き、目的の場所に着いたわけだが。
「いいか？絶対に入るなよ？あと中も見んなよ？」
「フリじゃないですよ～」
バタン
これはフリか？フリなのか？
そして俺は扉をそぉ～っと開け……ることはしない。

今、俺はいかにも高そうなレストランの前で待たされている。なんたってこんな所に、学生が行くような場所じゃないだろう……２人はどうしたかって？お店の中に入って行きました、２人だけで。
……別にぼっちじゃないし。
ちょっと内心寂しく思いながらも２人を待っていると、扉が少し開き、その間から手でひょいひょいとこちらを招く。
扉まで歩いていって、扉を開けると。
パァーン　パン　パァァァァァン　ホッヒヒ
突然のクラッカーの音に驚く。……おい、いまなんか変なクラッカーあったぞ。
「これは一体……」
「お前が引っ越すって聞いた次の日からお別れ会の企画をしようと思ったんだけど、普通なのもあれだし何か無いかって探したんだ。そしたら親父が、その友人の店を紹介してくれて、事情を話したら承諾してくれたんだ。ギリギリになったけどな」
「そこまでやらなくても……」
「奏斗君が引っ越すって聞いて、皆さんいてもたってもいられなかったそうですよ？」

「そうだぞ奏斗ー！」
「引っ越すならちゃんと私たちにも言ってよね！」
「ホッヒヒ」
「お別れ会ぐらいちゃんとしろよお前は！」
「みんな…ありがとう」
近くにいた悠斗と洸夜も俺の方へ向かってきた。
「奏斗、まだ礼を言うには早いよ。まず最初に言うべき人がいるでしょ？……早く行ってあげなよ」
と悠斗。それに続くように
「……」
「……なんか言えよ！」
「だって全部言われちゃったんだもん！」
こう言う場面でも相変わらずな、洸夜であった。

あいつの所に向かおうとすると突然、肩に手を置かれて、そちらを向く。
「マダオ、どうした？」
「……桜雪ちゃんは近くの公園にいる。女子達も同行してるからすぐ分かるはずだぜ」
「……！ありがとう、白雄。行ってくる」
本当にかっこいいよ、お前。
白雄はグッとサムズアップしたかと思えば

「……奏斗が久しぶりに俺の名前を呼んでくれたあああああ!!!」

「あーはいはい」
「よかったなー」
前言撤回、やはりマダオはマダオだった。
マダオに対して、クラスのみんなも呆れているようだ。

公園に向かうと、白雄が言っていた、女子達がベンチに座っていた。
俺はすぐさま駆け寄る。
「桜雪っ！」
「え、奏斗、君？」
桜雪の声を久しぶりに聞いて安心したのか、体から力が抜けそうになったが堪える。
そして、桜雪に近づいたときには、他の女子はいなくなってた。どんだけ有能なんでしょうか俺のクラスメイト達は。
一呼吸置いて、言うべきことを言う。
「桜雪、伝えたいことがある」
「……」
今度の沈黙は、この前の時のような沈黙ではなかった。きちんと、真正面から向き合ってくれている。
「ありがとう」
「え？」

「ずっと一緒にいてくれて、毎日が本当に楽しかったよ……白雄達、そして桜雪に会えてよかった。俺、桜雪が大好きだよ」
「ふええ!?／／／」
「前にあんな事があったから、ちょっとくすぐったいんだけど……って桜雪？」
「か、奏斗君、今大好きって……ひ、ひゃい!?」
「どうした？顔真っ赤だぞ」
「な、なんでもないよ、ウン、ナンデモナイ」
「何故に片言？」

いつの間にか、いつもの会話に戻っていて、それに気づいた俺と桜雪は互いに目を見合わせて笑顔になる。
「奏斗君、この前はごめんなさい。私、奏斗君がいなくなるって聞いて、本当に悲しくて、冷たい態度取っちゃった……」
「いいんだよ、俺だってそうなる」
「奏斗君……」
「それに、俺はいなくなったりしない。家は離れても、電話やメールだってできる。だからいなくなるなんてことはないよ」
「うん、奏斗君の言う通り。ふふっ……」
「桜雪、みんなのところへ行こう？」
差し伸べた手は、しっかりと握られーー
「……待って」
ーーずに、桜雪の手は俺の服の裾を掴んでいた。
「ん？」
すると桜雪は、顔と耳を真っ赤に染めて、上目遣いをしながら。
「さっき、その、私の事……す……って／／／」
「え？」
うまく聞き取れずに、耳を近づける。
目をギュッと瞑り、桜雪は言った。
「さっき、私の事大好きって言ってくれたよね？／／／」
「……は？」
ちょっと待った、俺がいつそんな事言った？

いや、待てよ？

ーー

ーーーー

『ずっと一緒にいてくれて、毎日が本当に楽しかったよ……白雄達、そして桜雪に会えてよかった。俺、桜雪が大好きだよ』
『俺、桜雪が大好きだよ』
『大好きだよ』

ーーーーー
ーー

あぁ、やってしまいましたなぁ。
って他人事のように言ってる場合じゃない。
「あの、桜雪？」
「だから、そのね……私も、その／／／」
桜雪、君はいま盛大な間違いをしているよ。いや、これは俺の言い方も悪いけどさ。
「桜雪～、その大好きっていうのは、友達としての大好きと言う事でして……」
「私、とっても嬉しいな……って、え、そうなの？」
「ああ、だから異性としての大好きって意味じゃ、ないんだ……はははは……」
「……」
「あの、桜雪さーん？」
「奏斗君のばか……私が勝手に勘違いしちゃって、恥ずかしい」
「ごめんって」
「……ふーんだ」
桜雪がこうなってる時は、頭を撫でると良し。
それでも、ツンケンとしてる場合は好物のショコラケーキを与えるが吉。
何の動物の紹介だよ、と1人でツッコミを入れて、とりあえず頭を撫でる。
「むぅ……えへへ」
ほら、機嫌が良くなった！
これで一件落着っと。

「全く、お二人さん、熱いねぇ～」
「え？」

この声は……！
いや、いるはずがない、あいつがこんな所に。
声のする方へ向くと、俺の願いは一気に消え去った。
「ちわっす」
「「マダオ（君）!?」」
「俺だけじゃない、クラスのみんなが見てたぜ？気づかなかったか？」
「「気づかなかった!!」」
「そんじゃ、おーい、みんな。出てきていいぞー」
「「みんな!?」」
マダオがそう言うと、あらゆる茂み、木の裏からクラスのみんながぞろぞろと出てきた。
そして一言
「「「「ごちそうさまでした！」」」」
「「どう言う意味!?」」
度重なるツッコミに息を切らしていると、マダオが俺たちの近くに来て
「まぁ何はともあれ、これで一件落着ってやつですかね？」
「「してるけど、してない!!」」

▽▲▽▲▽▲▽▲

そんな騒がしい1日が終わり、引越しをする当日。
クラスのみんなが送迎に来てくれた。
ある人は泣き、ある人は、また会おうと約束した。
そしてマダオ…いや白雄は、予想どうり大号泣。それにもらい泣きをした男達の光景はまさに地獄絵図だったが、実は俺も、もらい泣きした。
悠斗と洸夜とも様々な雑談をし、最後に別れの握手を済ませ、最後に桜雪の元へ。

「もうそろそろ、だな」
「うん……」
「心配するなって、電話だっていつだってできるんだし」
「……でも！奏斗君が行っちゃうのは……嫌」
そう言い終わると同時に、桜雪の目には涙で溢れていた。
「え、ちょ、泣くなよ」
「だってぇ……だって！」
子供のように、泣き噦る桜雪。拭っても、涙が止まることはない。
そんな姿を見て、俺は桜雪を力一杯抱きしめずにはいられなかった。
「奏……斗君？」
「絶対に、また会いに行く、約束する。だから次会う時は……河川敷でな？」
「……うん！約束だから……ね？」
「ああ、約束だ」

それは一年前の話ーーー。

冬。と聞くと、どこか寂しい雰囲気にさせるものがある。人によっては、寒い季節とか、1年の終わり、等。
感じることは多種多様だ。
けど、俺にとって冬はーーー。

ーーー最高の季節だ。

第２３羽　後日談

俺の話が終わった後もしばらく沈黙が続いたが、それから間も無くシャロが先に口を開いた。
「…それで奏斗先輩はあんな悲しい顔をしていたんですね」
「悲しいって言うよりは、寂しいが正解だけどな。…ん、まぁ兎も角、俺はもう大丈夫だから」
はは、と愛想笑いをすると、シャロはいきなり俺の手を取り、安心させるような、励ますような声で言った。
「奏斗先輩のご友人は、きっと元気でやってますよ」
「え、あ、おう。い、いきなりどうしたんだシャロ？」
「奏斗先輩が何か隠してる時、よく愛想笑いをしているんですよ。気づきませんでしたか？」
え、そうだったのかと、手を取ってない方の手で、自分の顔を触る。それを見るシャロは優しく微笑んでいた。
それに、と言葉を続けて。
「メールや電話だってあるから、離れていても大丈夫…って言ったのは奏斗先輩ですよ？」
全く、その通りだ。このくらいで一々寂しがってちゃ駄目だ。
気合いを入れるように、気持ちを切り替えるように頬をバシッと叩いてシャロに言った。
「ありがとうシャロ。お陰で目が覚めたよ」
「ふふ、それなら良かったです」
会話はそれで終わり、辺りは途端に静かになる。耳に入ってくる木の葉っぱの揺れる音が心地いい。
しかし、ずっと聴き続けることも出来ない。
数十分も待たせてるであろうココア達に追いつくべく、急ぎ足で行こうとしたところで、ふと気づいた。
右手に感じる暖かい物。
「あの、シャロ？」
「はい、何ですか？」

「手、掴んだまま」
そう言われてシャロは自分の手を見たと同時に、ボンッと音が聞こえるくらい、顔を凄く真っ赤にして。
「すすす、すみませんすみませんすみません！／／／」
物凄い速度で、何回も頭を下げて謝ってくるシャロ。あ……なんか残像が見える。
俺はぶんぶんと頭を下げるシャロを落ち着かせ、早くココア達の所に行こうと提案をする。
「は、はいそうですね。お手数おかけしました…／／／」
「全然大丈夫だから。さ、行こう」
「…はい！」

▼△▼△▼△▼△
風呂から上がり、自分の部屋戻ると俺のｉＰｏｎに通知がきていた。どうやら最近ココア達が作ったグループからのようだ。
トークの内容をじっくり見た後、俺はｉＰｐｏｎの電源ボタンを押し、画面が消えたのを確認した後、静かに机に置いた。
そして一息つき、再び見る。

ココア『奏斗くんの話ってほんとなのかな？』
……あ
リゼ『奏斗が言っていた桜雪さんっていう人が奏斗の彼女さんとか…』
……これは
千夜『でも本人は好きじゃないって言ってたわよ？』

……ばれてーら

チノ『というか皆さん、このグループは奏斗さんも入っていたのでは…？』

ココア『あ』

リゼ『あ』

千夜『あ』

奏斗『気づくの遅いよみんな』

後日、みんなが何故知っているのかきっちりとＯ・ＨＡ・ＮＡ・ＳＨＩ☆させて貰いました。

第２４羽　軍人の娘はおっかなな可愛い

今日は金曜日。１週間の終わり。
そう聞けば学生にとっては舞い上がりたいぐらいの至福の時間だろう。
何しろ、テスト明けだ。
そんな俺も今日が週末だという事実に、休日はどうしようかなぁなんて胸を踊らせていた。
そしてその日の昼休み。
今日も今日とて、学校の中庭でいつものメンバーと一緒に昼食を取っていた。
そんな時、ふと俺は今更気になった事を口に出した。
「今更だけどさ、リゼって軍人の娘なんだろ？どんな事やってるんだ？」
「なんだ、今更だな」
「だから今更だなって言っただろ」
「でも、確かに気になりますよね……」
リゼは元々、父親が軍人だという事もあって幼少期から厳しい訓練の毎日。幼少期から銃を握る、という結構派手な人生を送っている。
そんな身近にいる彼女だからこそ、普段は聞けない貴重な話を聞いてみたかった。
「そうだなぁ、ＣＱＣの訓練とかやってるぞ」
「む、ＣＱＣか……」
「何だ、奏斗？」
「どうかしましたか？」
俺の考えるような素振りを見て、２人がどうしたのか、と聞いてくる。
「ああ、なかなか知る場面って無いし、男としてはちょっとばかし興味はあるかなって」
「……そういう事ならさ、奏斗」
「ん？」

何やらもじもじしながら、何かを言おうか言うまいか迷ってるご様子のリゼ。
だが決心がついたのか、正面に向き直ってこう言った。
「そ、その休日暇なら私の家に……こ、来ないか？い、いや何やら奏斗、興味があるみたいだったし私も仕方なくだな…いや、本当に仕方なくだぞ？本当だぞ？……それで、どうだ……？」
話している内に、顔が俯きがちになりながら早口でまくしたてるリゼ。そして最後は上目遣い。
こうなれば俺もＹＥＳと答えるしかない。
「わ、分かったよリゼ。休日、行かせてもらうよ」
そしてリゼは、俺の返答にぱぁっと顔を輝かせる。それにつられて俺も自然と笑顔になる。
一方、シャロは会話に入ろうにも入れない状況に、ただ押し黙るしかなかった。

翌日の土曜日。
リゼが事前に教えてくれた住所をメモに書き取った物を片手に、リゼの家を探していた。
メモによると、リゼの家がここら辺にあると思うんだけど。
「えっと……あ、ここか」
そしてそれを見た瞬間、俺は目を幾らかパチパチさせた後、驚きに包まれる。
「豪邸、ですと……？」
厳重に柵で囲まれた中には、大豪邸とも言える大きな建物がどしーんと佇んでいた。
そして恐らく入り口であろう、巨大な門の前には黒いスーツに黒いサングラスをつけた屈強な男が2人立っていた。
あれが門番なのだろうか、実際に目にすると凄く迫力があるという

か……
（なんか、話しかけようにも話しかけれねぇ……！）
だが、やらないと始まらない。男は度胸。いざ参る。
「あ、あの……」
「何だい君」
「何か用か？」
改めて感じる迫力に、固唾を飲む。
意を決して言った。
「あ、天音奏斗と言う者です。本日はお宅の天々座理世さんにお誘い頂いたので来訪した次第でしゅ」
我ながら上手くできたと思うが……こら、最後噛んだとか言わない。
２人の男は互いに顔を見合わせ、何やら話し合っている。
ゴクリ、と再び固唾を飲む。
次の言葉が発せられるのが今か今かと待ちわびると。
「これはご丁寧に。お嬢のお友達なら大歓迎です」
「さぁ、どうぞ。お入りください」
「え、あ、はい。ありがとうございます」
そう言った後、２人の門番は意外にもあっさりと門を開ける。
見た目からは想像し得ぬ紳士的な対応に、思わずあっけらかんとする。
（この人達、本当は優しいのかな）
何て心の中で思いつつ、中に入っていく。
「良ければ、お嬢の所へ案内致しますが」
「はい、お願いします」
１人の男性が案内役を申し出てきたので、お言葉に甘えて案内を頼んだ。
入った直前に迷子とかまじで洒落にならないからね。

「ここが、お嬢の部屋です。仲良くしてやってください、奏斗さん」
「はい、どうもありがとうございました」
そう言って軽くお辞儀を交わした後、また自分の持ち場に帰っていく門番及び使用人Ａさん。
使用人Ａさんと打ち解けて、雑談しながら廊下を歩いていたんだけど、豪邸の中はやはり、というか予想通り広かった。俺の家と比べるまでもない。
改めて、豪邸は凄いなぁと思いつつリゼの部屋のドアをノックし、俺が来たことを告げる。
すると中から暫くジタバタと音がしたかと思えば、リゼが息を切らしながら出てきた。
「おうリゼ、どうした。なんかジタバタやってたみたいだけど」
「いや、何でもないんだ。何でもない」
そう言うリゼには何でもなく見えないんだが、まぁ本人がそう言うんだから何にもないんだろう。
俺は本来の主旨について聞く。
「それで、今日はどうするんだ？」
「あぁ、そうだったな。奏斗、お前には私が直伝でＣＱＣの技をいくつか教えてやる」

◇

リゼ宅の中庭にて。
「よし、奏斗。始めるぞ」
「何だかリゼ、様になってるな」
「ん、そうか／／／」
では、早速ＣＱＣについて学んでいくわけだけど。
「俺、ＣＱＣなんてどうすればいいかわからんぞ」
「安心しろ、まずは私が手本を見せる」
そう言うと同時に徐々に俺に近づいて来る。
あれ、これもう既に始まってるかんーーー
「ふっ……！」
「どわぁ!?」
ーーと考えてる間にはもう地面に投げられていた。
反射的に受け身を取れたのが幸いだったが、投げ手も上手かったのか痛みはそこまで感じなかった。
「あれ、俺どうなったんです？」
「勿論私に投げられたんだ。ほら、手を貸せ」
「何だか妙に楽しそうだな……よっこらせっと」
「そ、そんな風に見えるか？まぁいい、じゃあ次行くぞ。まずは、私をヘッドロックしてくれ」
「へ、ヘッドロック……」
ヘッドロックってあのヘッドロックかよ。
女の子にそんな事やるなんて、ちょっと気が引けるがリゼはそんな事お構いなしに。
「大丈夫だって、さぁ早く」
ええい、ここは腹を決めてやるしかない。

――――リゼ父視点――――

「よし……じゃあリゼ、いくぞ……」

「ああ、来い……奏斗。遠慮はしないでいいから……」

「くっ……こんな事誰かに見られでもしたら……」

「大丈夫だって、心配するな……私は平気だ……」

「わかったリゼがそう言うなら……これで……いいのか……？」

「違う、そうじゃない……」

「じゃあ、こうか……？」

「ああ、それでいい……」

「俺はどうすればいい……？」

「そのままじっとしていてくれ、後は私がやるから……力は抜けよ、痛いから……」

「え、それはどういう……」

――――リゼ父視点終了――――

「それっ」

「ほげふっ!?」

リゼはガッチリとヘッドロックされた状態から、いつに間にか俺を投げ飛ばしていた。

「リゼって凄いんだな……」

「まだ褒めるには早いっ……ぞ！」

「えーーー」

答える間も無く、リゼは右腕で俺の首を抱えて、左脇に俺の右腕を挟む、柔道で言う袈裟固めをした。

「どうだ奏斗！」

「くっ……あ」

必死にもがいてる時に気づいた。

大きく豊かな果実が、俺の顔にそれはそれは近くにありました。

俺の右腕なんかもうしっかりと当たってるし。

というか女の子の体って柔らかいんだな…なんて、こんな状況でも思ってしまった。そしてシャンプーのいい香りが鼻をくすぐる。
一方リゼはそんな俺のことはお構いなしに、固め技を続ける。くそっ俺の気も知らないで！
このままでは、いい香りと柔らかい感触で俺の理性ががが。
「リゼ！ギブギブ、降参だ！」
「何だ、もう降参か？」
「いや、そうじゃなくて……ふぎゅ」
さらに締めつけてくる事によって、果実が顔に密着する形になる。
「ち、違う！胸！胸！」
「え？胸……ひゃぁぁああ!?／／／」
「ぐほぉ……！」
胸が密着してるのを指摘するとすぐに固め技を中断、かと思いきや、さらに締めつけてくる。

あ、なんか意識がーーーーあばよ、とっつぁん。
「ひゃぁぁぁ／／／……あれ？奏斗…って……あ」

「お嬢が楽しそうで何より！奏斗さんにも感謝ですな！」
「あぁ、あの顔を見るのは何年振りか……グスッ」
そんな一部始終を見て、娘の久しぶりに見る顔に思わず笑顔が溢れる使用人と、涙を流すリゼ父であった。

「奏斗！おい、起きろ～！奏斗ぉ～！」
そんなことも知らずに気絶する奏斗の肩を揺するリゼ。

最後に一言。

ひと時の夢をありがとう。

第２５羽　それは愛なのか、殺意なのか

今日も今日とて、一緒に登校するためにラビットハウス店内でココア達を待っていた。
暫くして、最初に準備を終えたココアが奥の扉から出てきた。
すると何を思ったのか、ココアは真剣な表情で「とうっ！」と声をあげながら手を上から振り下ろし始めた。
「……」
え、何そのウルトラチョップ。
ココアは、ウルトラマソごっこにでもハマっちゃったの？
突然の奇行に不審に思っていると、準備を終え出てきたリゼとチノちゃんがそれを見て訝しげな顔をする。
「ココア、何やってるんだ？」
「あ、リゼちゃん。えっとね、もうすぐ私の学校で球技大会があるからその練習だよ！」
「分かりにくいわ、てっきりウルトラマソごっこでもやってるんじゃないかと思ったじゃないか」
「うるとら……？」
「ココアさんは天真爛漫な人なので、興味を持っていてもおかしくはありませんよ奏斗さん」
「チノちゃんが久々に褒めてくれた！」
「いや、それ褒めてないから」
チノちゃんの言う天真爛漫というのは、言い換えるとおかしな人って意味だろうな。
褒められて嬉しそうにしているココアだったが、何かを思い出したのかすぐに普通の状態に戻って、リゼ達に向かって言った。
「それでね千夜ちゃんと練習するから、その間はバイト出られなくなっちゃうんだけど……いいかな？」
「いいですよ、頑張ってください」
「えっ？本当に？」
「ああ、別に忙しいわけじゃないしな」

「あ、あの……止めないんですか……？」
「ふっ……！」
見送りに来たであろうタカヒロさんもココアに対してサムズアップをする。
心優しい人達だなぁ、いいなこういうの。
だが対してココアは、困ったような表情を見せ、次にはしょんぼりとした表情に変わる。
「どうしたココア？」
「ううん、なんでもない……」
生気の無いオーラを漂わせたココアを見て、成る程と理解した。
「「止めて欲しかったんだな（ですね）」」
「あ、あの……リゼさん、奏斗さん」
「どうした、チノちゃん」
「私も授業でバドミントンの試合があるんですが……その、調子が悪くて……練習に付き合ってもらえませんか？」
リゼと顔を見合わせ、コクッと頷きチノちゃんに言う。
「ああ、いいぞ。リゼは？」
「私も大丈夫だ。よし、チノにも親父直伝の特殊訓練を叩き込んでやる！」
「「えっ！」」
それを聞いた俺とチノちゃんは一緒に狼狽する。
チノちゃんに至っては壁まで下がって身を震わせている。
「私にも、という事は他にも犠牲者が……！あ、あの…私も人間なので殺さない程度に……」
「私をなんだと思ってるんだ？」
（チノちゃん……その犠牲者俺だよ、俺なんだよチノちゃん）
犠牲者は身近に居るものなのだ。うん、説得力ある。
あの恐ろしい出来事がつい昨日のような錯覚を覚えながらも、トボトボと歩くココアの元に向かった。

▼△▼△▼△▼△

学校が終わり、家で動きやすい服装に着替えている間にはもう空が橙色に染まる時間帯になっていた。

ちなみに、俺とチノちゃんは近場の公園に向かっている途中だ。リゼは、何か色々と準備があって遅れるらしい。

そして、それを聞いた瞬間の俺とチノちゃんの恐怖と言ったらないだろう。

真面目にチノちゃんが涙目になりながら身体震わせて抱きついてくるぐらいなのだから。

「奏斗さん、今日は私の練習にお付き合いしていただいて有難うございます」

「はは、俺はチノちゃんのためだったら何でもするぞ～」

「な、なんでも……ですか？」

「あ、まぁ何でもっていうと嘘になるけど、大抵の事は手伝う。タカヒロさん、今日は早く代わってくれたみたいだし練習して早く上手くなろうな」

「は、はい……頑張ります／／／」

照れ隠しか、ラケットをブンブンと振るチノちゃん。

そんな仕草に思わず笑顔になる。

妹がいる兄の気持ちが分かる気がする。こんな可愛い妹がいたら毎日が幸せだろうな。

すると、チノちゃんはそんな俺の笑顔が気に食わないのか、こっちを見るなりむすっとした顔になる。かわいい。

「…なんで笑ってるんですか」

「いや、何でもないよ。それよりもほら、公園着いたぞ？」

「むぅ…話を逸らされた気がしますが、まぁいいです」

そう言うチノちゃんは相変わらずむすっとしている。

チノちゃんにも頑固なところがあるもんだな。

「わかったわかった、ごめんチノちゃん。これで許してくれ」

「……っ!?」

そう言って、チノちゃんの頭を撫でる。
チノちゃんは突然の出来事にびくっとするが、すぐに大人しくなった。
周りから見たら、この光景はどう映るのだろうか。仲の良い兄妹に見えるのだろうか。
ちょっと試しに、悪戯も兼ねて名前だけで呼んでみようか。迷惑でなければいいけれど。
「……チノ」
「え、あ、えと……お、お兄ちゃん…？／／／」
「……はっ！」
「……／／／」
あまりの破壊力に、思わず意識を失いかけた。
俺がチノちゃんの事を名前で呼んだら、お兄ちゃんって返されたんだけど。
１０秒にも満たない時間の中見つめ合っていると、遠くの方から聞き慣れた声が聞こえてきた。
「おーい奏斗、チノ～！」
「…！」
「ぁ……」
声が聞こえて、瞬間的に離れる俺。
心なしか、チノちゃんが残念そうにしているのはどうしてだろう。
それよりも声がした方向に顔を向ける。
「待たせたな、色々と準備に手間取ってさ」
「……なぁリゼ、その背中にあるリュックは？」
恐る恐ると言った感じで聞く。
「ん？スポーツドリンクとかタオルとかだけど……」
あれ、意外に普通というか。もっと凄いのを想像していたんだが。
チノちゃんの方を見ると、安心したのか大きく息をついていた。
「取り敢えず公園に入りましょう、時間も勿体無いです」
「そうだな、じゃあ行くか……ん？」
「あれ、ココアか？それに、千夜も」

何故気づかなかったのだろうか、入ろうとした公園には何故かココアと千夜が倒れていた。
「2人は死んだふりにハマっているのか!?」
「そんなわけないだろ！てか、本当に何があった!?」

チノちゃんは近くに来るなり、木の枝でココアの周りに線を描き始めた。
「こういうの刑事ドラマとかで見たことある……じゃなくてチノちゃん、そうやっちゃうとココアが死んだみたいになっちゃうからね？ココア生きてるからね？」
「この状況……どう見ます？」
「現場に残されたのは、1つのボール……まさか球技大会の練習というのは建前で、お互いに叩きのめし合ったという事かっ!?」
そんな事してるとしたら、とんだドMだよ。
マジでドン引きだよ。
「どうしたらそう見えるの!?」
そうココアが叫ぶと、千夜もふらふらと立ち上がる。
「あ、生きてたか」
「バレーボールの練習をしてたの……」
「それがどうしてこうなった？練習してるだけじゃこうはならないだろ？」
状況を理解するために、問いを投げかける。
それに対して、ココアは一回深呼吸をすると話を始めた。
「うん、それが……」

〜〜回想〜〜
「はぁ…はぁ…もう無理……」
「千夜ちゃん！諦めないで頑張ろう！」

「私、当日休むから……」
「努力あるのみだよ！じゃあ千夜ちゃん、今度はトスで返してね？」
そう言ってココアは、千夜にパスをする。
どんどん近づいてくるボールを見ている千夜だったが。
「トス……トス？……トスって何～!?」
トスの仕方が分からず、混乱した千夜は訳も分からずボールをアタック。
その結果……
「うぎゃっ!!」
強烈な勢いで撃たれたボールはココアの顔面に直撃し、倒れ……
「体力の、限界……」
千夜は、アタックをした反動で体力が尽きそのまま倒れてしまった。

～～回想終了～～
「それで、こうなったってわけか……」
「千夜ちゃん……和菓子作りと追い詰められた時だけ力を発揮するから……」
ココアは左頬に手を当て、震えた声でそう言った。
それを聞いたリゼとチノちゃんも体をブルブルと震わせていた。
俺は、ココアの左頬を優しく撫でながらよしよしと慰めてやった。
「このままだとチームプレイは難しそうだな……」
この状態のままだと、後先大変だろう。それに、その度に顔を当てられるのだとしたら怖すぎて仕方がない。
「千夜ちゃん、顔に当てたら反則なんだよ？」
「嘘…知らずにやってたわ！」
「わ、わざとじゃないよね？」
「顔面はセーフじゃなかったですか？」
「なぁーんだ、よかった」

「「全然良くない！」」
チノちゃんの言葉を聞くなり安心する千夜。
それにつっ込む俺とココア。
いくらセーフだからと言ってもやっちゃいけないものはだめだよ？
「このままだとココアと千夜が大変そうだから、俺が折々手伝うってのはどうだ？」
そう俺が提案すると、周りのみんなも成る程と顔を見合わせる。
「まぁ、それは助かるわ！」
「私もその方がいいと思うよ！」
「じゃ、決定だな。けど、基本的にはチノちゃんの練習を手伝うから、そこは了承してくれよ？」
「分かった！それじゃあ、練習始めよう！」

▼△▼△▼△▼△
というわけで、最初はココアと千夜の練習を手伝っているところだ。
勿論、俺は体力がない千夜の方をサポートしている。
サポートと言っても少し離れた場所で助言をして、危なそうだったら手助けするという感じだ。
流石に俺がやったんじゃ意味がないからな。
「ココア、サーブ頼むぞ……ってあれ？」
俺がココアにサーブを頼もうと呼びかけるが、ココアは明後日の方向へ顔を向けていた。
俺はその目線を追っていくと、リゼ達の方へ向けられていることが分かった。
「いくぞ～、それっ！」
「ふんっ！……あ、すみません」
「あはは、落ち着いてやれよ～！」
なんとも楽しそうな雰囲気のリゼとチノちゃん。

それを羨ましそうに見ているココア。
「私そっちに行きたい！」
「駄目だ」
「ココア、やるからにはちゃんとやろうな？」
「うぅ、分かったよ……」
「せめて関係ない人に当てちゃう癖は……」
何やら考え事をしている千夜を横目に見る。目線をココアの方に戻すと、既にココアはサーブを始めていた。
そして、次の瞬間ボールと何故かラケットが千夜に向かって飛んでいっていた。
「ちょ、千夜危ない！」
千夜は考え事をしていて、ボールとラケットが来ているのに気づいてない。
急いで千夜の元に向かうが……
「……あっ、靴紐が」
靴紐を結ぼうとして、しゃがんだ結果ボールとラケットは頭上を通り過ぎて行く。
奇跡的な神回避に、思わずずっこける。
「……自分の危険は回避できるんですね」
「……全くだ」
「リゼちゃん交代して～！」
「しょうがないなぁ…」
「リゼ、俺はココアが心配だから千夜は任せてもらっていいか？リゼなら安心して任せられるだろうし」
「ああ、任せておけ／／／」
ふんと胸を張るリゼ。
ちょっとそういうのはやめてください。どこがとは言わないが、あれが強調されて目を向けられない。

「ココアさん、バドミントンできるんですか？」
「任せて～！……ほら、凄いでしょ！」
「いや、もう不安しかないんだが。ただ反復横跳びしてるだけだろそれ」
「ふふん、目にもの見せてあげーーがふっ」
「「はっ！」」
ココアが何かを言っている途中に、横からバレーボールが飛んで来たぞおい。
飛んで来た方向を見やると、千夜が手で顔を覆ってその場にしゃがんでいた。
「ごめんなさい……。私、周りに迷惑かけてばっかり……」
「でもさっきから私にしか当たってないよね……」
「だとしたら、それはもう愛です」
「「そんな愛嫌だ！」」
これもうココアを○しにかかってるよね？死角から確実に命狙ってきてるよね？
「よし、みっちり鍛えてやるからな」
「そして何故、ココアが鍛えられる側になっている！」
久々の連続ツッコミに疲れていると、聞き慣れた声が千夜の名前を呼んだ。
声のする方向を見ると、シャロが此方に走って来ていた。
「千夜～。おばあさんが帰りが遅いって心配してたわよ～？」
「あれ、シャロか……本当だ、もうこんな時間だ」
珍しく私服のシャロに新鮮味を感じつつも手持ちの携帯を見ると、練習を始めた頃から随分と時間が経過していた。
「そろそろ切り上げるか？」
「はい、その方が良いと思います」
「じゃあ最後にみんなで試合をしようよ！シャロちゃんも入れて！」
「えっ私も!?」
「確かに、私もその方が良いと思うわ！」

▼△▼△▼△▼△

というわけで、始まりましたバレー勝負。

チーム分けは、ココアとシャロペアに対してリゼと千夜ペアの対決だ。

俺とチノちゃんは審判役。

「シャロちゃん、今こそあの状態になるべきだよ！」

「で、でも……」

「奏斗君、チノちゃん。ちょっとだけ待ってて！」

ココアは一体何を企んでいるんだ……。

そして数分もしないうちに、ココアが戻って来た。

「……っ！奏斗さん、ココアさんが手に持っている物は……！」

「まさか……ココアはアレをシャロに……」

「ヴァ～リヴォ～ル大好きぃ～～～♪」

「カフェインでドーピングしましたね……」

「汚い、流石ココア汚い！」

「おっ、シャロやる気だなぁ！私たちも負けてられないな！」

「え～とりあえず、試合開始！」

こうして試合は始まり、勝負は互角の状態が続いていた。

当然というべきか、リゼのアタックは凄まじかった。が、驚くことに、それを凌ぐココアとシャロ（ドーピングモード）も凄かった。

そしてそんな2人の反撃を、1人で凌ぐリゼにも感服だ。

……あれ、千夜仕事してなくね？

「千夜！ボールそっちに行ったぞ～！」

「トス……トス……ふっ……あっ！」

「凄いじゃないか千夜！」

「やっとトス出来るようになりましたね」

「うん、ありがとう。みんなのおかげよ！」

千夜がトスを出来るようになった事を褒め称えるリゼ達。

その一方で、俺は張り切りすぎて体力切れになったシャロ達の元へ向かう。
「「ぜぇ……ぜぇ……」」
「2人とも、よく頑張ったな」
「あ、せ、先輩……」
「か、奏斗君……」
あ、ドーピング切れてる。いや、それは置いといて。
「はい、スポドリ」
「あ、ありがとう……ごくっ……ごくっ……ぷはぁ～！生き返る～！」
「お前は何処ぞのおじさんか」
「ありがとうございます、奏斗先輩！」
そんなこんなで、練習は終わった。
数日後、球技大会は終わり、後日それぞれの出来事を聞くと。
ココア達の方は、千夜がドッチボールの人と変わって、その類稀なる回避能力で大きな功績をあげたらしい。
何故最初から、そうしなかったのだろうか。
そしてチノちゃんの方は、最後の最後でリゼから伝授してもらった『パトリオットサーブ』を使用したがネットに引っかかってしまい負けてしまったとか。
結果は残念だったけど、良い経験になったと思う。特に『パトリオットサーブ』。

▼△▼△▼△▼△
ある日の夜。
俺はある人物に電話を掛けていた。
携帯も変えてるから向こうはびっくりするに違いない。

「怒るかなぁ……？」
恐れ半分で、着信ボタンを押す。
プルルルル
プルルルル
プルルルル
『はい、もしもし？』
「もしもし？俺だよ、俺」
『え、オレオレ詐欺……？えと、どちら様でしょうか？』
「俺だよ桜雪。天音　奏斗！」
『……え、うそ！奏斗君!?』
そう、電話の相手の人物とは白咲（しろさき）　桜雪（さくな）のことだ。
あれからすっかり連絡するの忘れていたから、そろそろやっておかないとまずいと思い、今日電話した次第だ。
「あはは、何だかその声聞くのも久しぶりだなぁ……」
『あ、うん。そうだね……って違う！』
耳がキーンとするほどの大きさで叫ぶ桜雪。
『どうして！いままで！連絡！してこなかったのっ！』
「耳がぁ…耳がぁあ……」
『もう本当に心配したんだからねっ！』
本気で近所迷惑になるんじゃないかってぐらい、大きな声で怒鳴る桜雪。
「…悪かったよ」
『…でも、良かった。連絡してくれて』
「桜雪……」
だがすぐに、安心したような、優しい声に変わる。
いつも通りで良かったと。その声が聞けて良かったと。
『そっちでの話、たくさん聞かせてね？』
「あぁ、今夜は寝させないぜ？」
『あははっ、楽しみにしてま～す！』

ーーーーー結局、俺の木組みの街での充実とした生活を話し終わるまでに、次の日の朝になった。

第２６羽　和服とメイド服、みんなはどっち派ですか？

今日の晩御飯の材料も買い終わり特に何もないまま家に帰ろうとすると、スーパーの入り口近くにある掲示板に貼り付けてある一つのチラシに目が止まる。
『父の日ギフト大特集！』という大きな見出しに続いて、その下に商品の一覧の写真がずらっと並んでいる。
「もうそんな時期になったんだな…」
今年は父さんに何を贈ろうか、と思考を巡らせていると聞き慣れた声が俺の名前を呼ぶ。
声が聞こえた方向へ向くと、学校帰りであろうシャロと千夜がいた。
「「こんにちは奏斗先輩（君）」」
「…二人が一緒に帰ってるのあんまり見ないからちょっと新鮮だな」
「まぁ確かに、私たちの学校と千夜の学校じゃ離れてますしね…」
仕方ない、というような顔で言うシャロ。
今更のことだが俺とシャロが通う学校と千夜の通う学校はシャロが言うように真反対というべき程に離れている、だから二人が一緒に帰っているのはあまり見ない光景だった。
「何か予定でもあるのか？」
「はい、実は明日甘兎で…むぐっ!?」
シャロが何かを言おうとしたところで、千夜が遮るようにシャロの口を抑えた。
「ダメじゃないシャロちゃん！こういうのは秘密にしておかないと♪」
そう言う千夜の顔は悪戯をするときの子供のような顔をして笑っていた。
今回も千夜が何か企んでるんだろうなぁ、と思っていると。
「フフフ……」

((怖っ！千夜の笑い方怖っ！))
悪戯っ子のような顔じゃない、あれは悪魔だ。カカロットォォオ!!
シャロと二人して怯えていると、千夜の方から声を掛けられた。
「奏斗君？」
「は、はい！」
「明日甘兎庵に来てもらえるかしら、きっと良い物が……フフフ」
大丈夫、絶対生きて帰るさ。うん

▼△▼△▼△▼△
翌日、俺は甘兎庵の扉の前で心の準備をしていた。
「よし…」
深呼吸をした後、ドアを開いて店内に入る。
そこに出迎えてくれるのはこの店の看板娘である千夜ーーー
「いらっしゃいませ……あ」
「……」
「……」
「あ、一人です」
「何事もなかったかのようにするなぁ！」
ーーーではなく、何故かリゼが千夜と同じ緑色の和服を着ているという光景が広がっていた。
先日千夜が言っていたことはこういう事だったのか、と合点がいくと同時に一つ疑問が出てくる。
「なんだってリゼが甘兎に？」
「ああ、それは……と、その前に席に座ってからだな。シャロと同じところで良いか？」
シャロもいたのか、とリゼが指差す方向を見ると、ちゃんとシャロが席に座って此方を見ていた。そしてよくよく見ると、俺たち以外に

客がいないことに気がついた。
　こんな事もあるものなんだと思いながら、リゼに案内されたシャロの向かい側の席に座る。
「じゃあ私はお冷とメニューをもってくるから」
　そう言ってリゼはカウンターの方へ向かっていった。
　それを見届けてから、シャロの方に顔を向ける。
「シャロ、なんでリゼが甘兎で働いているんだ？」
「それが……」

　シャロが言うに、リゼが自宅の庭にて独自で編み出したバドミントンの必殺技『パトリオットサーブ』を練習していた際に手からラケットがすっぽ抜けてしまい、偶然近くにあったリゼ父の部屋の窓を割ってしまったそうだ。
　さらに運が悪いことに、その部屋にあったリゼ父のお気に入りのワインも割ってしまったという事だった。
「要するにその罪滅ぼしがしたいと」
「はい、しかも私が働いているフルールでも働くみたいで……」
　まさかの三軒掛け持ち。
　まぁリゼの事だから難なくやってくれるだろうが、少し心配だ。
　シャロも同じなのか、不安そうな顔をしていた。
　そんなシャロの頭に、ちょっと身を乗り出した態勢から手を置いて安心させるように撫でる。
「ぁ……奏斗、先輩…？」
「よしよし、シャロは良い子だな～」
「ぁぅ…／／／」
　恥ずかしさからか赤面するシャロ。流石にやりすぎたので、すぐに手を引っ込める。

……でもこうしてみると、なんだか恋人同士みたいだ」
「え、あ、えっと…／／／」
「ん、シャロ？」
「私は奏斗先輩のこ、ここ……きょいびとでもいいでしゅ！／／／」
目をぐるぐるさせながらシャロは聞き取れない言葉を発する。
と、そこにリゼがお冷とメニューを持ってきた。
「お前らは一体何やってるんだ……どうぞ、お冷とメニューです」
「いや、ちょっと頭撫でて安心させようとしただけなんだが……」
「それをちょっととは言わない」
呆れ顔で言うリゼ。そこに千夜が奥から出てくる、そしてまるで有り得ない物を見たかのような顔で言った。
「奏斗君……恐ろしい子っ……！」
「なんでだよ！」
ガラスの○○、知ってる人は知ってるよね。

それからというもの、客は来ないまま俺たちは雑談して過ごした。
そして甘兎庵の前にて。
「あの、リゼ先輩。明日からはフルールでバイトするんですよね？」
「甘兎と日替わりでな。明日はよろしくな、シャロ」
「はい、楽しみにしてます！……それではリゼ先輩、奏斗先輩。また明日」
「またなシャロ！」
そうしてリゼとシャロはそれぞれ逆方向に歩いていった。俺もリゼに続いて行こうとすると千夜が、手で俺を招くような仕草をする。
「悪いリゼ、ちょっと待っててくれ」
「え？ああ…分かった」
「それで、どうした千夜」

「明日リゼちゃんがフルールで働くって言ったでしょ？それでもし良ければ奏斗君も行ってくれたら嬉しいかなって」
「それは……ああ、そうか」
きっと千夜も三軒も掛け持ちしているリゼの事が心配なんだろう。
それで俺に監視と言っちゃなんだが、リゼを護衛してほしいということなのだろう。
「分かった、それなら俺に任せてくれ！」
「良かったぁ、このカメラでリゼちゃんが働いている姿を撮って来てほしいな、って思ってたの♪」
「うん、やっぱり千夜は期待を裏切らないなちくしょー！」
今日も千夜は平常運転です。

▼△▼△▼△▼△
翌日、俺は千夜から授かったカメラを片手にフルール・ド・ラパンにやってきた。千夜の依頼にＹＥＳと答えたからにはやるしかないのだ。拒否権はない。
店内に入ると、当然と言うべきかやはりリゼがーーー
「いらっしゃいませ～♪「カシャカシャ」…あ」
「……」ササッ
「……」
「あ、一人です」
「いやこのくだりまたやるのかよ！」
今日も素晴らしいツッコミありがとうございます。そして普段見れないリゼのフルール限定のいらっしゃいませ、頂きました。バッチリとカメラに収めさせてもらったぞ。
え、盗撮？安心せいシャロに許可は得ている……その代わりにその写真コピーさせてくれとは言われたが。
「そしてシャロは何故照れているんだ!?／／／」

「何だか見てはいけないものを見たような気がして……／／／」
確かにそれは同感だと俺も思う。
今のリゼは服装とスタイルが相まって中々に如何わしいオーラを醸し出している。
「ま、まぁとりあえず席にどうぞ……」
席に座り、取り敢えずショートケーキとローズマリーを頼む。
だが、リゼはどうも浮かない顔をしていた。
「大丈夫かリゼ？やっぱり三軒も掛け持ちしてるから……」
「いや、このくらいどうということはない」
「ならいいんだが…でもあまり無理はするなよ？」
「わ、分かってるって……それより顔が近い／／／」
「あ、すまん」
あわあわとした感じで離れていくリゼは話題を変えようとシャロがどうしてバイトをしているのか聞く。
それを聞いたシャロはなんとも驚いた様子だった。
「えっ!?……そ、それは……こ、ここの食器が凄く気に入っていて、決してお金に困ってるというわけではなくて……」
顔を真っ赤にしてオロオロしながらも答えるシャロ。
「あぁ、親に頼らずお金使いたいもんな」
「え、えぇ……初めて自分のお金で好きなものを買えた時って嬉しいですよね！」
「あぁ！……感動したな～！」

そんなこんなでフルールでの時間も過ぎ、あっという間に父の日当日。そしてリゼの掛け持ちバイトの最終日まで時間は過ぎた。
今日までの間、リゼは男顔負けの体力で一生懸命働き続けた。俺は近くで見守ることしかできなかったが、そのリゼの努力を少しは手助

けできただろうか。

「……これからワインを見に行こうと思うんだが、奏斗とシャロも一緒に行かないか？」
「もちろん」
「ご一緒させていただきます！」

そして俺たちは、ワインを見に行った

……が。

「……お金が足りませんでしたね」
「予想以上に高かった……」
そう呟く二人。
リゼ父が気に入っていたワインは、俺たち学生の財布の中身を合わせても買えないような高級品だった。
残念そうなリゼに俺はどうしたものかと考えていると良いことを思いつく。
「なぁリゼ、ワインが駄目なら……」

「このグラスの透明感、たまりませんよね♪」
「成る程、ワイングラスかぁ……」
ワインが駄目ならワイングラスだろうと思い、グラスやカップを取り扱っている店を選んだ。
「先輩、今ならセットがお得みたいですよ？」

「えっ……親父とペアグラスは流石に無理だ…」
「酷い言われようだな……そこは両親用とかじゃないのか？」
「あ、ああ…成る程」
　シャロはリゼにペアグラスを渡すと微笑みながら言った。
「……あんなに頑張ったんですから、きっと喜んでくれますよ」
「シャロ……ありがとう！」
「…はいっ！」

　店でペアグラスを買った後、俺はとリゼはシャロと別れ一緒に歩いていた。
「なぁ奏斗、お前は父の日のプレゼント何にしたんだ？」
「あぁ、プラモデルと包丁にしたよ。包丁に関しては結構お高いやつ」
「プラモデルは奏斗のお父さんの趣味っていうのは予想できるけど、包丁…？」
「あぁ、父さん料理関係の仕事してるからさ。だから包丁」
「へぇ、じゃあ奏斗が料理上手いのも頷けるな……」
　お陰で英夫さん十枚と一葉さん一枚消えてったけど。まぁまだ王の財宝の中には沢山あるんだけど。
　今回は甘えてバビッちゃっただけだし！

「なぁ、奏斗……」
「ん？」
「結局ここ毎日、私の側につきっきりだったな」
　そう言うリゼの顔は俯いていて表情が読み取れない。
　俺はその顔を覗き込んで言った。
「…迷惑だったか？」
　いいや、と首を横に振るリゼ。その顔は本当に嬉しそうな表情で。
「奏斗のお陰で、その……今日までやってこれたしな。だから、ありがとう」
「……どういたしまして」

こうしてリゼの長い長い日替わりバイトは幕を下ろした。

第２７羽　ひとときの夢をパフェに乗せて　※挿絵あり

父の日から既に数週間が経った頃。
朝のラビットハウスで、一人の女の子の相談を受けていた。

「今日は奏斗君に、相談があって呼んだの」

いつもとは違って、真剣味を帯びた様子で言うのはココア。
ココアが相談なんて珍しい、とチノ、リゼを含めた俺たちは心の中で思う。
「どうぞ」と、気を利かせてオリジナルブレンドを淹れてくれたチノ。
その声色は心なしか緊張している気もする。
彼女も心の何処かで、今度のココアは何かが違うと感じ取っているのだろう。
一方リゼは、腕を組みながら俺とココアを見守っている。
表情では隠しているが、地味に目線が右往左往していて忙しない。
加えて、腕組みをしている手にかなり力が入っている。
そんなチノとリゼに見守られながら、チノから頂いたオリジナルブレンドを一度啜り、張り詰めた空気を破るように言った。

「それで、今日は一体どうしたんだ？」
「単刀直入に言うね？
私と……

……私と恋人になって欲しいの～～～っ！」

ーーーーー

ーーー

ーー

ー

「……は!?」

「なっ!?」

ココアの口から放たれた予想外の言葉で、俺は唖然とし、チノとリゼは遅れて驚嘆の声を漏らす。

いまいち状況が掴めないまま、ココアが言ったことを繰り返す。

「ココアの、恋人になる!?」

「うん……」

「ちょ、ちちちょっと待ってくださいココアさん！　じょ、じょじょ冗談も大概ですよ!?」

「そ、そそそうだぞココア。冗談でも言っていい事とわ、わわ悪い事があるぞ!?」

「……？　そのまんまの意味だよ？」

「「なっ!?」」

嘘偽りのない言葉だと知り、さらに驚嘆するチノとリゼ。

だとしたら、今の状況はココアに告白されてると同義ーーーー

「それで、ここから本題なんだけど……」
「いやさっきのが本題じゃないのかよっ！」
「あはは、実はねーーー」

「つまり何か。ココアは、カップル限定のパフェである『苺とチョコのパフェ～恋は二人のように甘々～スペシャル』なる物が忘れられなくて……」
「今すぐにでも食べたい、でもそれはカップル限定だから食べられない」
「だから奏斗さんに恋人のフリをしてもらって、そのパフェを食べたい……ということですか」
「勿論無理にとは言わないよ？」

俺、リゼ、チノの順でココアの言ったことを要約する。
ココアが一言加えて大きく頷くと、俺たちは呆れ果てて、こめかみに手を置いて溜息をつく。

「びっくりして損しました……でも、そういうことなら」
「そうだなぁ」

「……いや待て、二人は何でそれで納得してるの？　流石にそれはむ
「ダメ……かな？」……ぐっ」

ココアの頬染め上目遣いに思わず唸る。
この方、分かっててやってるのだろうか。だとしたらそれはもう、小悪魔的センスがある。
だがしかし、ココアが忘れられないほどのパフェ。どんな味なのか気になるのも事実。
ここはもういっそのこと乗るのも手だ。
パフェを食べるために一時的に恋人になるだけであって、そのまま未来永劫恋人になるわけではない。

なら、俺の答えはーーーー

▼△▼△▼△▼△
「さぁ、着いたよ！」

目的の場所に着くと、ココアがそのお店を指差しながら言った。
見た目は普通だったが、窓から見える店内には普通の客の他にカップルの客がちらほら見えた。
「じゃあ早速入るか……って、どうしたココア？」

お店のドアを開けようとするがココアはついて来ず、その場に表情

を隠しながら立ったままだった。

「……手、繋がない？」

「え……」

「ほ、ほら……私達って……一時的だけど恋人同士、だし」

消え入りそうな声で、頬を真っ赤に染めながらココアは言う。そして、また顔を俯かせる。

足を震わせているのを見れば、ココアがいかに勇気を振り絞って言ったのかが伺えた。

そんな彼女の気持ちを無下に出来るだろうか。

「ごっごめんね？　変なこと言って、今のは忘れーーーー」

ギュッと。返事をする代わりに力を込めて、でも優しく手を握った。

「ーーーあ」

今日、パフェを食べるための大前提は俺とココアが恋人同士であること。

そしてそんなココアのお願いを承諾したのは、俺だ。

「…今日だけはココアの恋人だからな。出来ることなら、何でもするよ」

恥ずかしくなって、空いた手で頬を掻く。

その様子を見たココアは、静かに笑って言った。

「ふふっありがとう」

「じゃあ…行くか」

「うんっ！」

「奏斗さんとココアさん、手繋いでますよ……！」
「ちょっと本格的すぎないか!?」

その一方、奏斗とココアの様子を見るために尾行してきたチノとリゼは、二人が手を繋いで店内に入っていくのを目撃していた。羨望の目で見る二人だが、奏斗とココアの雰囲気を壊したくないという気持ちもあった。
それは、互いに同じ人を好きになったことで通ずるものがあったから。

「店内に入ってしまったことですし、私たちもそろそろ戻りましょう」
「そうだな……そういえばチノ、ココアの仕事はどうするんだ？」
「大丈夫です。父には、今日はココアさんが抜けることを伝えておきました」
「あ、相変わらず仕事が早いな……」
「それほどでもありません」

▼△▼△▼△▼△

「ご注文は何になさいますか？」
「え～っと、この苺とチョコのパフェ、恋は二人のように甘々……スペシャルを……」
「品名読んで照れるなっ！　その気持ちはわからんでも無いけど！」
店内にて、早速お目当ての物を注文しようとするが、聞いているだけでも恥ずかしい品名。
ココアも途中から言葉が途切れ途切れに。
周りの目もあるため、羞恥心はＭＡＸに。
さらに追い討ちをかけるように、店員の口から再び告げられる。
「苺とチョコのパフェ～恋は二人のように甘々～スペシャルですね。こちらはカップル限定の物となっております、お二人様はカップルの方でしょうか？」
「は、はぃ……」
「承知いたしました。それでは少々お待ち下さい」
店員が行ったことで、二人は安心して大きく息を吐く。
「ふぅ、なんとかパフェにありつけそうだね」
「それにしても、どんなパフェかと思ったら結構でかかったな」
「これは絶対に美味しいに筈だよ！」
カップル限定とされるほどには、このパフェのボリュームは凄かった。
その特徴はなんといっても真ん中に盛り付けられた巨大なハート形のチョコレートと、大量の苺だろう。
ただ、そのボリュームを二人で食べきれるかが心配ではあるが。
「……えと」
どうしたのか、とココアを見る。

キョロキョロとしていて落ち着きがない。
しかしすぐに、何かを決心したかのように椅子をこちらの方に寄せてきた。
一瞬。
肩が触れて、俺とココアはビクッとなる。
何事もなかったかのように、会話を進めるが。

「は、早くこないかなっ」
「そ、そうだな」

沈黙。
聞こえるのは周りの人の談笑する声、食器のカチャカチャとなる音だけ。
ここの空間だけはまるで別世界のように静かだった。
どうにかして話題を振りたいところだが、どうにも話し出せそうにないこの状況。
誰か助けて下さい。

「あのーーー」
「ご注文の苺とチョコのパフェ～恋は二人のように甘々～スペシャルです」
「うわぁ!?」

最高の、最悪のタイミングで店員がやってくる。
驚く二人に首を傾げる店員だったが、何かを察して、すぐに品を置くと綺麗なお辞儀をして戻っていった。
顔がニヤついていたのは、気のせいだ。
「…パフェ来たねっ！」

「よーし食べるか！」

気持ちを切り替えて目の前のパフェに意識を向ける。

苺をメインに、真ん中に大きなアイスとブルーベリー、トッピングチョコなどがトッピングされており、アイスの上には大きなハート形のチョコ。

だが、そこで二人はあることに気づく。

「スプーン……一つしかない？」

「お店側のミス、ではなさそうだな」

「……奏斗君」

流石にここまで来たら何が来るのかは読めるだろう。

カップル限定、その意味。

「はい、あ～ん」

「やっぱりそう来るか……！」

頬を赤らませながら、苺を一つスプーンで掬って俺の前に持ってくる。

その姿に、俺以外にも、周囲の人が魅了されていた。

いつまでたっても動かないので、ココアは頬をぷくーっと膨らませて不満を表した。

「早くしてくれないと恥ずかしいな……」

「わ、悪い……あ～ん……んむ」

甘い。美味しい。恥ずかしい。

「うん、美味しい」
「よかったぁ～！」
「…じゃあ、次は俺だな」
「ふえぇ!?」
「当たり前だろ、ココアがやったんだから俺がやらないでどうする」
「そ、それだと……間接キスになっちゃうよっ！

それに、ココアにやらないと俺だけが恥ずかしいままだ。
ココアからスプーンを貰って、アイスを一掬い。それをココアの口元にまで持っていってやる。

「それじゃ、あ～ん」
「あ、あ～ん……んむっ」
「どうだ？」
「うん、凄く美味しいよ！」

さっきまで恥ずかしさはどこへいったのか、はたまたもう吹っ切れたのか。それともパフェの美味しさが上回ったのか。
もう一口、もう一口とパフェを要求してくるココア。時々交代して、今度は俺の番。
周囲の人達は、その光景を見て何を思っただろうか。
嫉妬、或いは羨望か。
二人が恋人同士のフリをしているなんて思いもよらないだろうが、何にせよその目に映っていたのは紛れもなく、微笑ましいバカップルが映っていたに違いない。

▼△▼△▼△▼△

パフェをあっという間に食べ尽くし、現在はラビットハウスへの帰路についている。

あの後の事だが、お店から出る時に他の客から何故か慈愛の目で見られていて、二人で困惑していた。店員には「ラブラブでしたね」と持て囃される始末。

「今日は本当にありがとう、感謝してもしきれないよっ！」

「こっちこそ。おかげさまで、美味しいパフェが食べれたよ」

互いに感謝を述べ合う二人。

恥ずかしい事は沢山あったが、それは同時に楽しい思い出として残っていくだろう。

それに今回の件を通して、ココアとまた一歩仲が深まったような気もする。

「もしよかったら、またこういう機会があれば行きたいね！」

「ま、待て。それは結構しんどいぞ!?」

「ふふっ、冗談だよ？」

ココアは立ち止まり、でも、と言葉を続ける。

「奏斗君と過ごしたこの日は、絶対に忘れないよ」

「俺も、忘れない」

「ねぇ奏斗君」

「ん、どうした？」

「ーーーだよ」

その瞬間風が強く吹き、ココアが何を言ったのか聞き取れなくなる。

何を言ったのか聞こうとした瞬間、頬に柔らかい感触が伝わる。

「……じゃあまた明日！」

気づかないうちに、いつの間にかラビットハウスの前にいて、頬に柔らかい感触を残した本人は逃げるようにその中へ入っていった。

俺はその間暫く、その場に動けないまま頬に残った感触の余韻に浸っていた。

第２８羽　水泳の時平泳ぎは大の苦手って人いるよね

「温泉プールに行こうっ!!」

丁度皿洗いが終わり学校の支度でもしようかという時のことだった。先の発言をした彼女は俺の制服の裾を掴み、眩しいほどに目をキラキラさせて言った。

「……はぁ？」

突然のことに頭に疑問符を浮かべる。

「だから、温泉プールに」
「そうじゃなくて、どうして温泉プールなんだよ」
「いつも疲れてるみたいだから、かーくんのためにと思って♪」
「大袈裟だなぁ、別にそんなことしなくてもいいよ」

しっし、と手を振る仕草をすると奏楽姉ちゃんは「うぅ」と唸るような声を上げるが、そんなのお構いなしにこちらに急接近して俺の手を取って言った。

「かーくんが幸せだったらそれでいいんだよっ……！」
「……っ」

危ない危ない。一瞬姉にときめきメモリアルしそうだった。いやそれゲーム。っていうか、最近ブラコンじみた言動が増えているのは気のせいだよね？ココアの過剰な妹愛が形を変えて移ってたりしてないよね？

「ダメ……かな？」
「……じゃあ、午後あたりにでも行ってみるか」
「っそうこなくちゃ！そうと決まれば準備とかしなくちゃね～愛してるよかーくん♪」
「はいはい俺も愛してる。それよりも、早く大学行く準備しとけよな」
「分かってる～♪」

某配管工のような掛け声を残して、二階に上がっていった。
（あんな顔されたら敵わないよなぁ）
奏楽姉ちゃんの性格に対して苦手意識を持つ俺であったが、流石にあんな嬉しそうな顔をされては気も許してしまう。性格は面倒くさいけど顔は良いし、一応あれでモテている。彼氏は居ないけど。
本人の前では言わないでおこうと心の内で思っていると、しばらくして二階からドタバタと騒がしい音が聞こえてくる。どうせ碌でもないことだろうと様子も見に行かずに自分も学校へ行く支度をしようとすると次の瞬間、肩を掴まれたかと思えば視界が上下に大きく揺れる。

「おい、どうしたんだよ？」
「あああ、後１０分で、電車来ちゃうよ!!!」

――――俺はすぐに愛車の自転車（対通勤用ママチャリ）を取りに向かった。

小走りになりながら自分の教室へと入っていく。壁に立てかけら

れた時計を見ればなんと登校時間ギリギリ。皆勤賞が取れなかったらどうしようという俺の不安は解消された。とはいえ、今度からそういうことがないように時間を気にしながら余裕をもって会話する。絶対に。

「おはよう奏斗。珍しいな、お前が登校時間ギリギリなんて」

自分の席の前に来た時、リゼのほうから声が掛けられる。

「あぁおはようリゼ。今朝は奏楽姉ちゃんを駅まで送ってきて疲れてるんだ」

「おかげで時間ギリギリだ」と、あまりの疲れから今朝は言おうとも思わなかった愚痴をこぼすと、リゼは驚きながら返答をする。

「奏斗は部活入ってないくせに運動神経だけは良いじゃないか」

「だけは、は余計だ。俺はあれだ、５０メートル走で足は速くても直ぐばてちゃう人だからな！」

「いやそれは問題だろ」

確かに本当のことだけれどもそうも真顔でツッコミを入れられるのは精神的にキツイんですが。ほら、リゼの前の席の人があまりのツッコミの速さに怖気づいてるよ。

まぁリゼは軍人の子だし、怖くて当たり前――――

「何か言ったか？」

「いえ何も」

――――そういえばリゼには読心術というチート技があったのを思い出す。

俺は咄嗟に否定をすることで、その後に待っているだろう悲劇を回

避をする。

「……次はないからな？」

「はい」

そんな会話をしているうちに教室内では席に座り始めるクラスメートが出てきはじめる。そろそろ頃合いだなと話を切り上げようとすると、リゼから再び話が振られてくる。

「今日ココア達と温泉プールに行く予定なんだけど、良かったら奏斗も一緒に来ないか？」

「温泉プール？」

本日二度目の登場となるその単語。今日は温泉プールデーなのかと錯覚しそうではあるがそんなことは勿論ない。リゼは俺が黙っているのを見てか、恐る恐るといった感じで問いかけてくる。

「何か用事でもあったか？」

「いや、実は俺も奏楽姉ちゃんと行くつもりだったんだ」

そう言うと、リゼは何故か睨むような形でこちらを見てくる。

「へ、へぇ……二人きりで、か？」

「……？ああ、そうだけど」

「ふーん……」

途端に顔を明後日の方向へ向ける。

何か悪いことでもしたのだろうかと考えてみるが一切心当たりがない。今度は俺がリゼに聞いてみようとすると、いきなりこちらに向き直ってリゼは答えた。

「じゃあ私たちと一緒に行かないか？」
「え？あの――――」
「行くよな？」
「はい」
「ははははそうかじゃあよろしく頼んだぞ奏斗？」
「イエスマム」

トンッと肩に手を置き笑顔になるがその目は全く笑っておらず、無意識のうちに軍人が女性の上司に向かって言うアレを言う。俺はリゼを怒らせた原因が何なのかをホームルームの時間にも考えていたが、結局分からずじまいだった。
尚、周辺の女子生徒はその理由を理解していたのは言わずもがな。

△

「普通の施設にしては豪華すぎないか…？」

早く身支度を終えた俺は一足先に施設内を見回ろうと思った矢先に、その設備の充実さに圧倒されていた。温泉旅館とかでよく見る浴槽に、２５ｍプール。ましてやジェット浴槽が備えつけられているときた。この街どんだけお金持ってるんだよ。
考えに耽っていると、後方から賑やかな会話が聞こえてくる。

「かーくん、お待たせ～！」

その中でも一層お気楽そうな声で俺の名前を呼ぶのは、紛れもない奏楽姉ちゃん。つられて振り向き、歩き出そうとするがその先の光景を見たことで足は止まってしまう。
そこらの男性なら誰もが見惚れるであろう、モデルのように優美な姿をした奏楽姉ちゃんは、肌の露出が多いシンプルな白色のビキニによってその姿はさらに美しさを引き立たせられていた。これが所謂

大人の魅力なのだろうか。
結局そんなことはどうでもよくて、奏斗は大きく手を振る仕草と共に揺れるソレを極力見ないようにするのが精一杯だった。

「す、少し恥ずかしいです……」
「チノちゃん自信もって！かわいいよっ！」
「っ！あんまりそういうことは言わないで下さいっ」

視線は奏楽姉ちゃんの後方へと移ってゆき、最初にココアとチノが目に入った。
二人は同様に水玉模様が入った水着を着ているが、水着のタイプは全く異なっていた。ココアはピンクの露出の多いビキニ、対してチノは水色の露出が控え目なワンピース。

「ビキニはちょっとやりすぎたか……？」

次にリゼ。
彼女もココアと同じビキニタイプで、イメージカラーに沿った紫にチャック柄の模様が入っている。普段とは打って変わって、セクシーさが表れている。

「シャロちゃん、水着食い込んでるわよ？」
「少しは察してよバカ――っていうか先輩の前で言わないでぇ！」

最後に千夜とシャロ。
彼女たちも同じビキニタイプだがこれもまた大きく違いがあった。清楚な感じの白とその縁に緑というシンプルなデザインの千夜に、活発な印象を与える黄色にフリルがあしらわれている水着を着るのはシャロ。

「どうどう、似合ってる？」

「あ、あぁ似合ってるんじゃないか？」

近い。

俺の頭の中はそれで一杯だった。ただでさえ見ないようにしているのに接近してきたら――――

「そ、それよりも折角温泉プールに来たんだし早く入ろう」

この状況から早く逃れたい気持ち半分と早く入りたい気持ち半分で提案をすると、突然リゼが手を挙げて話し始める。

「そのことなんだけど……私、深いプールでは泳いだことないんだ」

それを聞いた俺達はあまりの意外さに目を丸くする。リゼはその視線から逃げるように顔を背ける。

「だから誰かに教えてもらいたくてさ…」

頬を掻きながら泳げないことを告白するリゼ。

それを見た奏楽姉ちゃんはずいずいっとリゼに言い寄っていく。

「それならうちのコーチ（かーくん）が手取り足取り教えるから安心だよ♪」

「コーチ……奏斗が私の専属コーチになってくれるんだな？」

「まぁ俺でよければ喜んでやらせてもらうが」

「じゃあ奏斗コーチ、よろしく頼む」

「あ、じゃあ私も行っていいかな？」

「私もお願いしたいです！」

そこに、ココアとシャロが名乗りをあげる。

「こちらからもお願いしようと思っていたから勿論良いぞ。リゼも良いよな？」

「あぁ、人が多い方が楽しいからな！」

リゼからの承諾も得てメンバーが増えたところで、残る人はチノちゃんと千夜、それに奏楽姉ちゃんの三人になった。

「三人はどうする？」

「あちらの温水プールに行ってチェスをしに行くつもりです」

「私は女の子二人だと心配だから、用心棒役も兼ねて行ってくる！」

「奏楽姉ちゃん、一応あなたも女性だからね？」

丁度良い時間になったら一度集合ということを伝えてから、みんなはそれぞれの場所へと向かった。

準備運動を済ませプールへと入った三人。リゼが予想以上に体が柔らかかったりと、ココアとシャロが突然組体操を始めたり、ココアの息止め勝負など出来事は多かったもののとりあえずとしてはリゼに泳ぎを慣れてもらうことから始めることにした。

尚、人数が減っているのはココアが途中でチノちゃん達の方へと向かって行ってしまったからだ。なんでも賭け事勝負をしているらしいが詳しい内容は知らない。

「ここは無難にビート板を使った練習でしょうか？」

「そうだな、じゃあリゼ先ずは――」

「私、あれやりたい。手を引っ張るやつ」

「い、意外と子供っぽい!?」

目を輝かせてワクワクとしているリゼ。

精神年齢が８歳とかそこらなんじゃないかと思うぐらいの子供じみた発言に、俺とシャロはリゼの普段とのギャップに悶え死ぬ寸前

だった。幼少時代はきっと銃を乱射なんかせずに、キャッキャッと外で走り回って遊んでいたに違いない。

「じゃあそれでやるか、シャロお願いできるか？」
「え、ええっ!?私ですか？」
「異性が手を引くのはアレだろ？それにシャロなら任せても安心できるから」
「か、奏斗先輩…！」

その言葉を聞いてやる気を出したのか、シャロは周りにやる気のオーラを溢れさせながらリゼと共に練習を開始した。コーチだの言われたが、結局シャロに練習に付き合わせてしまった。
今度何か奢ってやろうと思っていると、チェスをやっているチノちゃん達の方で何やら盛り上がっているのが見えた。

「千夜ちゃん、そこでチェストだよっ!!」
「よ～し、そこで王手だっ！」
「チノ、負けるんじゃないぞい！この勝負にはわしの命が賭かっているんじゃ!!」

そこには白熱した戦いが繰り広げられていた。
ココアはチェストじゃなくてチェックメイトって言いたかったんだろうか。奏楽姉ちゃん、それは将棋だ。そしておじいさん、命が賭かってるってどういうことですか。

「ツッコミどころ多すぎるだろ」

あまりの呆れ具合にこめかみを抑えながらそれらを傍観していると後ろで焦ったような声が聞こえた。
どうやらシャロとリゼの方で何か起きた様子で、俺はすぐさま二人の元へと泳いでいく。

「も、もう想定訓練なのか!?」
「ちょ、大丈夫かシャロ」

パニックになっているのか俺の体にがっしりと掴まっているシャロ。そうなれば必然的に体が密着してしまうわけで。俺はそれをあまり意識しないようにしながら、プールサイドへと向かった。
床に下ろすと、右足を必要に伸ばしているのが見えた。その行動から察するに――――

「もしかして、足攣っちゃったのか?」
「は、はい……恥ずかしながら」

申し訳ないというような感じで顔を下げるシャロ。そんな姿を見たリゼは、傍に寄りシャロは悪くないのだと伝える。

「シャロが悪いわけじゃないから気にするな。今はちゃんと休んでてくれ、な?」
「リゼの言う通りだ。本来なら俺が教えている立場だったからシャロには感謝してるよ、ありがとう」
「は、はい…!」

シャロに元気が戻ったことで、俺達は安堵の色を浮かべる。

「じゃあ、練習再開するか」
「ああ。よろしく頼むよ」

リゼの手を取り少しずつ、ゆっくりと歩き始めていく。

「なぁ奏斗」
「うん?」

「いや、なんでもない……ふふっ」

この受け答えに困惑する奏斗だったが、当のリゼはとても嬉しそうにしている。思えばこうして二人で練習、もとい特訓をするのはリゼの屋敷での一件以来だった。あの時は大変だった、と思い返す奏斗。いきなり投げられたり、締め技を繰り出されたり――――胸とか。

――――胸？

「おっふ……」

「か、奏斗ぉ!?お前もかっ!?」

「奏斗先輩っ!?」

あの時の感触を思い出したとき、目前に何があるのかを再認識。そして足を攣るというなんとも情けない結果で終わってしまった。その時、リゼとシャロは奏斗が沈んでいく際にサムズアップをしていたのを見たという。

また、余談ではあるがチェスの勝負の結末はチノちゃんが勝利を収めた。賭け事の内容は「ココアにお姉さんと呼んでもらうこと」とのこと。奏楽姉ちゃんもまた何か賭け事をしていたらしいが、その内容については分からずじまいに。

――――結局シャロに再び練習を付き合ってもらい、無事リゼは泳げるようになったのだった。

第２９羽　蟠りと消えたパズルのピース

「なぁ、奏斗」
「なんだ？」
「チノ、いつもより機嫌悪く見えないか？」
「それについては俺も気になってたんだ」

周りには聞こえないように耳元で言うリゼに、奏斗は飲んでいたオリジナルブレンドが入ったカップをソーサーに置きながら答える。
奏斗がそのことに気づいたのは、ラビットハウスを訪れてから間もなくだった。些細なことだったが、チノのお皿の置き方に少々雑な感じが垣間見えた気がしたのだ。リゼも同じ意見ということで大方合ってるのだと分かったが、奏斗もリゼも普段感情をあまり表に出さないチノだということもあり驚きが隠せなかった。
ココアも奏斗達の並々ならぬ様子を感づいたのか、此方へと近づいてきていた。

「二人とも何話してるの？……あっ、もしかして作戦会議かな？」
「ココアのことだよ」
「あれ、そうなの？」

リゼと二人で綺麗なツッコミを入れた後、ココアにも先ほど話していたことを告げるが――――

「え？いつもと変わらずツンツンしてるよ？」
「……念のために聞くが、普段がどんな感じか言ってみろ」
「え～っと……もふもふしようとしたら直ぐに逃げられちゃうし、仕事中だと『ちょっと邪魔です』って言われたりだよ？」

「一体何をした!?」

ココアは普段の生活でもそういうあしらわれ方をされているらしい。ある意味それも一つの能力と言っても過言じゃないのだろうか。それよりも、本人に自覚が無い以上チノにも聞いてみる必要があるだろう。

奏斗はリゼ達にチノから話を聞いてくることを伝え席を立った。

「チノちゃん、ちょっと良いか？」

「…はい、別に構いませんが」

その何ともピリピリとした声色からチノの機嫌の度合いが計れた。

今は奏斗が話しているから良いものの、ココアだったら直ぐに断って話も聞いてくれないのではないだろうか。

「ココアと何かあったのか？」

「……昨日のことです」

しばらく口篭った後、ようやくチノの口から理由を聞き出すことができた。

話によると、毎日少しずつやるのが楽しみだったパズルをチノがお花を摘みに行っている間に、ココアがいつの間にかほとんど完成させていたらしい。それに加えて1ピース足りないというおまけも付いてだ。

奏斗はリゼ達にそのことを話すと、全く予想通りの反応が返ってくる。

「凹むなそれは…」

「で、でもパズルのピースは元々一つだけ足りなかったよっ！」

あたふたと身振り手振りをして必死に弁明をするココア。

流石にココアがそんな非道な事をする人間じゃないということは、チノも勿論奏斗もリゼも十分に理解している。

「でもチノちゃん、楽しみがとられてショックだろうな」
「そうだろうな」
「わ、私……お姉ちゃん失格だぁ～～!!」

そう叫んだまま、ココアは外へと出て行ってしまう。

「お、追うか？」
「大丈夫です、その内帰ってきますよ」
「しかしなぁ……」

チノが問題ないと言っても、リゼはどうも納得がいかない様子だ。
どこまでも過保護なリゼに奏斗はつい笑いを零すと、リゼは顔を少し紅潮させて頬を膨らませた。

「な、何笑ってるんだっ！」
「心配なら行ってきたらどうだ？客が少ない今の内だと思うけど」

見回してみると客はまばらにいる程度だったので、今行くのには絶好の機会だと言えるだろう。
リゼもそう考えたのか、顔を明るくさせて店のドアへと走っていった。

「それじゃあ行ってくる！」
「ああ、いってらっしゃ……ってもう行っちゃったよ」

まるで我が子を心配するお母さんみたいだな、と奏斗は思ったがリゼに聞かれてはきっと怒られるのが目に見えたので心の中に閉まっておいた。

（さてと、俺もするべきことをしようか）
ドアの方を見つめ浮かない顔をしているチノへと体を向ける。
「ココアのこと許してやったらどうだ？あれでも反省…はしてるみたいだし」
「変な間が空きましたね？」
「こら、いらんこと言わない」
「あうっ」
誤魔化しも兼ねてチノのおでこに軽くデコピンをすると、可愛らしい声を上げて両手でおでこを押さえる。
「ふふっ」
「ははっ」
あんまりにも可笑しくなって二人で顔を見合わせ笑い合う。
笑い声は暫く続いたがやがて収まり、チノは少しずつ話し始めた。
「……このままではいけないということは分かっているんです。でも……その、あんな態度をとってしまってどう接すればいいのか……」
「そうだなぁ、そういう時って気まずいよな」
「きっと奏斗さんなら直ぐに解決してしまうんですよね」
不貞腐れたようにそっぽを向き、先刻とは全く種類の違った〝怒り〟の感情を見せた。正しく言うならば〝嫉妬〟だろうか。
数秒前にも見せた笑顔もそうだが、チノにしてはころころと表情を変えてくるのが多くなってきている。これは段々と打ち解けてきている兆候なのではないか、と奏斗は推測していた。
勿論それもあるのだろうが――――――――答えとしては、チノは今のところティッピー（叔父さん）とタカヒロ、そして奏斗だけにしか自分の本当の気持ちを曝け出していない。最もそれは無意識にではあるが。

「チノちゃんの俺に対しての評価どうなってるんだ？」
「それは、もう――――」
「チノちゃぁぁぁぁぁぁあん!!」

その先の言葉が聞けるかどうかの間際に、ドアから突然ココアが手に何かを持ってやって来た。その後ろから息を切らしたリゼが続いて入ってくる。チノが何を言ったのか気になる奏斗だったが、今はリゼの介抱を優先する。

「はぁ…はぁ…」
「大丈夫か？」
「止めようと思ったんだが、無理だった」

リゼが指をさす方向に目を向けると、自然とココアの持っている箱のような物に目が行く。奏斗は近くまで寄って行き概要を読み上げた。

「木組みの街のジグソーパズル……８０００ピース!?」
「やめとけとは言ったんだが全く聞かなくて…」
「新しいパズル買ってきたから、これで許してぇ！」

チノは困った顔をしながら奏斗達を見るのだが、当の二人もどうしてよいか分からなかった。
皆で一緒に固まっていると、気まずそうな声で「あの、お会計お願いします」と店内に響きラビットハウスの店員三人はバタバタと仕事へ戻っていった。ココアに渡された無駄に大きいパズルの箱を奏斗は静かに、自分が座っていた席に持って行ったのだった。

△

「あの、これはどういう……」
「見ての通り、パズルをやってるんだが……」
「多すぎて終わらないのね？」

結局あの後、ココアとチノの二人で８０００ピースのパズルをやることになったのだが当然の如く終わらず。奏斗とリゼも参戦し、一丸となってパズルをしているのだが一向に終わる気配が見えない。そんな時にココアが「千夜とシャロにも手伝ってもらおう」という提案を出し、精神的に参っていた三人はその案に賛成して今の状況になっている。

「もう私疲れちゃったよ～」

「「言い出しっぺはココアだろ！」」

「先輩方は案外平気そうですね」
「まぁ」
「慣れてるからな」

こんな時でもツッコミする気力は相変わらずある奏斗とリゼ。
リゼは軍事的な訓練で精神力も鍛えていることもあって、長時間の作業は屁でもないだろう。一方奏斗も、父の趣味（プラモデル）の関係上こういった作業的な事に慣れていた。今になって、手伝っていて良かったと感謝している奏斗であった。
千夜とシャロも黙々と作業する二人に感化されてか、床に腰を下ろして作業を始める。初期メンバーの二人もあと一息、と気持ちを入れ直して再開する。

「ジグソーパズルなんていつぶりかしら」
「端っこからやっていくと楽でいいよね！」

そう言った後、ココアは自分が作っていたパズルをリゼが作っていたパズルと合体させる。シャロもチノが作っていたパズルと合体。その合体したものが奏斗の作っていたものと再び合体。

一気にパズルが進むが――――

「役立たずでごめんなさいっ…！」

1ピースも合わせることができない自分に絶望する千夜。

「ほ、ほら千夜ちゃんの作ったパズル、ここと合体できるよっ！」

「あら、本当♪」

(((感情の起伏が激しすぎる)))

その後も黙々と作り続けた一同だったが――――

「皆、集中力が無くなってきてますね…」

時計を見れば、もう開始から既に丸一時間が経っていた。

一度休憩することを伝えるためにその場を立って呼びかける奏斗。ココア、リゼを除いた人はそれを聞くや否や楽な体勢をとり始める。

「おいリゼ、休憩だ」

「あはは～見ろ～ハートマークが出来たぞ～！」

「ジグソーパズルでここまで壊れるのかっ!?」

終始笑顔のままであることに少なからず恐怖心を抱いた奏斗は、肩を揺さぶることでリゼの意識を取り戻させる。

「ん？」

ここで、リゼがある違和感に気が付く。その様子に気が付いたシャロや奏斗もどうしたのかとリゼを見る。

「これ、下に何も敷いてないんだけど完成したら一体どうするんだ？」

これを聞いて一同固まる。

千夜は涙目になりながら、ガタガタと体を震わせる。

「わ、私怖くて言えなかったのっ！こんな空気になるのが分かってたからっ……！」

「それ言うと余計にシリアスになるからやめような？」

とは言うもののあれだけ必死になってやってきたものが全部蔑ろになったという事実は変わらず、周りに重い空気が圧し掛かる。

そんな空気を察知したのか、ココアは突然立ち上がり手のひらをパチンと合わせる。

「そろそろお腹空いて来る頃だし、みんなの分のホットケーキ作ってくるよ！」

「あっ、私も手伝います」

チノもあとに続いて二人が部屋から出ていくのを見送ると、リゼは安堵のため息を漏らす。

「チノとココア、自然と仲直りしててよかったよ。ギスギスしてた時はどうしようかと思った」

「本当、労力掛けてジグソーパズルやってよかったな…」

口々にこれまでの苦労を吐き出す二人。

その発言にシャロと千夜は意外、というような顔をする。

「えっ、あの二人喧嘩してたんですか!?」
「私にはいつも通りに見えたわよ？」

「「えっ」」

思いがけない反応に思わず狼狽する二人。千夜とシャロが鈍いだけなのか、はたまた自分たちが勘繰りすぎているだけなのか。その答えを知るのはチノとココアしかいない。
そんな二人の反応を見たシャロはクスクスと笑いながら、これまでに思ってたことを言った。

「先輩方って結構過保護な所ありますよね」
「そ、そうかなぁ？」
「でも、ココアとかは特に子犬って感じで保護欲そそられないか？」

奏斗の意見に言葉より先に笑いが起こる。ちょっとの言葉で次々と表情を変えたり、その破天荒な性格で彼方此方に振り回していく姿はまさにといった感じだからだ。

「まぁ何にせよ、あの二人がまた仲良くなってくれれば――――」

奏斗が次の言葉を紡ぐ前に、ドアがいきなりバタンと勢いよく開かれる。皆してドアの方を見れば涙目のココアが。この瞬間、四人は嫌な予感しかしなかった。

「チノちゃんが口聞いてくれなくなったよぉっ!!」
「自分で何とかしろ！」

無慈悲なリゼのツッコミの後、ココアはシュンとしながら再びキッチンへと戻っていく。
ココアの登場によりすっかり話の腰を折られてしまった四人だっ

たが、気を取り直して話を再開する。

「俺達ってかなりココアに振り回されてると思わないか？もちろんいい意味で」

「ほとんど日常みたいなものですよね」

「けど、ああいう所こそココアちゃんの長所じゃないかしら？」

「度が過ぎると大変だけどな」

半ば呆れながらも、結局のところココアのことを快く思っている。その不思議な性格が自然と人を引き寄せるのか、彼女の周りにはいつも人が集まっている。そうしてココアが中心になって物語が展開されていく。奏斗は今になって、そのことに気が付いたのだった。

「さてと、そろそろパズル再開するとしよ――――」

雑談もこれまでにして、またパズルを再開しようとするが再びドアが勢いよく開かれる。今度は焦ったような顔をしたチノがそこに立っていた。

「な、何かあったのか!?」

これにリゼが対応する。

この時、奏斗は頭の中で先程のココアの時の対応の仕方と、チノの時の対応の仕方を密かに比べていた。そして少しばかりココアに肩入れをしたくなる気持ちになった。

「コ、ココアさんがケチャップで死んでいますっ！」

「……それはただ構ってほしいだけだから気にするな」

「くっ、涙が…」

「奏斗先輩？」

最後までぞんざいな扱われ方をされるココアに、奏斗は心の中で涙するのだった。

△

ホットケーキも食べ終わり、８０００もあったジグソーパズルは無事完成してひと段落。完成したパズルは、また今度店の壁に飾るとココアが話していた。

「結局消えたパズルのピースは何処へいったんだろうな？」
「そういえばそんなこと言ってたな」
「そういうのって忘れた頃とかに出てきたりしますよね」

ココアが言っていた消えたパズルのピース。話には出てきてはいたものの、ついに見つかることはなかった。

「意外とベッドとかに落ちてるものなんだよな――――って」
「あ！」

奏斗が冗談でベッドに置かれていた枕をどけると、ポツンと一つ。パズルのピースがあったのだ。
ほんの気まぐれにより、今日は運よく二つのジグソーパズルを完成させることができたのだった。

第３０羽　「わしも若い頃はチヤホヤされたものじゃ」「それは今もだろ、親父」「黙っとれ」

　木組みの街を訪れてから早数ヵ月。当初はどれもこれもが新鮮で、圧倒的で、もしかすると海外にでも来てしまったのかとさえ思っていたあの頃。道行く中にある街灯や屋台店、すれ違う現地の住民一人一人に魅力を感じざるを得ない程だった。が、人の慣れというのは恐ろしく、そのどれもが当たり前になっていって今ではすっかり一木組みの街の住民へと成り代わってしまった。

　何というか、侘しいものがある。とはいえ、過ぎたことを一々気にしていても仕方がないというのも事実であり、人はそういう生き物なのだと言われればそれまでなのだ。ただの高校生に出来ることと言えば、勉学に励むだとか、バイトに明け暮れるだとか、若しくは大好きな人とイチャイチャしたりだとか。そういった高校生らしいこと必死になって楽しむだけ。人生云々について考えるにはまだまだ早いのである。そういうのは、もっとこう、大人になってからするべきだ。あの頃の日常が一番輝いていた、と語り合える日が来るまでは心の奥底に大切に保管しておくべきなのだ。

　そう。結局のところ、今を大切に生きられればそれで良いのである。

「っていうのを考えてみたんだが、どうだリゼ？」
「奏斗……何だかじじくさいぞ、お前」
「えっ、嘘だろ」

　相当自信があったのか、リゼの口から発された言葉にあからさまに肩を落とす奏斗。

　現時刻は学校帰りの放課後、その道中。隣を歩くリゼは意にも介していない様子でお前らしくもない、と更に付け加えて言った。

「まぁでも、奏斗の言ってることは分からなくもないぞ？最近のココアなんかは見違えたよな」

前までは道に迷ってばっかりだったのに、と我が事のように微笑んでみせるリゼ。

確かに、今のココアは特に危なっかしい出来事にも遭っておらず、寧ろ順調なのではないかと思われる。ラビットハウスでの仕事も板に付いてきているようだし、ココアのあの性格からして学校生活について何か不安があるというわけでもないだろう。

「いや、アイツのことだ。どうせまたトラブルでも持ち込んでくるぞ」

「奏斗のココアに対する視点が垣間見えた気がする」

「お前だってそう思ってるだろ？」

ぐぬぬ、と押し黙ってしまうところを見るとどうやらリゼも心中ではトラブルメーカーな奴とでも思っていたらしい。改めてココアがどういう扱いをされているのかを確認した奏斗は、その不憫さからか無意識のうちに掌を合わせていた。

「そ、それはそれとして。奏斗は実家宛てに手紙とか書かないのか？」

「何だよ、藪から棒に。親父に書くことなんかこれっぽっちもないぞ」

「とんだ親不孝者じゃないか!?」

「最低限度として、あの裏切り者には業務連絡程度で良いと思ってる」

「奏斗の親父さんはお前に一体何をした!?」

未だ復讐の念消えず、という訳でもなく。ただ単に近況を報告すれば絶対に揶揄ってくるに違いないと思っただけのことだった。彼も自覚はしているが、何とも身の回りには女性が多い。当然、奏斗は沢山の女性と仲良くなった、などと報告するわけにはいかないのだが、そうせずとも父には知られているのが腹立たしいのである。皆もご存知の通り、奏斗を例のお嬢様学校に推した人物というのが彼なのだ

から。
悔しさからか、呆れからか再び肩を落とし大きな溜息を吐く奏斗。そんな事もいざ知らず、何か事情があるのだろうと純粋な気持ちでその様子を眺めていたリゼは無言のまま彼の背中をぽんと叩く。彼に向ける眼差しはまるで子をあやす母の如し。

「ほら、後でコーヒー淹れてやるから元気出せって」
「…？あ、ああ」
「ふふ、とっておきのを淹れるから覚悟しておけよ」

何か重大な勘違いをしている、奏斗はそう思った。

△

「チノちゃん、笑っ、て……」

「何故こうなった」

所変わってラビットハウス。涙ぐみながら何かを訴えるココアとツッコミを入れる奏斗とリゼの姿があった。
やはりラビットハウスで落ち着きながら優雅にコーヒーを飲むということは不可能らしく、これもまたやはり、ココアを起点とした愉快な出来事が起ころうとしていたのであった。
事の成り行きはこうだ。
ラビットハウスに着いた奏斗一行。先に帰宅していたチノとココアに出迎えられながら、ひと先ずは約束のコーヒーを頂こうと奏斗はカウンター席に座り、リゼは制服を着替えに店の奥へ。その間にココアとチノ、奏斗も交えて他愛もない世間話をするのだが――――恐らく、ここでこの店の静寂を破る決め手となったのだろう。奏斗はココアから実家に送る手紙を書いていること、そして一緒に送るための写真を撮っている最中だ、という話を聞く。

写真を撮らせてほしいと迫られたのでこれを快く受けた奏斗であったが、この時、ココアが思い出したように彼に一つの質問を投げ掛けたのだ。

「……奏斗君ってチノちゃんが笑ったところ、見たことある？」

狼狽えるチノ。質問の意図が分からず当然だ、と言いながら素直に頷く奏斗。口を大きく開けながら静止するココア。時既に遅し、といった様子で額に手をやるリゼ。

そこからの展開は凄まじかった。ココアはギラギラとした目をチノに向けながら、体感一時間、実に数十分に渡り笑って笑ってと懇願し続ける。そこまでして粘るココアは呆れを通り越して賞賛に値するが、頑なに拒み続けるチノもこれまた凄い。

「あの時のココアさんはまるで獣のような眼をしていました」

後にチノは語る。

そういった経緯があって冒頭に戻る訳なのだが、如何せんチノが笑わない。笑ったと思えばココアはパンの焼け具合を確かめに行っていたりなど間が悪く、遂に奏斗は運の悪さを指摘し始めた。

「私、今日の星座占いは一位だったよ！」

「ココアさん、占いなんて信じているんです？」

「コーヒー占いしてるチノちゃんが言ったらダメだろ」

情けない声をあげながら脱兎の如く逃げだしていくココアを尻目に、奏斗はすかさず抗議する。心なしかチノの頭に乗っているティッピーが悲しんでいる様にも見えたが敢えて見て見ぬふりをした。知らぬが仏、である。

「ほら、チノ。本当は恥ずかしいから照れてるだけなんだろ？」

いつの間にチノの背後に回っていたのか、そうチノに諭していたのはリゼだ。
擽ったら笑うだろー、と心底楽しそうな表情で横腹を中心に擽っている。一方チノは微かに身を強張らせ、身体を右往左往する細長くも力強い手にされるがまま、与えられる刺激に身を捩じらせ――――。

「リゼ、アウトだそれ」
「……ああ、私にはこれ以上は無理みたいだ」

直ぐさまチノから離れて自分の持ち場に戻っていくリゼ。あそこで踏みとどまれたのはリゼの類い稀なる忍耐力のおかげというべきか。いや、しかし。あれ以降続けていたとなると、もはや犯罪の匂いしかしない。とはいえ、奏斗にとっては眼福この上ない絵面であったのは間違いないのだ。一方的だったとはいえ二人の美少女が組んず解れつしていたのだから。

「奏斗さん…？どうかしましたか」

考えていたことがそのまま顔に表れていたのか、不思議そうに見上げてどうしたのか、と問うてくるチノ。奏斗は慌てて口許を押さえ顔を背けるものの、その行動が尚更疑惑を抱かせたのか更に近寄っては逃がさぬようきゅっと服の裾を掴んでくる。

「いや、何でもないぞ？」
「…むぅ、怪しいです。隠し事はよくありませんよっ」
「だから言ったろう、何でもないって。それに見てみろチノちゃん、リゼがニヤニヤしながらこっちを見てるぞ？」

奏斗に指摘され、はっと後ろを振り返るとリゼが何やら微笑ましい目で見ていることに気づく。

ニヤニヤしてたのはお前だろ、この変態！と奏斗がリゼに怒号を浴びせられているのも二の次に、自分のしていた行為を反芻していくうち、徐々に頬が熱くなるのを感じるチノ。そこに追い打ちをかけて、白いけむくじゃら（ティッピー）が彼女に何かを囁くが、最後まで言い切ることは叶わず強烈なチョップをお見舞いされる。余計なことは言うものではない良い具体例となった瞬間であった。

閑話休題。いつしかほとぼりは冷めるもの。

ようやく落ち着いてきたラビットハウス店内に、これ以上一体何が来るというのか。いや来ない。

「千夜ちゃん連れてきたよ～、今からコントで笑わせるね！」
「本当に間が悪いなお前」
「千夜は仕事中じゃないのかそれ!?」
「ココアさん、空気読んでください」
「帰ってきて早々にこの言われ様っ!?」

上から順に奏斗、リゼ、チノ。リゼ以外は酷い言い草である。

「いきなりなんだけど、私のおばあちゃんには好きな食べ物があるらしいの」
「千夜は千夜でマイペースだ!?」

こうなるとここには法も秩序も存在しない。今この瞬間、ラビットハウスはココアと千夜の独壇場となる――――！

「でもその名前をちょっと忘れたらしくて…」
「あはは、おっちょこちょいさんなんだね」
「そうなの～、それでね？その食べ物っていうのが」
「お汁粉でしょ！」
「……正解～！」

「ちょっと待て」

思いも寄らない所でリゼが横槍を入れ、はてと首を傾げる漫才コンビ（ココアと千夜）。

そもそも、こういった漫才は序盤に正解を示してはいけないのだ。この際、漫才として成立しているかどうかは置いておくが。

「……こういうのも、悪くないですね」

漫才とは何たるかを力説するリゼの声が響く中、ボソッと本音を零すチノ。

そこがまた不器用な彼女らしいというか、何というか。どうせならばココアの前で聞かせてやればいいのに、そう思うと同時に今この瞬間だけは目に焼き付けたい。そんな淡い願望を叶えるが為に奏斗はただ無言を貫き、新たなメンバーを迎え入れた漫才トリオのコントを静かに、それでいて笑顔で見つめるチノを穏やかな気持ちで見つめていたのであった。